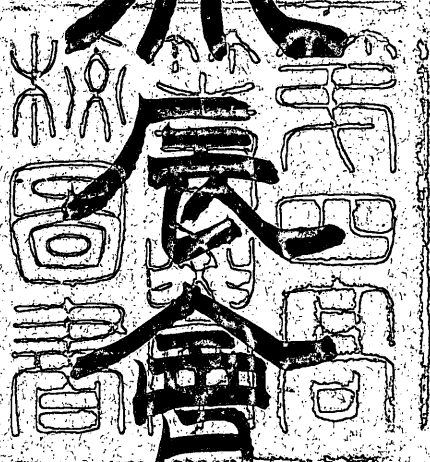


明治二十八年二月二十八日發行

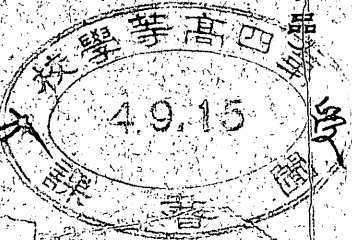
(非賣品)

北辰會雜誌



第四高等學校
北辰會

第一號



北辰會雜誌第壹號目次

序詞
發刊之辭

祝詞

北辰會雜誌發刊に就て 大島 誠治
北辰會の創立を祝ひて 安木田 頼方
外祝詞數章、和歌、新體詩、詩十數首

論說

偽作文書研究の一例 浦井 鏡一郎
生物學豈忽にすべけんや 市村 塘
社會の進歩と詩歌の發達 桐生 政次

史傳

國學復興者としての契沖 埋木 乃翁

文苑

雁の賦 うきね

詩歌數十首

雜錄

火藥の話 今井省三
感愴錄 泡しま青蛾
(李婉兒)

Schlömilch & Roche's remainder on

Taylor's series N. A. S. I.

批評

校友會雜誌第四拾三號を讀む 愈唐直言生

雜報

初見の辭、外數十件

附錄

陸上大運動會記事
本會規則
本會役員姓名錄

序詞

學友會の解會は誠に止むを得ざるに出づ、惟ふに校風の發揚や、忠告善導の道や、運動の事、講文の業、豈に一日も忽にすべけんや、是れ余輩不肖が昨夏以來常に思ふて歎まざる所、乃ち漸く好機の熟するを保ち、去秋以來經營苦心、今春に至りて茲に學友諸君の贊翼を得、此會の成立を見し所以なり、曩に征清の師一たび起りてより、邦家の形勢頓に面目を一新し、吾人の任務益重大ならんとす、吾人豈に夙夜に匪勉、以て涓埃の微功を庶幾せざるべけんや、抑も本會の期する所は輯睦和協、文弱に流れず、武愚に失せず、智徳を率勵し、軀體を鍛鍊し、以て大東帝國純良なる臣民の素を作らんとするに在り、今や本會新に成立す、創始の易にして守成の難きは、萬口の等しく唱ふる所、則ち相共に力行以て本會の趣旨を貫徹せんとを期せざらんや、雜誌發刊の時に際し聊か卷首に一言す、



明治廿八年二月

創立者

北辰會雜誌第一號

發刊之辭

都。我北辰會は今や帝國が大陸に膨張し思想界が宇内的大觀を呈し來らんとする一大盛時に中り吾曹半千の健兒が同盟結社として兀たる白山の麓に生れき。渠が使命の何底事なるかは渠自既に告白せり今復言を須ひざる可し。夫男兒世に立つ先要するは壯幹健驅、然も是區々たる五尺の躰、男兒世に處する欠く可らざるは三寸不爛而も是饒々たる刹那の辯、豈別に此多望有爲の鐵幹健兒が活潑々地の運動と健全不拔の精神とを反映して永く吾曹健兒が團結の紀念史を殘すと共に併せて其思想界の光焰幾萬丈なるかを天下に傳ふるもの莫くして可ならむや、三寸の筆は實に此大任を帯びて起ち他の二部と鼎立して雜誌部起る、既に然り本誌發刊の目的や明々白々たり矣。而れ共此盛時に方りて生れし本誌は其榮大なると共に其任や甚輕からざるを以て能く之と相伴ひて後に落つるなきやは吾曹不肖戰々として虞るところなり會員諸氏乞ふ協賛助力雜誌部をして光芒鑿々として萬古に輝ける北辰の名に負くなく能く此大任を果さしめよ。而て特に二部諸君に望む所あり、之を幾千の學校雜誌に徴するに誌面由來二部と一部の間に冷熱の傾あるを看る、格物窮理切磋研磨の二部諸君豈論す可きの理、説く可きの事莫らんや、而て論ぜず説かざるは吾曹怪訝に耐えず本誌をして此間の權衡を保ち花實兼備えしめよ、至囑々々。

我校嚮に學友會ありしも憾阿數奇中道にして仆れ感慨痛働の血涙中に葬らるゝの非運に會しき、後又壬辰子の逝くあり吾曹をして轉秋風急にして白雲飛ぶ荒涼愴悽の感に耐えざらしめき、然るに今や再秃筆を洗つて

起ち全國六高等學校の同朋諸君と誌上相見ゆるの機運に際す、何等の幸ぞや、吾曹由來北陸の邊陲に在る者、宏博深遠の識と清楚絢爛の筆は素より諸君と相馳騁するに足らざるもの多からむ而も一片木強狷介の性を抱きて膽を澎湃たる北溟の怒濤に養ひ節を體々たる白山の積雪に學ぶもの茲に年あり養て成らざる學びて及ばざるやは自知らず、此節を持し此膽を抱きて諸君の驥尾に附し天下幾萬青年書生が爲に聊摸範たらんとする願は半歩を諸君に譲らざることを敢て誓ふ、若夫事に馴れず言に訥なるの一事に臻りては諸君の誘掖を煩はさむとす、請ふ指示に吝なる勿れ。嗚呼、六出の瓊華漸稀に亢突たる越山山骨秀づるの時に當り一枝先春を報ずるものは我北辰會雜誌なり、續くものは馥郁爛熳たる紅紫千朶か、來るものは黑雲驟雨耳根を劈く霹靂乎、月色霜を欺き水天彷彿たるものあらん、黑風白雨落花片々、凍雲皚雪玉屑續紘たるものも或は之あらん、其來るところつゞところの何等の光景たるを問はず節は常に皚雪の潔きよりきよく膽は益北溟の大より大に而も帝國が大陸に膨脹するに従ひて北辰の光層一層の明を加えんとは吾曹が造次顛沛も忘れざるところ千難萬障を排して期するところ、若夫雜誌部が本會員の活動と精神を寫すに於て如何なる技倆を呈するかは豫め多言を須ひざる可し乞ふ之を今後の本誌に徴して知れ。

北辰會雜誌が世に出でんとするに當り聊か蕪言を陳して發行の辭に代ふると斯の如し。

祝辭

北辰會雜誌發刊に就て

大島 誠 治

維時明治二十八年二月春光の好時節を迎へんとするに際し我第四高等學校北辰會は勃然として其第一號雜誌を發刊するの機會を得たり

抑々我北辰會は青衿諸子か正課履修の餘力を用ひて事に此に従ひ以て學藝を講究し體育を練磨し徳性を涵養し純良なる美風を發揚せんと期すへきものなれば則ち其奏効も亦尠なからざることを信す

蓋し會團の成否は會員の協同一致に出つると否とに賴れり今や北辰會既に成り而して其機關も亦備る是會員の協方同心其大方向を一にしたるものにあらずして何そや

今日以往會員相接するに益々協同一致を旨とし共に胸襟を披き赤誠を吐露し互に忠告善導して友誼を鞏固にし志操を高潔にして學藝體育を研磨し此機關を利用して益々會員の美徳を發揮し菁莪棫樸の蹟を擧ることを得は豈獨り本會の爲めのみならんや茲に本會初號の雜誌發刊に際し一言以て之を祝し併せて將來の希望を述べ

北辰會の創立をいはひて

安木 田 賴 方

ことしのはしめを祝ふは何國も同じ事とそいふなる年始に大御世をいはふとて常盤なる門松千尋の竹日のみ旗かゝけつゝ注連引渡して萬世をたゞへうから打集ひて屠蘇の香をめて小瓶の梅柳玉椿はけふ來る年を迎ふる設と時めきたるもいとめてたくありけりあだし國にも歳の始の月を獨逸にてはマヌアル佛にてはマンツ井エ英にてはマヌアルなと月をさしいひて年の始め月のはしめにはこれを祭るを習ひとし十二月の始

を守れる神として正月といふにこの語を用ひ來たりしなれど後世は此語の本も忘れはつるやうに成にたり月を崇めし國此外にも多しと物に見えたり今第四高等學校内に北辰會てふまどひの創立の期に望みて其はしめをしもいはふはたれもぢやむ心なるへしことに去年より今年へかけ皇大御軍はあやにかしこかれと

皇祖

吾勝尊の御名にあえてまかみ鳴く野も虎ふす山も稜威の子別ち別て戦へは必勝ちせむれはかならずやぶり勝さびに勝ち進むを常とし大みいつは

天祖の詔の如世中をおほふへき時の今し至れるを尊くも又くすしかりける古人の北辰其どころにゐて衆星これにむかふか如しとあはれはれ今の大御世のあり形になんありけるかゝる類ひもあらぬほきこと多かる此年に創立する北辰會はしも北辰の動きなきか如いや常しへにもかなど前途をことほき事の始をいはひシヤン
ウ井エなどいふ日の其神の御子とます

現つ御神のみ爲國の爲に學ひの道いやすみ進みや勤めつとめむとの此會なれば

あら人神萬歳 帝國萬歳 海陸軍萬歳と共に北辰會萬歳といはひまをすにこそ

祝辭

高瀬 武次郎

刻々膨脹時々發達文に武に前代未聞の盛時明治二十有八年一月一日朦朧たる北陸の天皓々たる加賀の地體々たる白山の乾位巍々たる金城の坤方尾山靈廟の陽兼六公園の畔峨々たる形宮の内北辰子降誕す北辰子既に臍紐を截り己に稚心を去る嗚呼佳哉北辰子の誕辰。敢て問ふ北辰子君將に何を以てか我黨を利せんとするや北

辰子瞿然として座を失して曰く汝何を必しも利を言はん唯夫れ徳器を成就し體軀を強壯にし智識を交換し美風を煥成するにあるのみと。重て問ふ君知るや否や君を組織する分子の如何なるものなるを北辰子欣然として微笑して曰く吾之を知れり抑も我を成せる分子たる理化學者の所謂分子に非ず亦た生物學者の所謂分子にあらず其物や一種特別其數や殆んど數百則ち是れ一郷の俊髦一閭の英俊なり吾己に郷閭の英俊より成る其發達するに至りては武に文に百般の技藝に天下の英雄を出すや期して待つべきなり或は鐵柁峰頭三軍を叱咤せし牛若丸の如き英武天縱智勇絶倫孤掌の間に六十餘州を翻弄し餘威以て鷄林八道を席卷したる日吉丸の如き忠節義勇嚴霜烈日凜乎として千古不朽多聞丸の如き或は峻拔奇矯韓昌黎の如き瀏利痛快蘇東坡の如き縱恣不羈李太白の如き感愴愁涼杜子美の如き或は巧思妙想「アット」の如き格物致知「ニュートン」の如き神智至巧「デカルト」の如き實驗叢理「ダーウ井ン」の如き或は獻身達志「ユロンパス」の如き或は經濟に「アダムスミス」の如き政治に「リセーリユウ」の如き國風に紀貫之の如き俳諧に芭蕉翁の如き凡そ我を組織する分子は則ち將來我國社會を組織する分子なり我を組織する分子己に此の如し我形骸性質の來由既に明白焉んぞ煩しく遺傳論者の所謂「レヴァルシヨン」を借るを要せんやと。嗚呼壯哉此語嗚呼大哉此言若し此大言壯語にして期し得べくんば余の祝意更に一段の盛を加ふべし豈に唯た一大白を浮ぶるのみならんや且つや君自ら稱するに北辰の二字を以てす故なくして可ならんや或は曰く名は實の實なりと余謂へらく然らず凡そ命名の方法一にして足らず何そ必しも實の實とのみ云はんや或は自ら期する所を以て名とするものあり或は自ら警戒する所を以て名とするものあり其他千差萬別なりと雖も物として名を具へざるはなし名なきものは名なきを以て名となす無名指の如し北辰子の名譬へば北辰の其所に居て而して衆星の之に共ぶが如してふ語を以て自ら期するも

のにあらざるなきか若し其れ然りとせば其抱負や廣且つ大なりと云ふべし然りと雖も天下青年の泰斗となり天下青年の牛耳を執らんと欲せば豈に亦た之れが準備なくして可ならんや請ふ宜しく茲に廣且つ大なる抱負を全ふするの大計を定め競争場裡勝を制するの道を講すべし且つ夫れ君か耳目たるものは所謂北辰會雜誌にあらざる願くは俗倫の聰を借り離婁の明を借り以て吾黨の爲めに天下青年の動靜云爲を視察せよ 特に北辰子に對して切望に堪へざるものあり何そや他なし去歲七月城州吉田の里西風急なりし時王乘鷹氏の離愁篇に賦せし所の情を懷ひ東都春夜墨陀の雨に沐するの人西都春宵嵐峽に花を訪ふの客薩南春夜櫻島の雨に浴する朋龍南夏夜白川の螢を賞するの友北奥秋夜松島の月を觀るの客北陸冬夜尾山の雪を賞するの人山口秋夜芳敷の月を觀る人の消息を審にせんことを望む嗚呼今や東西南北に袖を分つと雖も原と是れ台麓鴨涯同窓の友胡馬北風に嘯き越島南枝に巢くふと花の旦月の夕寒窓孤燈の下兀坐書を閱するの時豈に舊盟を追懷するの情なからんや况んや他日相ひ提携して共に爲すあらんとするの士をや 余今始めて吾黨の爲めに其間に立て耳目の任を全ふするものを得たり豈に祝せざるべけんや嗚呼善哉北辰子當に事に此に従はんとす嗚呼善哉北辰子往け欽哉正に是れ威海衛陷落の快報に接し手の舞足の蹈む所を知らざるの時聊か燕辭を陳して佳節を祝し併せて將來の萬福を祈ると云爾

祝北辰會雜誌之發刊

垂 東 生

物運用の法其の宜を得ざれば胸に萬卷の書を藏し心に經綸の大才を抱くと雖も是れ徒に字彙たるのみ死材たるのみ孰か之を爲好望頼むべきものと謂はんや且夫れ事は經驗を要す自ら以爲らく此れ是なり

と未だ必しも其の是なるを見ず自ら斷して可と爲すも未だ必しも其の可なるを知るべからず其れ是を以て其の始に方てや經營慘憺思を苦め心を勞し唯た其の得ざらんことをこれ忍る已に行て而して其の功績見るべきに至らば必ずや大功を收むるに至て則ち止む唯だそれ此の如きのみ光武蕪蕪亭の豆粥滹沱河の麥飯惴々然として心安からざるの日は何ぞ東漢中興の大成を期せんや源大頭公の石橋山阿朽洞に伏匿するの時は未だ必しも鎌倉朝業の雄圖を豫想するを知らざるなり其れ然り隴を得て而して蜀を望むは人生の常情必ず然らざるべからず嗚呼我校四千の多士雄偉卓發の才僕を更へて數ふべからざるものあらむ然りと雖も惜むべし其の之を試みるに良器なく空しく駿逸の才を抱いて槽檻の間に鬘を垂るゝもの多し將た何の所にか其の技の長短識力の高卑を辨ざるを得ん是れ吾人の大に憂ふる所なり今や幸に北辰會雜誌の創刊せらるゝあり以て大に吾人の穎鋒才華を待つ然らば則ち吾人また其の患なけんとす北辰會雜誌は是れ吾人才識の試金石なり盤根錯節なり吾人亦何をか悲まん顧みれば昨夏以來六師遠征し關外の將士は異域に塵戰し國民の元氣は旺盛して天を衝く精神の磅礴する所發して文となり溢れて章を爲すもの未だ必しも雄快奔放波瀾動盪海水立つて山嶽崩るゝの概なくんばあらず時維れ乙未陽氣の發するの交抑條嫩芽を生じ飛燕將に來り舞はんとす此よりの後我校濟々たるの多士毫も詠り藻を摘り各々其の英華を競はし北辰會の盛將に逆じめ料られざらんとす何ぞ當に北辰七星の宗を以て自ら甘ずるのみならんや

所思を述べ以て祝辭に代ゆ

皓 嶽 樵 夫

白山元として雲表に聳え北海怒濤を捲いて沿岸を洗ふ其間、平野森林連亘し湖沼川流相貫通す天然の美を鐘め人爲の精を竭し風雨霜露の霑被する所、能く地の利をなし土壤豊饒にして魚介亦海内に絶す若し天地精靈の氣凝て偉人をなすと云はば偉人斯土を措て又焉にか索めんや、白雪皚々たる北地由來天然の風景に富むと稱す而して之が腹心たる加能諸州、利家公百萬石の舊藩下は果して幾十の偉人をして邦家千歳の史上に濶歩せしめたるぞ予輩生を此北陬に亨くるもの史を緝くに及んで未だ曾て長息せずんばあらざるなり、玄妙無限なる宇宙の大より油々然以て瞬瞬に均しき人生を觀じなば這般の慨歎も亦徒に痴人の夢幻に異ならずと雖ども苟も熱血を湛へて有情界に彷徨するもの誰か一片、功名利達の大希望を有せざらんや已に此希望あり而して發するに時なく顯はるゝに所なく、空しく稀世の名器を抱て黄泉に逝く人生の最大恨事豈之に過るものあらん、我郷古來偉人に乏しからず而も遂に顯はるゝの時なく或は稀に之ありといへども百僅に一二あるのみ餘は皆機を失して出でざるもの之を如何んぞ夫れ長大息せずして可ならんや山川若し情あらば亦將に千斛の愁涙を注ぐべし然りと雖ども天は固と一視同仁、會々一方にのみ幸する如きはそも異數なり今や皇澤天下に瀾漫し事物皆正道に順ひ、草莽の臣と雖ども才あり膽あるものは己が志の欲する所は以て碩學たるべく以て將相たるべし所謂機會なるものは亦た將に弱志者が萬に一を僥倖せんとする瞻語として度外視せられんとす是に於てか數百年來天下に知己なく或は偶々之あるも千歲に顯はれざりし彼の不幸なる偉人のみを且迎ひ且送りたる山海川野の精靈は大に其怪力を驅て人心を鼓舞し茲に帝國に雄視すべき巍然たる第四高等學校を造營し、東より西より南より北より大八洲裏、有爲の少年にして苟も天下の爲めに人類の爲めに身を犠牲に

供して志士仁人たらんと欲するものは皆此門に入りて此自然の精美を吸收し先づ志氣と膽力を練磨し兼ねて日進の科學を修得し大に濟世利民の道を講せんとを要す、斯の如きは啻に人類たるの責を完ふするに於て欠く可らざるの天職たるのみならず併せて古往今來幾多の偉人が觀じたる殘恨阨窮の痛苦を慰むるに餘りありと謂つべし然り而して今回我同志の設立されたる北辰會は實に斯の如きの一大沿革と斯の如きの一大自然力とを融合混化して產生したる一大喬木にして雜誌は實に之か美花たり、東風徐に吹き、王師外征して捷連りなるの今日梅花に先つて將に其蕾を破らんとす馥郁たる其芳香爛熳たる其花容、は予輩の期して疑はざる所なり然りと雖ども人生百事蹉跎たり易く明月は痴雲の遮ざる所、美花は狂風の亂す所栽培其宜に適せざれば美果得て望むべからず苟も實なくして名あるものは是れ虛名なり虛名の能く播布するは是僥倖なり北越の山河固と僥倖を冀はす事々物々、正々堂々、千歲の下、人の嗤を招き奸雄と呼ばれ、浮薄才子と罵らるゝ如きは特に外觀を銜ふ匹夫の行爲のみ大丈夫豈に斯の如きの愚を學ばんや、嗚呼北辰會同志諸君、々々の前途、任重北海に瀕く、這般の意氣希くは以て美果を結ぶの資料たるべきか、嗚呼北辰會同志諸君、々々の前途、任重くして道遠し剛毅、果斷、堅忍、不拔、能く北地自然の粹を消化し合せて封建鎖國時代に於けるが如く一州に偏し里閭に黨し區々の得失を以て進退其度を失ふ如きの猜疑心と嫉妬心とを洗去し皓々たる至誠を以て相團結するにあらすんば奚んぞ本會の隆盛を望むべけんや而して又我帝國の光輝を發揮せん雜誌の發刊日正に近し聊か所思を述へて祝辭に代ふ

北辰會雜誌の發行を祝ひて

子 研 子

北溟の鯉、鳥と化して翼、垂天の雲の如し。北闕の辰、光を放ちて明中秋の月を欺く。彼垂天の雲を借つて、此北辰の明を掩はんと欲するも能はず。翼に限ありて明にかぎりなければなり。鵬は嘗て燕雀を嘲りしも、今や北辰は鵬を笑ふ。大塊は我、幾億劫を経てなりしやを知らず、我唯知る北辰の金剛不壞なるを。今や誌に名つくるに北辰を以てす。子研子則唵つて曰く

かはりなき星影仰げ北の溟

北辰會の創立を祝ひて

大林 徳 太郎

ほまれをはくも井はるかにしらさんと

むすひそめたる文の友垣

北辰會の創立を祝ひて

香 村 茂 富

厚氷かたくむすひしこのつとひ

千年の後もとけすやあらなむ

北辰會の創立を祝ひて

草 野 正 義

山深くたつね入りつゝ諸共に

月のかつらの枝は折らなん

北辰會の創立を祝ひて

松 下 雅 雄

文の林のしげくとも

學ひの道をまよはずて

月の桂を折るはかり

いさ諸共に勵みてん

北辰會の發會と北辰會雜誌の發刊とを祝ひて(今様二首)

星のや主人

まなびのまどのともがきが

まなびのわざもあそびをも

ともにまなびてあそばんと

むつびあふこそめでたけれ。

ふみのはやしのもがきが

うたよみふみをつくるにも

ともにつくりてうたはんと

むつびあふこそめでたけれ。

北辰會雜誌の發刊をきゝて

花 曙 山 人

今日を首途とをしくも、

學びの海にふなでして、

ゆくゑさだめぬかぢ枕、

未はいづくかしら波の、

潮路はるけく漕出づる、

言の葉舟のけなげさよ、

よしや嵐はつよくとも、

さかまく波は高くとも、

しのぶてふ字を燈とし、

操る櫓だにたわまらずば、
磯になみたつ常盤なる、

いかなる闇か恐るべき、
まつの緑と千代かけて、

いかなる灘もこゆるぎの、
後の世迄も朽ちざらめ。

慶北辰會雜誌初刊

門 脇 惠

北辰星氣漏。爛燦異光新。白玉藍田地。紅梅煥嶺春。天壇失風色。文錦有緣因。自是群才子。青雲界裏人。
維武仰鴻業。翰林人欲翺。貔貅威愈猛。英俊氣方豪。講道香書卷。振文礪筆刀。春風先作陳。木鐸一聲高。
陽光寒國渡。開卷見霞氣。春透金城雪。風和北海雲。獲麟誰作頌。驅鱷我欽文。眼見明時象。高恩憶聖君。
樂道三冬送。滿堂佳氣多。春風和師弟。松籟響絃歌。研學已依雲。拜文將爛柯。世間知雅會。異彩北天羅。
倥傯兵馬日。須講太平謀。文士筆如劍。青年春易秋。聖鯨知有術。驅鬼暫爲遊。才藻吾將看。阿誰第一流。

喜北辰會雜誌發刊賦此以代祝辭

精 軒 詩 僊

東壁春回斗柄移。條風依約入高枝。識他聲氣皆同調。至竟盍簪源勿疑。魏玉孔金相麗澤。蘇潮韓海富文辭。從今洗
胃西江水。敢擬餘波綺麗爲。



論 說

偽作文書研究の一例

浦井 鐘 一 郎

諸君「ふひつしわ」氏萬國史第四百七十三頁を觀よ魯國史「ペーとる」大帝の傳の終に左に記事あり曰く世に「ペーとる」大帝の遺言狀と稱する古文書(The Testament of Peter the Great)あり魯國が將來全歐洲を略取せむ爲めには如何なる事を爲すべきかを述たる者とす此古文書の始めて世に出たるは一千八百十二年「れじゆあ」(Legat)氏の著書の中に出たるを以て始めとす多分「なばれをん」帝の内命に因り奈翁が魯國を侵略するに當り世人をして魯國を嫌惡し奈翁の魯西亞征伐に對して異言無らしめむとの策略より此古文書を公にしたるにて偽作文書なり「しゆいれる」氏(H. Schuyler)氏の「ふひつしわ」所によれば「なばれをん」二世が魯國を攻撃するに就き正當の理由あるを世に示し世人の同感を得む爲めの一論文に過ぎずと猶「しゆいれる」氏著「ペーとる」大帝傳卷二百五十二頁を見よ云々

「ふひつしわ」氏が特に其教科書に註して讀者の注意を望みしは甚だ適當の事にて洋の東西時の古今を論ぜず偽作文書甚だ多く動もすれば世人を欺くはめづらしき事にはあらねど此「ペーとる」大帝の遺言狀といへる者程一時非常に人を驚かし長年月の間世人の目を眩ましたるのみならず今日にても往々其偽書なるを知らずして魯國の大望油斷し難しなどいふものあるに至らしめたるは世に類稀なるべし(我邦にて此に類するは東照宮御遺訓百ヶ條と稱する偽書なり此は折を見て諸君に語るべし)

抑も此所謂「ペー」とる「大帝の遺言狀の始めて世に現はれたるは「ふひつしあ」氏の言の如く西曆一千八百十二年にして佛蘭西の人にて「れずあ」(L'esprit)の著者一書を著し題して「建國より第十九世紀に至る魯西亞國力の發達」といへり同氏が此書を出版せし時は佛蘭西外務省の保護を受け同國政府より出版の費用を受けたりといふことは勿論佛蘭西政府が公然と出版して天下に頒ちたるにはあらずいはゞ竊に政府の機關として出版せるなり諸此著書の内氏に始めて「ペー」とる「大帝の遺言狀を世人に紹介せりされど氏は其遺言狀の全文を擧げずして單に其大要(抜書)を掲げ且つ附言して曰く此は久しく魯國に滞在したる英國士官「さあ、ろばあ」と、うゐるそん」(Sir Robert Wilson)の聞き書の内得たる者にて其出所は確なれば疑を挟むべからずと如此して氏は口を極めて魯國の政略を攻撃せり佛蘭西政府が厚く氏を遇して氏に大金を與へしは歐洲諸國をして魯國に對して悪感情を抱かしめむとの策なるべし然るに其謀略全く失敗し天下大亂の折柄人々讀書に耽る暇なく「れじゆあ」氏の折角の著書も世人の愛讀を得ず「ペー」とる「大帝の遺言狀も一向世人の談評にのぼらざりき

其後二十四年を経て一千八百三十六年に至り同じく佛蘭西國の「ふれでりつき、げりやあでえ」Frederic Garthardet)氏は「ないど、をふ、えおん」傳といへる書を出版し其書中に亦「ペー」とる「大帝の遺言狀を收めたり同き七十七年同氏は此書を再版に附せしが其際書名を改め「ないど、あふ、えおん」夫人傳とし而て「ペー」とる「大帝の遺言狀は今度も亦之を收めたり蓋し「ないど、あふ、えおん」及び同夫人は共に久しく魯都「せんと、ペー」とるすぼるぐ」府に滞在せしが其際此遺言狀の寫を得て佛蘭西國に歸りたる後之を佛帝「るい」第十五世に獻りしなりとぞ「げりやあでえ」氏は如何してか此珍貴なる遺言狀を得て之を其著書中に於て公にせしかば全歐洲の人心非常に激動し(前述の如く殆ど全歐洲人は「れじゆあ」氏の著書を知らされば「ペー」とる「大帝の遺

言狀を讀みしは是が始めてなる故と知るべし)人々擧て魯西亞國政府の豺狼厭くなき心術を憤り同國に對しては大に戒心せざるべからざるを説き併せて「げりやあでえ」氏が此貴重なる文書を公にし人々をして魯國政府の秘密を知らしめたる功を謝し此書は各國の國語に轉譯せられ「げりやあでえ」氏の名は一時に噴々たり

されば「ペー」とる「大帝の遺言狀は前述の如く二種の書に因りて世に現はれたり即ち一千八百十二年には「れじゆあ」氏に因り同き三十六年及び七十七年には「げりやあでえ」氏に因りて世に紹介せられたり此二人は共に佛蘭西人なれども其出所同からず前者は英國武官の聞き書に因りて遺言狀の大意(英語の「さむまりい」佛語の「れじゆあ」を擧げしに止まれども後者は遺言狀全部の寫にて一句一字の増減なきものなり(即ちLiteral Copy)故に後者は前者よりも貴重すべき者とす其後歴史を始め種々の書物に「ペー」とる「大帝の遺言狀若くは其摘要出たれども何れも直接又は間接に前二者に遡ならざる者なしとす

諸此遺言狀は歐洲は勿論世界を併呑し終る方略を子孫に貽せし者といへば果して此遺言狀の偽作にあらざる限りは魯國の外交政略の怖るべき多言を要せず苟しくも列國の政治家たる者は寒心せざらむと欲するもそれ得んやされば「げりやあでえ」氏の著書一度世に出つるや全歐洲を振動せしめ政治家歴史家争ひ起ちて其真偽を辨じ甲論乙駁底止する所を知らざりしが概していはゞ英國匈牙利奧太利亞等の輿論にては之を古に徴し今に稽ふるに魯國政府の舉動着々此遺言狀のいふ所に當るを以て見るも「ペー」とる「大帝の遺言狀に相違なしといへり兎に角争論盡きざりしが「げりやあでえ」氏の著書出て、後七年目に至り(一千八百六十三年)魯國「りが」府の圖書館の役員なる「べんくほる」氏(Berkholz)は種々研究の後「「なばれをん」帝は「ペー」とる「大帝遺言狀

の作者なり」と題する書を著はし「なばれをん」帝は歐洲の人心をして魯西亞國に反對せしめむが爲め此遺言狀を偽作し「れじゆわ」氏をして之を出版せしめし者にして「げりやあでえ」氏は更に之を改竄し「えをん」云々と詐りし者なりと論定せり獨逸佛蘭西等にては専ら此説行はれたれども英國其他にては偽作にあらずとの説有力なりしが如し然るに日耳義の歴史家「ゆすて」氏 (Jesse) は更に新説を出して「ペーとる」大帝の治世及び遺言狀と題する論文を出版し亦た此遺言狀を以て偽作なりと斷定せりされど氏は前に述べたる「べるくほるつ」氏の説に反對し偽作は偽作なれども決して「なばれをん」帝の作れるにあらず例の「ないと、おふ、えをん」が魯西亞より佛蘭西に歸りたる後偽作せしものにて其を巴理府の古文書局 (Archive) に入れ置たるを一千八百十二年に至り「れじゆわ」氏の發見する所となりたるに恰もよし佛國將に魯國に逼まらむとする際なりしかば此文書を公にし魯國の恐るべく惡むべきを天下に示すは時にとりての名案なるを思ひ時の外務大臣に謀りしに其賛成を得即ち佛國政府の金を以て此書を公にしたる者なりと論決せり

以上二人の説一通りは聞えたり然れど熟考する時は共に一の假定説に止まり確證なし天下未曾有の豪傑「なばれをん」たる者がかゝる小刀細工を爲すとは到底信じ得べからず又「ゆすて」氏の説の如くならば「れじゆわ」氏と佛國政府との關係及び佛國政府の費用を以て出版したる理由は巧に説明するを得れども先づ「えをん」が偽作せし目的如何を説明せざるべからず勿論我邦にても昔は頗る物好の人ありて諸國を旅行して古錢古碑の偽物を埋め置き世人を驚かすを以て目的とせし閑人ありしやに聞けども西洋の偽作は利益を目的するを以て單に「えをん」の好事心のみを以ては説明に窮する者といふべし凡そ今日史學上の規則にては苟もある文書を偽作なりと斷定せむには一偽作者二偽作をなし、時三偽作を爲し、地及び四偽作の目的を明示せむ事

を要す猥りに假定説を唱ふるを許さざるなり

されば「ペーとる」大帝遺言狀の眞偽如何は甚だ困難なる問題なりしこと前述の如くなりしか其際近世史學研究法は著しき發達をなし其科學的光輝は難なく迷霧を一掃し去り此一大疑團は直に充分の説明を得て氷解するに至れり而して「ふひつしあ」氏が其萬國史に註して此遺言狀を以て偽作文書なりとせしは甚だよしされど氏が此文書を以て「なばれをん」帝の偽作なりといひしは彼の「べるくほるつ」氏の謬を承けし者にて其後科學的歴史研究法を以て充分なる證馮を以て論斷したる新説の出でしを知らざりしと見ゆ苟も米國第一等の「えーる」大學の教授たる「ふひつしあ」氏にして之を知らざるとは余輩の最も怪訝に堪えざる所なりとす

其は措置きある文書の眞偽を論定するに當りて二の方法あり若し出來得べくは兩者併用するを宜しとす其一を主觀的研究といひ他を客觀的研究といふ前者は最も近途にしてまた最も効力ある法にして其文書の實物を取りて其紙質文句及び書體等などに就き眞偽を斷定するなり後者は余輩の知る他の事實と矛盾する無きやを調べて論定するなり此法は前者に比すれば頗る困難の業にはあれど決して無力のものにあらず歴史家慣用の利器なりとす何となれば主觀的批評は多くの場合にては之を行ふの機會なければなり

主觀的方法是最も有効なれども此場合に於ては到底實行する能はざりき英吉利佛蘭西獨逸以太利諸國にては一千八百十五年即ち維納條約以前の公文書にして政府の記録局所藏に係る者は誰人を論ぜず縱覽を許す定めにて同年以後の公文書と雖も特に秘密を要せざる限は歴史家の請求に應じて閱覽を許す由なれども如何にせむ魯國にてはさる設け無きにより何人も實物に就きて主觀的觀察を爲す能はず加之魯國政府は公言して曰く近來「ペーとる」大帝の遺言狀と稱する者世に傳播し居れども我國古文書局には現存せずさる事は一切無根に

して思ふに好事者の偽作たるや明なりと故に此場合に於ては主觀的批評は全く斷念せざるべからず(未完)

生物學豈に忽にすべけんや、

理科大學 市 村 塘

我親愛なる北辰會諸君、予が諸君と相見ざる茲に將に三歲、三稔の星霜また必しも短かしと謂ふべからず、其間諸君中より我黨壯士の輩出せらるゝや寂々寥寥、吾人誠に孤城落日の感なき能はず、是果して喜ばしき現象なるか、人は曰ふ此現象の原因は該會の先輩學士に乏しく隨て勸誘に道なきに歸すべきものなりと、夫れ或は然らん、然れども余は思ふ、是大に土地の狀勢が原動力となり與てこゝに至らしめたるにはあざざるなき歟と、請ふ聊か愚考を陳し況く諸君の教科を仰かんとす。

試に筈を大乘寺山に曳け、翠松何ぞ夫れ翳鬱たるや、青苔何ぞ夫れ迷濕たるや、雪の朝、月の夕、共に是我心氣を爽快ならしむる好侶伴にあらずや或時は此山に犬を驅て兔を追ひ、或時は銃を肩にし雉鴉を狙ふ、眼中に映ずる撮象、一として我學の材料ならざるはなし、醜て想へよ、公園晩秋の紅霞、尾社中春の馥郁、何ぞ夫れ我目鼻を喜ばす如斯くなるや、金祠暖春の鶯聲、練兵塲晩夏の蟬噪、何ぞ夫れ耳塵を洗ふ如斯くなるや、目鼻を喜ばしむるもの、耳塵を洗ふもの、是亦我學の材料ならざんばあらず、其他淡水にまれ鹹水にまれ、山岳にまれ沙漠にまれ、氣にまれ平原にまれ、到る處に研究材料充滿す、諸君は是等事物を五感に觸れて單純に「面白ひ」と云ふ外何事も胸裡に浮ばざるか、若し然らば萬物は悉く人間の爲に作られたるものと云はざるを得ず兎は人間の食物となる爲に世界に住めるなり、鳥は吾人を喜ばしむる爲めに囀るなり、楓は我目を樂しましむる爲に紅葉するなり、梅は人間の爲に香花を開くなり、蚊は假寢を防ぐ爲に刺すなり、と

いふに至るべし、宇宙に於て豈に斯かる背理あらんや、蓋し自然の法則 (Law of Nature) は一般萬物に行はれ、免かれんとして免かる能はざるものなれば、決して世界は特に人類の爲に造成せられたる物に非ざらんなり、予輩はポーアを學ぶにあざれども、鳥は天賦の發音器を具備し自ら樂しむのみ、楓は冬期に近づけば生長を止めるを以て同化の不必要よりして自ら葉縁を破壊するのみ、妄りに人間が勝手なる考を抱く如き理にはあらず。

緻密なる腦漿を有せらるゝ諸君は單純に「面白ひ」と思ふのみならず、必ずや、松杉は何が故に綠幽に見ゆるや、蘚苔の翠陰も果して同原因なるか、兎の外耳長きは如何、雉鴉の發する種々の美音は咽喉が如何に構造さるゝによるか、楓樹の紅葉著しき所以如何、等の諸問題は續々胸中に湧出せん、我學の目的は實に該問題に答ふるは勿論、凡て生物の發生、生理、構造、應用等を講究せんとするにあるなり。

啻に是丈の目的なれば金澤地の狀勢亦何の不可なるどころあらん然れども學問の進歩と社會の變遷に連れて我學も非常に應用的實業的に傾けり、若し土地にして水産漁業採藻業に縁遠きか、高尙なる培養園や養蠶場に乏しきか、蜜蜂養飼場少なきか、藥用植物園なきか、藥品製造所を欠くか、外界の事情業に然り、焉んぞ生物學の趣味を解せんと欲するも得べけんや、余輩は金澤外に尙遺珠多きを諸君に知らしめんが爲、諸君に旅行を促がすと切なり、去て志摩、相模の海濱に遊べ、先づ海藻によつて火を擧ぐるもの多きに驚き次に養老の愉快なる經驗談に不覺、耳を欽つべし、遠くは北海道附近に趣け札幌、小樽邊に於ける鮭鮓捕漁の盛大なる、魚類所置及び製油に迅巧なるは早く諸君の腦裡に印すべし、近くは愛知縣の桑園を訪へ、其廣大なると萎縮病害、昆蟲驅除、採培法に餘念もなきを注意せん又勉めて各地の酒類釀製場、又は藥品、砂糖等

の製造所を訪問せよ、或は思ひ半ばに過ぐるものあらん、吾人は行く處として忘る能はざる面白味を感じざるなし、之に伴ふて綿密なる觀察力を興起するは自然の勢にして徐ろに「生物學の思想あらんには」と長息を漏すとさへ多く頗る遺憾に堪へざるとあり、曰く海藻は自然に發生するものなり何時之を採去するも再び自然に繁殖すと、又曰く海鼠は始めは海の垢より自然に生ずと、又曰く雀海中に入りて蛤となると、何ぞ夫れ愚盲なるの甚しきや、苟も世に自然發生(Spontaneous generation)の虚説なるとは皆人の許すところならずや吾曹の今日何人も諒知するところならん信じて居たるは過なりき、渠は海藻の根と藻果を切盡するも尙能く繁殖するものと思へるなり、(稀れに藻葉より新芽を出すとも種類少なく言ふ價値なし)渠は海嶽が卵より孵化して漸く生長するものなるを知らざるなり、渠は異科の動物が容易に移變し得るものと信せるなり、他地方に行けば復た曰く桑樹の尺蠖は早く殺戮すべし、然らざれば再び數多の尺蠖を産出すと、園夫は卵よりして尺蠖の生るを知ると雖も、何ぞ知らん其腹部に數多の蜜蜂の寄生卵を保藏し却て有益蟲なることを、而して彼等に其理由を説明するも頑固として信せず、酒屋は釀母の何たるを知らず、餅屋は黴の生ずる理由を知らず、滔々たる天下此類の例に乏しからず是も見學の萃となるべし。

夫の殊に北海道及び越中地方の住民が其腸内に寄生せしむる所謂條蟲なるものは、主に鱒の鮮肉を食ふよりして輸入せることは誰しも疑わざるところとす、然れども一旦此寄生蟲に罹る時は食物の養分を吸收せられ、自體を衰弱せしむ、是Bothriocephalus Latus)と稱する蠕蟲に外ならず、又人に肝臓デストマと唱ふる病氣あり是も Distomum Hepaticum なる一種の寄生蠕蟲が所爲にして、其因て來る所以及び其性質などは已に我學に於て研究し盡せり、尙其外に人間をして肺病に罹らしめ、マラリヤ熱を起さしめ、腫物皮膚病に苦しま

しむるものは、下等裂殖菌類のバクテリアなりバクテリア研究は吾人の職掌なり、其治療法に至つては固より醫學に擔任せしむべしと雖も、互に關係の親密なるは言ふ迄もなし、我學と醫學の關係の如き關係が亦我學と農學の間に存す、黒死病バチルス發見により我醫學社會に榮譽を博したる醫學博士あれば、ウヂミヤ、サルカリヤ發見により農業社會に名聲噴々たる理學博士あり、以て我學と他學の關係如何を知るに足るべし、又藥物の鑑定などは其原植物、動物の構造により判斷するものなれば、藥物學と我學は琴瑟も音ならざる關係あるものなるを知らん、生物學豈に忽にすべけんや。

左れば吾人が呼吸する天地の廣ければ廣き程、我學研究材料に就て見聞すると亦廣く、從ふて吾人の學術的智識を汎大ならしむるや明らかなり、一生涯を信州山奥に送るの人は、鯨の脂皮を以て一の上黒下白なる平滑動物と思ひ、鯉節を以て目も口もなき一の魚と考ふるといふとは、我輩屢々耳にする所とす、金澤若くは東京の住民にても海苔を以て一種の植物或は其切片と誤解するもの或は少なからざるべし、是呼吸する天地の狹隘なるが爲め起るところの結果に外ならず今日の如く水産業(Fisheries)の盛なるにも拘はらず、鰻を河中の養魚場に入れ其繁殖を待つ愚を學ぶものあり、渠は鰻の特性を知らざればなり、産卵は海に降りてのみするものなるを知らざればなり、諸君は我學の趣味を知らんと欲せば須らく呼吸の天地を大にすべし土地の狀勢は諸君に我學の趣味を感ずるを許さず、是余が諸君に休暇を偷み旅行さるゝを勸めて止まざる所以なり。

我親愛なる北辰會特別會員中には有名なる岡村博士あり、余亦何をか云はん、余は唯牛耳を採りしに過ぎず、愈是より同博士の氣焔を吐かるゝを待たんのみ。

世、往々、蛇蝎を疑くを以て動物學となし、花卉を弄するを以て植物學と誤解するものあり、不顧拙文辨護を爲すと爾り。

社會の進歩と詩歌の發達

相生 政 次

越路の空、瑤花粉々として闇天に飄へり、衢路行人絶えて轉寂莫、獨り爐を擁して寒燈の下に坐し、社會と詩歌とに就きて妄想を逞うせば、兩者の發達何ぞ相關するの深きや、其觀念未だ學者の如く十全ならざるも、人々の胸中には必ず一卷の社會發達史あるべし、願くば此卷を繙きて其の初頁を讀め、茫々たる原野耶子樹の繁茂する下、一掬の清泉僅に湧き出づる處、人にして人にあらず、獸に似て獸にあらず、人身牛首の動物相群居し、寒熱を防ぐの衣服なく、雨露を凌ぐの家屋なく、日出て起き日入つて眠り、陰々濛々饑餓と闘ふもの、諸君は之れを呼んで原人といふにあらずや、原人等續々として増殖せば、群居して一處に止まること能はず、こゝに於てか分離して數個の部落となり、各部落の下の原人相互に増殖してまた幾個の部落をなし、部落は部落に分れて終に數多の部落を作りぬ、而して彼等が日常の職業はいかん、自然は夥多の飲料食物を給し、炎天の下また衣服を要せず、優々逸樂何事をかなさん、然りと雖も人性固より行動を欲す、逸樂終に飽くの期あらん、こゝに於てか彼等は鬪争なるものを發見しぬ、爾來彼等が事とする處は、弓矢を取つて敵將を射、刀槍を揮うて虜人を斬るのみ、「ブラッド・アンド・スチール」の殺氣は全部落に通流し、戸内に於ても人々枕を高くすること能はざるなり、然りと雖も安眠を憎む地球の運轉は一瞬時も休まざるなり、姑息を嫌ふ社會の發達は一瞬間も止まらざるなり、歲月は夥多の經驗と智識との矢

を、絶えず彼等が頭腦の楯を見かけて亂發し、鐵馬傷き甲冑破れ、野蠻なる部落組織は終に社會の戰場に於て倒れぬ。あゝ之れ諸君等が腦中に編せる社會發達史の初頁にあらずや、而して此等の野蠻なる部落が一つの詩歌を有せざりしは、諸君の既に知る處ならむ、殘酷なる部落は既に倒れぬ、其の相續者として社會の舞臺に顯はれ來りしものは果して何ぞ、諸君が社會史は既に種屬と答へしならん、種屬とは同人種、同利害の團體なり、此人種の下に於ては、固より未だ其名を附すること能はずと雖も、政治、法律、宗教、文學等の觀念はやゝ其の嫩芽をきざしたり、是の時期に於ては、尙腕力は全種屬を壓倒して首長の位に登り、同種屬を率ひて異種屬を撲滅するに遑なく、風俗習慣の制度となりたるものも概ね強者の爲めに破壊せられ、人間、自然兩界に起る現象を以て、悉く神の靈力に歸し絶えて是れを研究するの念なく、且つや彼等の創作したる神佛は、時としては美德圓滿の神にして、時としては瘳猛殘虐の惡魔なり、喜ぶ時は人を水火の中より救ふと雖も、怒るときは其頭を破碎して顧みず、而して社會の反射鏡なる詩歌の固より不朽のものが此時代に産せざるは、是れ亦諸君の知る處なり、次きに來りし社會の階段は何ぞ、現代の國家即ち是れなり、諸君は現代の國家に生存す、故に吾人は其狀態を贅言せず、願くは活眼を開きて親しく之れを見よ、あゝ國民、國家いかに其名の立派なることよ、吾人は此語に接する毎に未だ曾て其立派なるに打たれずんばあらざるなり、然れども願くは心を潛めて一考せよ、國家、國民、いかに其名は立派なりと雖も、詮ずるにこれ亦かの盲昧野蠻なる部落、種屬の少しく膨大變形したるが如き感あるにあらずや、渠等は部落、種屬の下に生存せる野蠻人の如くに、故なくして人を殺戮し、名なくして遠征を興すことなしと雖も、絶えず無情の爪牙を磨き、鷲眼を張り、若し異國民の間に於て一點機

の乗すべき處あらば、猛然一躍して之れをくひ殺さんとするは、かの原人と比して果して勝る處あるや、あゝ之れ現今社會の狀態にあらざや、

誰れか現今の社會を進化したりといふものぞ、現今の社會果してかの原人、部落、種屬の時代に恥づる處なきか、電氣燈は赫耀として世界を不夜城となしぬ、蒸氣力は猛烈なる風波を制して、萬國は四鄰となりぬ、然りと雖も形而上の進歩は原人、部落、種屬の時代に比して我等の勝る處あるぞ、政治法律はやゝ完全の域に赴きしと雖も、果して世の士君子を治むるに足るべきか、宗教文學はやゝ圓満の境に近きしと雖も、果して世の學者を服せしむに足るべきか、吾人一度思をこゝに走すれば、慨嘆の熱淚唯泣然たるのみ、

兩獸の疲勞を俟ちて獵人の利を占めんと欲し、狡黠なる佛のリセリウは純潔なる瑞西王を欺きて、獨乙と戦はしめ、其の漸く衰へたる獨乙の弱點に乗じ、公然之れに向つて戦を宣言し、以て佛蘭西一國の懷を暖めたり、而して世界は皆な彼れを呼んで大政事家といふ、之れ現今社會の狀態なり、彼れリセリウは佛國の大政事家たるに妨なしと雖も、之れを世界の為めに活きたる個人を犠牲とせり、彼れは佛國の忠臣たりと雖も、未だ以て世界の忠臣となすに足らず、否彼れは寧ろ造化の敵なり、道德の破砕者なり、詮し來れば家康といひ、ナポレオンといひ、ヒスマークといひ秀吉といひ、世の所謂大政事家、大英雄と呼ぶもの、孰れか造化の敵にあらざらん、孰れか道德の破砕者たらざらん、

ア、臆病なる國家學者よ、漫りに以て文學者の譎語となす勿れ、願くば忌憚なく思想を述べよ、道德を破砕し、箇人を殺了し、終に造化の敵となつて己れ一人若しくは一小國家の懷を暖む、吾人は是等の狡奴に大政

事家、大英雄の名を負はするに忍びず、

吾人は現今の社會が其發達史の初階段にあることを述べんが爲めに、思はず長談義にわたたり、吾人は再言す、部落的組織、種族的組織及び現今の國民的組織は吾人が胸中に編せる社會發達史の第一の階段なることを、

社會は人を生むが如く、また其の發達の度に應じて幽遠閑雅艶麗なる詩歌をも生むなり、然らば第一期の社會が産したる詩歌は奈何、曰くかゝる狹隘野蠻なる部落、國家の屋裡に雨露を凌げる原人、國民にして、争でか幽玄不朽千古に於て耀然たるの詩歌を産せん、個人的世間的の觀念を有せざる國民が産する詩歌は、粒々豆の如き「インスピレーション」を皇張して、蠢々死したるが如き概念を歌ふに過ぎず、浩大若くは美麗なる世界、個人を描くこと能はずして、唯管見的の類念を寫するに過ぎず、故に吾人をして眞實を吐かしめば、世人が喋々贊嘆して措かざる詩祖のホームエルと雖も、畢竟此等の類念を誦せしに外ならずと信ずるなり、之れを要するに此時代の詩歌は、單に狹小なる部落的國民的の類念を歌ふに過ぎざるを以て、吾人は之れを稱して類詩或は國詩といはんとす、今其國詩なるものを詳言せば左の如し、

國詩に於ては主觀の情著しく活動して客觀の相を壓倒し、類念は全篇を通して貫流すれども、箇念は殆ど有耶無耶の境にあり、這般の詩に於ては専ら抽象的概念を發揮せんことを勉むるを以て別に人間を捉え來りて其性情意志を探ることなし、偶人物を描寫することあるも、唯事件の脈絡を繋ぎ又作者の理想を表顯せんが爲めに然るのみ、要言せば類詩に於ては頑鈍なる「ゼテラリチー」はあれども瑰麗なる「インヂヂヂアチー」はなく、死したる概念はあれども活きたる觀念はなし、故に吾人は時に或はこれを化物屋敷と稱する

ことあり、それは主人公のあちこちへと動搖し、無理に作者の概念を顯はさんが爲めに、敬すべく賞すべき義人烈婦も、忽焉として憎むへく厭ふへき奸夫淫婦と化し、煦々たる平和の桃元郷も、俄然として凄凉なる修羅場と變動して、而して其間に一點の理由の存するなきは、恰かも化物が變化自在のさまに髣髴たればなり、

滔々たる世界の科學者、思一度もこゝに馳せずして、濫りに現社會に向つて大詩人を求む、空論なり、彼等は社會の人を生むことを知る、知つて尙且つ然り、笑ふへきにあらざや、彼等はいふ、詩人は超然として世俗に脱出し思を遠く理想世界に馳す、國民社會いかに狹隘野蠻ありと雖ども、豈に一個の大詩人を出すこと勿らんや、セエキスピヤを見よ、ミルトンを見よ、彼等は狹隘なる國民社會に生れたるにあらざや、ゲーテを見よ、レツシングを見よ、彼等は野蠻なる國民社會に生れたるにあらざやと、あゝ請ふ急劇なること勿れ、此等の詩人は例外なり天才なり、彼等は夢の如き物語を讀みて、直に其主人公に扮せんとする少年を笑はざるか、荒誕なる「ポッシヒリチー」や寥々たる例外を冀ふもの、誰れか之れを愚ならずとせんにや、彼等にして若し天才的詩人を得んと欲せば、何ぞ造化に對つて哀願せざる、何ぞ天神に對つて詩人世界の荒涼を訴へざる、濫りに現社會に於て天才を鑄造せんと欲する彼等の願望は寧ろ憫むに堪えたり、

吾人は社會と詩歌との第一期を比較し了りたれば、驕つて第二期の進歩を比較せん、

吾人潜心して造化の意を推すに、世界は黨を結びて此くの如く鬪闘すべからず、人間はかくの如く團躰の下に束縛せられて個人性を殺了せらるべからず、結黨や國民組織や、未だ全く必要ならざるにあらざ、彼等は現社會と理想社會を連結する恰好の船舶なり、人間若し此船舶に搭せざるときは、争でか彼等の理想的社會

に着することを得ん、然りと雖も彼等は社會最終の目的にあらざるべし、吾人は理を以て何が故に然るべきかを説明すること能はずと雖も、吾人が感情は唯何となくしか思はしむるなり、こゝに於てか蠢蠕たる動物に非らざるよりは、無心經無意識の人間に非らざるよりは、いつまでかかゝる窮屈なる國民の下に統一せられん、いつまでかかゝる狹隘なる團躰の下に束縛せられん、其造化より與へられたる自由なる箇人性は、終に此鎖を碎破して跋扈するの期あらん、團躰は鷲の如く雄飛すべきものをして、蝸牛の如く緩歩せしむ、英雄を見よ、豪傑を見よ、彼等は常に團躰に超脱す、常に凡俗より一步上に立てり、嗚呼個人、卿は天與の賜物なる自由の變名にあらざや、卿は宇宙の美を示すの使者にあらざや、若しかくの如き觀念の世間一般の人心に通じて播布することあらば、こゝに社會第二期の進歩は來らん、吾人はかくの如き社會を呼んで、個人的社會といふ、否な箇人の世界といふ、

此の箇人の世間が、果して諸君等が胸中の社會發達史に編しあるか、吾人は之れを知らず、唯吾人一箇の社會發達史なり、唯吾人一箇の思想なり、

社會發達の第二期即ち箇人の世界には、人間は各平等なり、人間は各同等の權利を有す、己れの好む處にあらざれば、身死すと雖も尙之れをなさず、己れの厭ふ處にあらざれば、水火の中に投ずると雖も尙之れをなす、賢なるものは益賢、愚なるものは益愚、弱なるものは益弱、強なるものは益強、而して雜種の人性處々に存在するは、恰も此世界に雜種の物躰が混雜して散在するが如けん、之れを要するに箇人の世界は宇宙の縮小舞臺の如し、稍造化の目的に近きたるが如き趣あり、此際生する處の詩人は必ずや「ゼテラリチー」の戈を捨て、「インヂヅヂユアリチー」の劍を取り、箇念の旗を樹て箇物の鼓をうつて人間の陣營を飾ることあり、

るべし、吾人は此等の詩人か作したる詩歌を呼んで人詩といはんとす、何となれば此時代には人間自ら覺醒して人間の價値を知りたればなり、

所謂吾人が人詩に於ては、國詩に於けるとは正反對にして、客觀の相は大に跋扈して主觀の情を壓し、箇念は流通して到らぬ限もなければ、類念に到つては絶えて之れを見ることなし、這般の詩に於ては、必ず人物を捉え來りて其性格を審美的に分解しまた綜合す、單に事件の脈絡を繋がんが爲めに顯はれたる人物と雖も、濫りに管見を挿んで其性格を左右せず、而して其作の中に描かれたる人物は各夫々の性情を有して躍然たり、要言せば美なる箇念はあれども醜なる類念はなく、生きたる觀念は歷々として顯はると雖も、死したる概念は終に之れを見ること能はざるなり、(未完)

史傳

國學復興者としての契沖阿闍梨

埋木乃翁

大坂東高津東平野町(元餌差町)に圓球庵とて小やかなれどもみやびたる庵あり、門を入る者は先數百の鎌を打込みたる榎の古樹に驚くならむ、樹の下に一小祠建てり、鎌八幡といふ。

不動明王を安置せる小堂、昔人の書讀みしと傳ふる隔屋にさながら昔の面影を殘し、圓くして大ならざる碑の面に短けれど尊き歴史を留め「我庵の草木や何と人問は、先梅どこそいふべかりけれ」と愛でしその老木の梅に幽しき薰なほ絶えず。あはれ昔の主人の心ゆかしさよとは此庵を訪へるものも先思起す

事なるべし。さて庵主をかたらひて昔の人の遺物を觀れば、國學佛學上の稿本に非れば歌繪の軸物鐵鉢木像などのいと質素なるもののみなるに、なほ一しほのゆかしさを増し、更に先づ年長くも宮内省より此人の不勤遺功を賞せられて祭料百圓を賜ひ、ついで特旨をもて正四位を贈られたりと聞きては、遂にゆかしさに堪えて、そはいかなる人にて如何なる事をなし、人にかと切に問ふなるべし。いざたまへ、此翁つぎつぎに語らんと思ふに。

緒論 第一 契沖の生涯

先圓球庵のあるじ釋契沖の生涯を、安藤爲章僧義剛及今の宇田川文海氏等の案内によりて覺束なくもたどり行かんぞす。

姓は下川氏、字は空心、契沖は其諱なり、幼名は知るに由なし。遠つ祖は代々近江國蒲生郡馬淵村の邊に住めりしが、祖父又左衛門元宜もとよしに至りて肥後熊本もとたけの城主加藤主計頭清正に仕へ五千石を食みき、といへば家系はさまざま賤しからざるなり、父善兵衛元全もとたけは元宜の季子にして、攝津尼ヶ崎の城主青山大藏少輔幸利に仕へて二百五十石の小祿を食み、豊前小倉細川家の藩士間七太夫の女を娶りて男女八人の子を設けぬ、契沖はそが次男にして、寛永十七年庚辰尼ヶ崎にて生れぬ。

此子幼かりけるより記憶力はいと強かりき、五歳の比母口づから百人一首の歌を授け、るに日ならずして誦誦しつ、父も亦實語教を讀みもて聞かせけるにやがて此をも記憶しつ、恐しくもまた未頼母敷童なりとは此頃此子の父母もおもひ郷里の人も語りけるとぞ、此並々ならぬ童はふと並々ならぬ事に出逢ひしより遂に世捨人の身となりぬ、そは七歳の比疫病に罹りてほど、死ぬべく覺えけるを、佛神の冥助によりて復た心地

よくなりたれば、幼心にも信心肝に銘じ、あまたび乞ひ求めける末、遂に父母の許を得、攝津東成郡今里村なる妙法寺に入りて丰定密師（密多）の徒弟となり始めて佛門に身を委ねたるは、よのつねの童ならんにはまだ無邪氣なる遊戯にのみ明し暮す可き十一歳の少年のほどなりき。これより没年まで五十年間の生涯は表面より觀れば、唯一庵の貧僧にて終りたるが如くなれど、裏面より觀て國學者としては聊傳ふべき事あらむ、あらざ、大に傳へざる可らざる事あり、これ此翁が老後の思出に一度傳へ置かばやと思ひ起し、ゆゑよしなり。さて此師に就きて始めて般若心經を授かりて容易く暗んじき、十三歳にして髪を薙りて高野山にのぼり、快賢師につきて學びて兩部大阿闍梨の位を得たり。其頃よりはやく學徳の高き譽世に聞え、攝津生玉なる曼荼羅院の檀越の請ふ事切りなりければ、遂に寛文二年二十三歳の折山を下りて此院に住む身とはなりぬ、されど此生玉の地は大坂の市に近くかしましくして、彼の閑なるを好む氣質と適はざりければ「浮世の塵にならず衣をいつかは山風に拂はむ」と思立ちけるが、つひに四月の初つ方、

茂りあふ草にも木にも思ひ出てよた、我のみそ宿かれにける

時鳥なにはの森のしのひ音を如何なる方に鳴きかつくさむ

此歌二首を壁板の面にまゐりし留め、飄然として曼荼羅院を立去り、雲の行方も何處と定めなき身は谷川の水の流を心にて、一笠の下に寒暑を凌ぎ一鉢の中に餘生を托し、冷ねく高山靈場を週遊まぬ、大和なる長谷寺に詣て、は一七日の斷食をなし、宇陀郡室生山にのぼりては形體を捨てんとし、よき人のよしとよく見し吉野山、まもとゆふ葛城山、名も高き高野山、名たゝる靈境拜まぬはなく、名ぐはしき勝景探らぬはなく、心を清らなる山水に洗ひ道を風月煙波の間に養ひ、法の徳いやましに高くなりぬるはいはでもの事ながら、世の

塵のいたらぬ清境、人のけはひ稀なる幽谷、寶鐸嵐に咽ぶ伽藍の下、鳥聲獨幽かなる茂林の中、そゝろに行脚僧の詩腸を肥やし、も亦少からざりしなるべし。斯くて和泉國泉郡久井の里山高く水長き邊に錫を留むること數年に亘りぬ。其の頃とぞ聞えし、同じ里の萬町村に伏屋長左衛門といへる豪農ありけり、いみじき佛教信者なりければ契沖の徳を慕ひ、己が家の別業池田川の清き流に沿へる養壽庵といふに、契沖をして遷り居らしめぬ、此伏屋といへるは名たゝる舊家なりければ藏書ども少からず、これを借りて讀むとの便よかりければ心のまゝに繙讀し、佛書經史はさらなり、紀記このかたの國史古典を探り、博く古書を索め、傍和歌を詠むとを樂とまき、其比の歌と見えたるが二首、

川風の上をありかの塵の身もなほ浮艸のたくひとや見る

流れきて川の洲先による艸もなほ根を生へむ物とやは見る

按ふに、契沖皇國學を明らかにせむるもとあはむねと此數年の間に成れりけむかし。

延寶八年四十一歳の折先師丰定の遺命背き難く且は今里に残し置ける老母に孝養を盡さんが爲に歸りて妙法寺の住持とはなりぬ。此頃兄の元氏も亦此村に隱遁してありしかば、兄弟力を協せ事へて母の心を慰め、やゝ樂しき家庭を作れりけむ、然るに父元全は何れの年にか北國に赴き此處にて身まかりぬ、母も兄弟看護の甲斐なくこれも何の年にか正月晦日に身まかり、兄は元祿十一年十一月二十五日に身まかりぬ。父の死けるを聞きては「歸る山越ゆべき人の如何にして此世の外に道はかへけむ」と歎き、母を失ひては「陰とせし柩は枯れて春雨にあらぬ木芽の何うるふらむ」と泣き、兄に先たれては「恵みにし親の歎きの上つ枝の陰たに今は枯れ果てにけり」と落膽まぬ、こをもて觀れば契沖はまごゝろ深く涙脆き法師なりけらし。母みまかりぬ

る後は妙法等は覺彦和尚に托し置き、彼の萬町村の長左衛門の厚意によりて養壽庵の建物こそが儘うつして、東高津餌差町のほどりに一草庵を結び、圓珠庵と號けてこゝに住む身となりぬ、はしがきにほのかし置ける庵の名はこれなりけり。契沖が國學の上に養ひ來れる潛勢は此の草庵の中にやうやう膨大したれども猶忍びて潜みてありけり。時に水戸の義公方に力を文學復興の上に用ひられ、廣く萬葉集の古義を索ね其完美なる注釋を得まほしく望まれしが、契沖の國學に精しき由を聞かれ、御前に召して此事を托せんとせられけるを、契沖は固く浮世の榮華を疎み世に出ることを辭みけれども、又公が世の爲に盡さるゝ大義の高きに感じ、自ら奮ひ起ちて、曩に下河邊長流が書やりし稿本を繼述して、萬葉代匠記二十卷總釋二卷を奉れり、これ此僧が國學者としておほやけの文壇に名告り出でたるはじめなり、公其卓見を嘉みし辛勞に酬ひんとて白金千兩絹三十四匹を賜ひしを、聊私に用ふる事なく、其一分を寺費に充てたる外は悉く貧きを賑はせりとぞ、又次で古今餘材抄を作りて献りければ、公之を見て己が意見と合ひしを奇み且少からぬ卓見あるをゆかしく思はれ、一度來り見えん事をもとめたまひけれども、塵の世を遁れつる賤き法師の身の如何でさるやむごとなきわたりの御前に侍り候はむ、とて固く辭みてきかざりけり、こをもて觀れば其心根の清々しき事は明かなれどさりとて猶またく世の義理を捨てたるにも非りし事を知るべし。斯くて彼は身に累ふ事もなく世に出でんの望もなし、心にまかせて讀み筆にまかせて綴り閑かにして樂しき餘生を送りけるが、元祿十四年正月の初つ方より心地惱しく覺えけるまゝ、やうやう篤しくなりければ、其月の半頃病床に筆を執りて遺言狀を認め、二十四日に至りて病革り、遂に元祿十四年正月二十五日印を結び臥坐して寂しぬ、年六十二、庵の側に葬り、石を建てそが面に契沖阿闍梨之墓なる七字を刻せり、斯くして元祿の一法師兼ては日本國學復興者の魁たる

契沖阿闍梨は一基の石の下に常夜の夢を結びて復た覺むることなけれども、彼が此世に國學の上に與へたる曙光は、少くとも國學の傳統絶えざる限は、永く日本文學史上いやちこに照り輝かんなり。

さてこの、身は佛門に入り位は兩部大阿闍を極めたる契沖が、いかなれば其身を忘れて國學の上に力を盡さまく思ひ起しゝか、いかばかり國學の上に力を致しゝかを論せんとする前に、まづ契沖以前文學界の有様は如何なりしか、契沖當時四圍の状態は如何なりしかを觀んとするは、順序の上よりしかある可き事ならむ。人は往々時勢に依りて生れ時勢に驅られて起つ事あればなり。

第二 光國卿と契沖阿闍梨

契沖時代即元祿時代と遠くかけ離れたる大古中古の歴史は今説かざる可し、されど代を距ること遠からず文學の事も直接間接に影響し來れる室町時代以後は少しく明らめ置かざる可らず。

室町時代の中葉を下れば、世はかりこもの亂れにみたれて此處彼處矢曠を磨かざる處なく、世をなべて血腥き風に矢叫の音を傳ふる一大修羅場となり了んぬ、されば文學界もまたく兵馬の蹂躪にまかせられ、無明の闇に蓋はれて、何日天日を仰くべしとも思はれざりき、たゞ金澤文庫の幽なる光と、世を離れたる寺門の小文學界とか、まさに絶えなんとする文學の命脈を一髮の間に繋ぎ得たるのみ。さて天文弘治永祿も過ぎ、天龜元正の比に至りてはやうやう世の亂れも薄らぎ信長秀吉など出で、やゝ意をこゝに用ひたれども、いづれも治績を完うせずして世を去りしかば幾久しく續きし常闇を打破るには至らざりき、斯くて慶長年間關ヶ原の戦あり、元和に大坂の役あるなど、世はまた叫喚の聲絶えざる戰國世界となりぬ、以上を文學史中の暗黒時代とす。

此闇黒の裏に幽なる曙光を恵みそめたるは徳川家康なり、家康は亂れたる世を振り起さんには先學問の力に依らざる可らずとて、藤原肅を召して經義を講かしめ學校を創め經籍を梓に上すなどもはら力をこゝに注ぎしかば、儒學の萌芽盛に發し林信勝以下もろもろの儒者輩出し、家光を經綸吉の時代に至り漢學益發達し順庵仁齋等の鴻儒を出せり、斯く徳川政府は儒教主義をもて社會を治めんとしたれば漢學の盛になりもて行きしは勢まことに然る可き事ならむかし。されども凡世の中の事は反動を免れざるものなれば、漢學の盛なる下に壓抑せられ室町中葉後はほどほど枯れ果てんとしたる國學の芽も、いつかは機會を得て萌え出でざれば已まざるなり。

此徳川時代を少しく遡れば、またく國學界に人なかりしには非りき、さきに慶長の頃には細川幽齋ありき、又少しく後れては木下長嘯子ありき、幽齋は武の技に長けたる旁深く文學を嗜み、源氏物語廿一代集に通じ、殊に古今集の傳授を内大臣藤原實枝に受け、ながく室町の幕府に事へて有職の士なりければ又家康の恩顧を受けたり、されど唯京極黃門をのみ神の如崇み拜める頑固の傳授的歌人に過ぎざりき、長嘯子も關原の亂後大原野に潜みて風月をのみ友とせる詠歌者流に過ぎざりき、斯くたまたま和歌和文を知れるもの出でたれど、いかにせむ末の世の濁に染みし清き源に遡らんの勇氣なき因循家のみなるに、人才を擧げ用ひんとするの明主もいはず、時機もまだ到らざればにや、國學は猶漢學跋扈の下に呻吟まける。

然るに時は到りぬ、機は熟しぬ、上に千載の一人あらはれぬ、身は幕府の親藩に列り、夙に皇典を講き大義を明むる事の重きを知れり、明暦二年に修史局を駒込の別邸に開き、ついで寛文十二年彰考館を小石川邸に置き史臣をして大日本史を編ましめたり、此書我國史上の寶典ともいふべきものなり、又延寶六年には古今

の和文を集めて朝廷に奉りしに、扶桑拾葉集の名を賜ひて勅撰に准らへ玉へり、此集は嵯峨天皇御製萬葉集の序に始りて叙事範詞吊問送別等あらゆる古今の和文を集めたるものにして、漢學隆盛の時に當りて此事ありしは珍らしくも亦めでたき限にこそ。此外にも古典に關はる著書ども少からず、いづれも皆國學の萌芽を促し、春雨ならざるはなかりき。こは誰なりけむ、いはずとも知られなむ、西山義公と稱へ奉る水戸黃門光國卿にそ有ける。卿の眼光の慧き、はやくも當時の文學界を見渡し、上古と世を距る事遠くなりぬるまゝに萬葉集の古義も愈驢氣に語法益紊れて復た救ひ得られざらんとするものあるを見て、いたく慨み歎かれ國學復興の大任に膺り得可き學者にして、谷間の埋木空しく世に知られで朽ち果てんとするものを擧げ用ひ、此大事業を輔け成さしめてんものと望まれ、侍臣して弘く索めさせられぬ、契沖の出ん日もはや遠からざる可し。

さて先此選に當れるは下河邊長流なりき、當時潜みて難波に隠れたれど、萬葉を善く釋かんもの此人の外になしと聞えければ、侍臣して召されけれども容易くうけがはざりけり、さらばとて懇に筆紙を賜ひて彼集の註釋を托せられけるを、長流さすがに辭みかねてうけひきたれど、さりどつとめて之を成し終らんの意もなく、歌よむひまに思ひ出る毎に一首二首づゝ註釋しては筆を擱きつ、遂に得果さずて貞享三年の六月六十三歳を一期として身まかりぬ。卿之を口惜く思され、いかで長流に繼ぎて事を成し終ふせん人もがなと求め玉ひて、さてこそ長流の無二の親友釋契沖そが選に入りたれ、これぞ一庵の法師契沖が自ら國學者と名告りておほやけの文壇に登り國學復興の大任を雙の肩に擔ひて奮ひ起ちたるはじめなりける。斯くて契沖幾多の辛勞に堪え二度稿を更むるの後遂に長流遺稿萬葉代匠記を繼述し編成して奉りぬ、卿大に悦ばれ、板垣宗瞻を

使としてあまたかつけものを賜ひ、且近日水戸家にて釋萬葉集を編み契沖の説をも採り入れて大成の上は九重に献りなほ弘く世に出さん思召なれば奏覽を経るまでは此代匠記を世に出すまじき由禁ぜられぬ、こは幾分壓制なるに似たれど、封建の世に生れ且生來謙遜なる契沖は恭しく其旨を承り、手許に残れる草稿をも悉く奉りて他念なき事を示したるのみか、更に古今集の註釋古今餘材抄を作りて奉りぬ、萬葉古今の古義こゝに始めて明かなる事を得たり。卿こを見て契沖が己に信服する心厚く己の所思大に成らんとするを深く悦び、契沖を厚くねぎらひとらせつ、此後も年々米穀など賜はせたり、かくて天には春雨降りて萌芽を促し、地には自鋤鋤を採りて「うたのあらす田」を耕さんとする農夫いで來にければ、國學の若芽やうやう萌芽を出でんとするさいさき見えぬ。

卿は又佛敎を信じ玉へるが故に、此の縁によりても親みを厚くするを得たり。親み益厚く遂に徳川御三家の御身分として、貧僧在住の草庵をゆかしがり玉ふに至れり、契沖は前に述べつる如く固く辭みて拜謁せざりければ、卿の學者を遇せらるゝ事の厚き、其儒臣安藤爲章をして淫に契沖の庵を叩きて敎を受けしめ其學説の傳統を失はざらしめ、且二人の間の交を繋がしめられき。爲章より契沖への文書の中に、

一先頃被遣候二封中納言殿直に開封感賞之義にて先文匣へ被納自圓珠師珍奇之説得候間我々共へも退而傳授可被成との事に御座候云々

一新寫觀音像并經早速頂禮被成其後被遣候壽命經も拜闕の後被納左右御深情之段不淺思召候

又同人著年山紀聞に記せる事によりて當時の様おほ方想ひやらるべし、

義公今年の春より痞積の病起り玉ひて御不食ましましけるにはやく神識かむしりに知らせたまひてにや正月末にて

侍りし御釋を大阪へ持上り契沖に悉しく一覽し伏藏なく是非を記し申すべき由を詔のたまひしかば爲章二月に水戸を發して東高津の側に寄宿して七月の末まで契沖翁に對照し何くれの不審を申はるけ侍りけり御不食月々に重らせ玉ふ由承りしかば八月の末つ方水戸に下向し西山へ參りしかじかの御答を申たるにいとよるこばせ玉ひしぞかし果して其年の十二月六日に薨去ましましける契沖師も明年の正月二十五日に身まかられけり云々。

さるは元祿十三年の初春に釋萬葉集五十卷成り卿の素志もまたく成り、契沖が代匠記を作りしかひも顯はれ、契沖はこれが跋を書きて奉り、卿も大に満足に思召けるが、幾くもあらず病の爲に身まかられたるなり。契沖獨生残りて「さもこそは西山おろし吹き果めいかで通ひし住吉の松」など口ずさみつ、悲しき月日を送りけるが、やがて又卿の跡を慕ひて身まかりぬ。遺言狀に曰く

水戸様より毎年被下候飯料早々何も寄合返納可給候元來申受候事野僧非本意常に存候へども無力蒙御恩候と是をもも契沖が律義一すじにて世を終りし事を知る可く又卿が學者を厚くもてなされたる事を知るべし。契沖は卿の生れたる世に生れ卿が人才を求むる世に生れ、卿に識られ卿に愛でられ卿に輔けられて國學復興の基を成し、後、卿の身まかられしに伴れて身まかりぬ。此二人の關係は柳澤吉保と荻生徂徠との似たるものから、尙一層こまやかなりしなり。僧の義剛もいへる事ありき。「義公に非れば師の高尙を尊む事能はず師に非れば義公の簡選に中る能はじ。其終を要するに相須つ者の如し、眞に千載の一遇なる哉」と。(未完)附記、次號にて緒論を終るべく、猶次々に本論餘論に説き及ばさんとす。

文苑

雁の賦

うきね

微月冷かに虹橋晴る、とき數行の陣を作るは孫吳の術をや得たる。絳霄に書す一行の字と云ひ天に横たふ阿蘭陀文字と云へば學漢洋を兼ねたるならん。さるに何とて帛書の信を傳ふること漢土にのみ限りて洋州にては鳩に其職を奪はれけむ、いと口惜し。遮莫仲秋の月鴻に伴ひて來賓する儀容典雅に、孟春の月歸るに群を率ゐて四德具れり。中々人にして汝に及はざる輩は漸死す可きにや、媒鳳の爲に誘はれて捕はるゝを愚なりと譏らんか、夫はあさむく者の奸智なるにて汝の正しきに於て何かあらむ。且身は繒織のうきめしげくて雁來紅の露より脆く消ゆる共、人は死して名をとゞめ豹は死して皮をとゞめ、こゝに哀をとゞむる汝の亡骸は鍋中に煮られて衆生を濟度すること死後の譽。千里の馬骨に優れり。さてこそ風呂たきて菩提を弔ふ外々濱邊の民もあるなれ。若夫杉霜台の詩に入りては横槩の慨千歳の下英雄の面影を想はしめ、曾我兄弟が親を慕ふ志を示しては三寸の蛇氣百世を隔てゝ佳人の紅涙を濺がしむ。噫、秋に月に春に雲に伴て詩歌史籍に入る汝二季鳥の羨ましきよ。

紀元節を祝ひ奉る長歌

中村孝

二千年五百年と又、五十あまり五年の昔、そらみつ大和の國に、宮柱太敷建てゝ、秋津島大和島根に、大御代をまろしめしつる、此月の此日にあひて、高御座天津日嗣の、天地のいや遠長く、松柏の榮えいまさねと、年毎にこひのみまつり、祝島祝ひ奉りぬ、志かはあれど此年はかり、此月の此日の朝の、尊かる事なかりけり、長かる事なかりけり、唐土のこきしことむけ、つかの木のいやつきつきに、榎原の宮の御稜威と、皇國の國の光を、四方八方に輝かしたる今年はかりは。

梅

花曙山人

春たちかへるのどけさに、
野邊のわか草萌えいで、
昨日や今日のはるさめに、
をがはのきしの梅のはな、
うすくれなゐに露を帯び、
にほひこぼるゝやさすがた、
かすみも春の長閑けさに、
さえたに歌ふうぐひすの、

いつしかゆきも淺茅生の、
かすみは淡くたなびきぬ。
ながめさみしき深山路の、
かほり床しく咲きそめぬ。
はなの樹末にほゝるみて、
あま津女乙にさも似たり。
いまぞ谷の戸いできつと、
はつ音をきくも遠からし。

はなの色香にあくがれて、
 吹くとしもなきはる風に、
 獨り愛づるもをしければ、
 うき世の外にはるありと、
 花もこゝろのありてにや、
 二ひら三ひらまた四ひら、
 あらしも強く吹かばふけ、
 こゝろのをじめ堅ければ、

樹のした蔭にたちよれば、
 にほひは満ちぬわが袖に。
 清きながれに香を染めて、
 すす汲む人にしらしめてよ。
 そよ吹く風にはら／＼と、
 みづのまに／＼流れゆく。
 なれがみさをは變りなく、
 散りての後も惜しまじな。

勅題

寄海祝(詠進)

香村 茂富

大君の御惠ふかきうなはらのなみなき國はうらやすの國

水邊若菜

汀よりまつもえいてぬ初若菜河よりはるは流れ來にけむ
 あつさ弓池の汀にうぐひすの初根芹こそもえいてにけれ

寄山祝

神代より手振かはらぬ鏡山くもらぬ御代をうつし見よどか

いとふかき君か學にわたつみの沖の玉藻も世にいてにけり
 岡村教授の博士の學位を得たまひしを祝ひて

大林 徳太郎

春の歌三首

大林 徳太郎

立春雪 春されは梢における白雪も花かど見えてあはれなりけり
 餘寒月 夕月の影を霞にたてこめて春風寒く泡雪を降る
 尋花 春毎に花の香の誘はすは世にふるやどのありとしらめや

詩

朝鮮朴君泳孝任内務大臣以書見惠賦此却寄

黃鼎 白衣

江湖漂泊一孤舟、今日皇恩賜紫驪、臺閣更持新玉笏、邦家漸復古金甌、贈袍於我有深誼、借箸知君存偉謀、翻憶才人泉下恨、生前不遇策勳秋、云金君玉珂
 家門寂寞故人稠、一望天涯憶昔遊、杖錫當年欲歸佛、風雲此日見封侯、墳塋先洒英雄淚、社稷長除聖主憂、回首聯吟恍如夢、月明相國寺中秋。

寧齋主人曰、瓠船風雲際會、十年螻蛄、漸將伸其志、而韓國更革亦當大成也、前首三四、叙現在之得意、彷彿如見、後首三四、俯仰低徊、尤推有情、有色文字、

乙未新年

同人

凱歌回吉夢、一笑對梅花、鴻業千秋振、兵威萬國加、春風添版籍、臘雪尙山家、眼見祥雲滿、曉鷄真

可嘉。

寧齋曰、一起突如、却覺流動靈活、前聯莊重、後聯亦可誦、

覽勝亭送西村南陽之朝鮮二首

熱

童

高樓送客酌斜陽、滿坐青衿離曲長、仰首前山楓樹錦、彩紅寫出丈夫腸、由來功業在艱難、將士西征臥鐵鞍、若入韓山尋戰跡、知君意氣益加寬、

送學友西村南陽之朝鮮

朔

岱

鵬子高飛大海濱、休悲袂別絕同群、雄圖更逐金鷲去、踏破雞林入道雲、

晚秋渡親部江歸于鄉里

一溪秋水浮舟還、白露紅楓兩岸間、烏鵲晚來飛向北、萬柯寥落古城山、

雪中雨田越

朔風吹雪暮山隈、寒壓征衾醉乍回、更買青樽尋舊路、一輪團月趁車來、



雜錄

火藥之話

今井省三

火藥は千三百二十年日耳曼の僧「ベルトルド、シュアルツ」氏の發明に係ると云ひ或は英吉利の僧「ロジャール、ベリコン」氏の發明する所なりと云ふ而して火藥を用ゐたる戦具は千三百一十五年「フロレンス」に於て初めて試用せられたるが如しと雖とも大砲に用ゐられしは千三百四十六年「シレッシー」戦争の時英軍の使用せしを以て始めとす但し支那に於ては余程古代より火藥を製造するを知りしものゝ如し或は歐洲の製造法も支那より傳りしに非すやと云ふものあるも確定せざるなり

今火藥の成分に就て言はんは火藥は混合物にして化合物にあらず即ち硝石 KNO_3 炭 C 及硫黃の混合物なり凡そ混合物に於ては其之を作る各成分は只相混しあるのみにして各自獨特の性質を依然保有するものなり故に今火藥の混合物なるを知らんと欲せば其成分なる硝石、炭及硫黃の各其獨特の性質を保有するを知らば足れり先づ火藥を取り之に水を加へ煮沸し後之を漉過し其漉液を取りて之に硫酸鐵の溶液を注ぎ更に硫酸を注ぐときは褐色を生ず之れ硝酸化合物の漉液中に現存するを知る又此漉液を蒸發して結晶を得て之を火炭中にて燃焼するに「ポッタシユム」の反應あり其結晶の形狀與其他の反應に由りて確かに硝石の漉液中に溶解しあるとを知る次に又硫黃は二硫化炭素に溶解するを以て以前の渣滓を取り二硫化炭素を加へ能く振盪して之を漉過して蒸發せしむるときは黄色の硫黃の結晶を得るを以て硫黃の存在を知るなり終りに又其渣滓を

驗して炭なるを知る而して炭は水にも二硫化炭素にも溶解せずして殘留せしなり故に火藥中の各物は盡く各自獨殊の性質を保有するを知る即ち火藥は以上三物の混合物なるを知るなり

既に火藥は硝石、炭及硫黃の混合物なるを知らば其目的たる爆裂するは此三物中孰れの作用によるかを驗せん先つ硫黃を取り之を熱するも決して爆裂するとなし又炭を熱するも亦然り次に硝石を熱するも同じく爆發せず故に其の爆裂は此等三物中孰れもの作用にあらざるを知るなり次に此三物中二物相混じて驗せんに先つ硝石と硫黃との混合物に鐵線を赤熱して觸るゝも爆裂するとなし次に硝石と炭との混合物を以前の如く試むるときは炭は熾に燃ゆるなり其理は通常空中にて炭の燃ゆると異なるとなく酸化作用によるも硝石と混するときには硝石中には其百分の四十八の酸素を有し空中の酸素百分の二十三に比するときは二倍強の酸素を有す故に斯く熾に燃ゆるなり故に火藥の燃えて爆裂するは此の硝石と炭との作用によるなり斯く火藥の爆裂は炭の酸化作用に歸するるときは硝石に代ふるに智利硝石或は鹽酸加里の如き他の多量の酸素を有するものを用ふるも差支なかるべしと考ふる人あるも知るべからず然れども智利硝石は之を空中に置くとときは水分を吸収し易し凡そ火藥は其百分の五以下の水分を吸収するときは之を乾かして又用に供しうるも其百分の十四以上の水分を吸収するときは最早用に堪えず故に其多量の酸素を有するも水分を吸収し易き智利硝石の如きは硝石に劣るなり又鹽酸加里は其酸素を有する量稍々硝石と同様なるも炭素と化合して非常に激烈なる爆發を起すが故に却て硝石を用ふるよりも不便なり近頃英人「シンドレル」氏の改良考案に由れば鹽酸加里十二分砂糖三分無煙炭五分を混するときは無煙炭の質木炭に比して濃密なるを以て鹽酸加里の急激に分解するを制止すべしと云ふ斯く火藥の燃ゆるは硝石と炭とによるときは硫黃は如何なる用をなすやと問ふに硫黃は火藥をし

て燃え易からしむるものなり今硝石と炭との混合物と硝石、炭及硫黃との混合物を取り各々鐵線を熱して觸れしめて比較するに其硫黃を混じたるものは激しく燃ゆるなり故に硫黃は火藥をして燃え易からしむるものなりと明なり然れども火藥は通常人の考ふる如く決して燃え易きものにあらざして鐵粉より燃え難きものなり今酒精を燃し其炎上に鐵粉を撒布するときは火花を發して燃ゆるも火藥を撒布するも決して燃ゆるとなく攝氏三百度以上の熱にあらざれば燃ゆるとなしされども摩擦或は急激なる打撃のために燃えて爆發するものなり

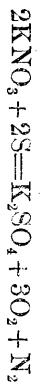
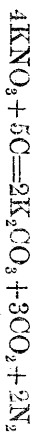
火藥をして善く燃えて爆發せしむるには其原料の選擇及其製造の如何によるものなり先つ其炭は輕き木材を漸々に燃して得たる炭を良しとす而して燃え易からしむるには其燃料及酸素供給物は極めて密接するを要す故に硝石、炭及硫黃は之を細末とし且つ能く之を混ぜざるべからず而して之を混するには臼に入れて搗き混するなり其之を混するには危険物なるを以て爆裂の患あり故に之を製造するの際充分注意を要す而して又其水分を吸収するを防ぐには摩擦によりて粒面を滑澤ならしめ或は石墨粉を塗るものあり

火藥の爆發するときは種々錯雜なる化學變化を生ず既に述べたる如く硝石中の酸素は炭と化合することを知る此時炭酸瓦斯を生し其窒素は遊離して「ポッターシウム」は硫黃と化合して硫化加里を生するなり之を化學方程式にて示せば次の如し



此方程式を見るに硝石の二分子、硫黃の一原子、及炭の三原子の割合なり通常殆んど此割合を以て混合して製しれる火藥は其爆發の際最も良き結果を生ずるとは實際知る所なり此方程式は甚だ簡單なる變化を示すに

過ずして實際は其他種々の瓦斯及び固體を生ず例之は瓦斯には一酸化炭素、硫化水素、酸素等にして固體には炭酸加里、硫酸加里等なり茲に一二の變化を方程式にて示せば次の如し



或は
今以前の簡單なる方程式に就て論ずるに火藥の爆發するときは其用ゐられたる火藥の容量に比して甚だ多量なる瓦斯を生ずると明なり其爆發するや極めて急激にして其際生ずる處の熱量多きが故に生したる多量の瓦斯は爆發の瞬間に莫大なる容積に膨脹するなり故に火藥の要する容積の千倍或は千五百倍の空間を要するとせば其時生ずる壓力は従ふて非常に大なるを以て彈丸は非常なる速度を得て發射するに至るなり

故に火藥は理論上よりするときには最も單簡なる割合は硝石の七十四、八四と炭の十三、三二及び硫黃の十一、八四よりなるものなり然れども實際各國によりて其割合を異にするものにして次に各國火藥製造の割合を掲

國名	硝石	炭	硫黃
英吉利。魯西亞。瑞典。伊太利。土耳其及北米合衆國	75	15	10
佛 蘭 西	77	15	8
普 魯 士。撒 遜	74	10	16
西 班 牙	75	12.5	12.5

澳 大 利 亞	75.5	10	14.5
和 蘭	70	14	16
支 那	61.5	15.5	23

斯く其割合は國によりて異なるも上に述べし硝石七十四、八四炭十三、三二硫黃十一、八四とは大同小異なり而して其割合は皆之を秘密にする所にして我邦の火藥の割合も亦之を知ると能はず假令之を知ると今日之を云ふを憚る所なり

火藥にも種類ありて其用所によりて又其割合を異にするものなり鑛山用火藥 MINING POWDER なるものありて此のものは岩石を崩壊するに鑛夫の用ふる所にして其の硫黃の割合他のものに比して多し即ち次の如し

國名	硝石	硫黃	炭
佛 蘭 西	62	20	18
英 吉 利	65	20	15
伊 太 利	70	18	12

而して此火藥によりて生ずる瓦斯の容積は大なるも之を銃に用ふるときは生ずる處の熱量少き爲に割合に瓦斯の容積を膨脹せしむる能はず又多量の硫黃を含むが故に銃身を腐蝕すると多し故に銃に使用せず

又 BROWN POWDER なるものあり之は千八百八十四年日耳曼人「ハイデーマン」氏の發明する所にして之に用ふる炭は藁を徐かに焼きて得たるものを用ゐしものにして硝石七十九分硫黃三分藁炭十八分よりなる此

火薬は徐かに燃えて銃身を壓す力弱きも彈丸を壓す力大にして煙は淡し此他千八百六十年米將「ロドマン」氏の發明に係る柱狀火薬 PRISMATIC-POWDER あり凡そ火薬は其初め一時に燃ゆるよりも初め徐かに燃え其彈丸の運動し始めんとするときに熾に燃ゆるを良しとす然るに火薬の外表面より燃ゆるときは燃ゆるに従ふて其面積は減じ爲めに其壓力は初めに強くして燃ゆるに従ふて弱し故に氏は之を改良して火薬を中空なる六角柱の塊とし内面より燃ゆる様になしたるものなり

爆裂物には火薬の外綿火薬 GUN-COTTON 及「ダイナマイト」等あり而して爆裂の激しきは混合物よりも化合物とす然れども此等の爆裂の激しきものを銃に用ふるときは彈丸を飛ばしむる以前に銃身を破壊すべし而して混合物中の爆裂物中最も普通なるものを火薬とす

今左に火薬は他の爆裂物に比して優れる諸點を擧げて此講話を結ぶべし

(第一) 火薬爆裂の速さは他の爆裂物に比して徐々に起り且つ其成分の割合を適宜に變じ又其製造の方法に由り各種の戦具に適當したるものを製造し得ると

(第二) 火薬の原料を得るは容易にして且つ比較的に高價ならざると

(第三) 火薬は比較的に安全に製造するとを得又之を貯藏し或は運搬するにも危険甚だ少し而して乾燥なる空氣中にて久しきを経るも使用に堪ふると

感 愴 錄

泡 し ま 青 蛾

一、李 婉 兒、

『豪華風流盡善盡美と思はるゝ程のものとして備らざるなく山獵に牽く黃犬は脚の疾きを選ひ野遊に放つ蒼鷹は翼健なるを擇ひ立並へたる馬群千騎は鐵蹄砂を蹴り銀鼠風に櫛る龍文汗血の逸物なり、饌は陸海珍羞の美を集め飲は中山三年の夢を想はしむ、歌臺舞榭に美妙の天音響くは霓裳羽衣の曲をや奏づる、實に筆の能く寫す所に非ず詞の能く盡くす可きに非ず。されど噫、豫言者が一瞥の下に幻影は泡沫と消ゆるこそ哀なれ。紅顔の將軍忽白髮の野翁と化し絶代の麗姬見る中に醜怪の老婆となりぬ、金銀珠玉は一堆の瓦礫、杯盤觴壺は幾個の坭塊、醇酒水に似て淡く、滋肉蠟の如く味無し、天晴宏壯雄大の殿樓は旭日の前に霜とどけて残るは數個の見るもいぶせき暗々たる洞穴あるのみ。喜見城裏一場の春夢刹那にさめ來りて片影を留めず』。

と、是蘇格が「巫魔經」に於て烟の如き影の如き妖精の生活を寫せしもの也。然れ共さめやすきは豈たに其所謂「皎々たる明月の光を浴みて盛饌快飲、洋々として歌ひ娑婆として舞ふ」妖精が夢のみならんや。借て以て人世五十年の豪華が朝露の如く泡沫の如きを序す可く、又唯に一人一代の榮枯得失のみならむや、更に進て一府一國の盛衰隆替をも描き得可し。然り而して予は十四世紀の羅馬府が過去の歴史を顧みて前文の感甚しきものあるを看ると共に、羅馬府の共和時代末造に一異彩を放ちたる一偉人の生涯が如何に此妖精の夢と相似たるかを觀む。

若し夫れ人間の社會に文字無く記傳無くんば假令口々相傳を千百年の間よく相遺忘する事なからしむるも、はた古壘廢園荒臺敗寺斷碣殘墳の後人の眼底に映するあるも、温故の法今日の如くならざると共に、懷舊の情は如何計うすかりけむ。此情起りて彼法生ぜしか、此術によりて彼情盛となりしかは措て問はず、唯此二者の相呼び相應じて人間一代一世の志想界の少くも幾要素を成し行けるは事實ぞかし。熟社會の狀態を觀るに變化出沒摩訶不可思議の小旋大渦をなし急湍と激し深淵と澁み恰も Maelstrom の如く滔々滾々流れて日夜をわかつたざる、何處をあてど白波の逝きて歸らぬ飛鳥川豈僅に淵の瀬となり桑田の碧海と變するが如きのみならむや、然れ共此波は所謂水の皮なると一般、社會の大流にも眼に著き皮層は物質界の變化のみ、骨は何ぞと問はば是志想的變遷と答へむ。左れば龍動の橋朽ちて騷人を感愴せしめ聖、彼得堡蘆花白くして詩人昔を忍ぶ世となるとも志想は常に一步後れて遙かに過去をたどるらん。噫宇宙の眼より見れば一刹那、人世の方面より見れば古き二千六百五十年の昔、トロイ勇將の後胤、意答利ラチュムの野に基を開きて以來、一度は英雄雲の如く美人花に似て浮世の樂園、人間の黄金界と榮え時めき、一度は馬蹄の塵に埋れ來りてチベルの流に虐殺の血千里紅を漂はし七山の峯叫喊の聲に草木震動し、又一度は怪風陰々嶽裡幽鬼哭し、暗雲漠々荒園妖狐泣き、不徳の臭は鮮血より腥く兪膾の心は毒蛇より恐ろしく、幾多の境遇を経來りし羅馬府の名が如何に長く如何に廣く如何に様々に上下古今幾億萬人の腦漿にしみ渡りしかは、三千年後の今日猶カムパニヤの野に其遺跡をとどる者踵をたゞざるに於て見る可し、何ぞ獨ヤボンが稀有の史筆をのせて懷感を古城の月に注ぎしを怪まむ、誰か神聖羅馬帝國の名が中世紀の志想界に一大魔力を有せしを愕らむ。

梵鯨の徑丈に餘る者は其餘音殷々として長く人の耳底に徹して容易に忘れられず屢追想を催すとあり、况や曾て世界に鳴渡りたる羅馬に於てをや、王政の古は邈たり、アウグスツスの黄金時代もツェスチニアンの盛時も夢と去りぬれど、花は無情の暴漢に蹂躪されて後尙其盛を追憶して再咲かせんと思ふは人の情、此眺せんとせし者カールを始め夫幾許ぞ、彼等異域の主既に然り、况や身此古都に生れ目親しく其荒廢を睹し者にして回頭一番豪華善美の往昔を懷はば三寸の筆は詩人の意を迎へて揮ひ、三尺の劍は英雄を待たずして鞘を脱するの感莫らんや、加之十四世紀の始凌雲の樹根朽ちて蠱を生じ羅馬の共和腐敗して危機滿ち上に膏血を貪りて飽くなき貴族あり下に怨嗟變を希ふの民ありて人心萍の如く動く時に當りて苟も感慨の士茲に處り此を看、而して其腦裡には烈々たる神聖羅馬の全盛姿、光火の如く閃めくあらんには如何でか袖手傍觀徒らに醉死の悟道を學びて死灰の如く冷々たるを得んや、何ぞ半生の運命を賭けて絶大の業を試みざらむや。果然其人ありて起ち此古都の未造に一道天を焦して忽焉消てあどなき烽火の如き異彩を放ちき。彼抑何底者ぞ、文弱の一書生絳唇に衆聽を蠱惑するの辨あれど腕に雞を割くの力疑はし、唯嘗て讀みし史籍と眼前看る荒廢はさらでも強き神聖羅馬の當代思想に油を注ぎ薪を添え、貴族の鋒鏑に斃れし愛弟を思ふの情切なると共に彼等を憎む革命的平民的精神禁じ得ず遂に自ら羅馬往昔の降盛を恢復する天遣の神使なりと信じて起ちし美男兒、妖精の春夢が豫言者の一瞥に破れし如く羅馬の盛期も蠻族の一炬に焼かれ畢りし昔を愴みし其身の企圖もさかり短き春の花、賤心なき暴徒の嵐に散りて名のみ著く記録の上に残り今東洋の一措大が想に入る者、則尼固羅斯、李婉兒是なり。(未完)

On the other hand this differential coefficient must vanish for some value of Z between X and a . Let that value of Z be $a + \theta(X-a)$, where $0 < \theta < 1$, or θ is a proper fraction. Then we have

$$\frac{-\{X-a-\theta(X-a)\}^{n-1}}{n-1} f^{(n)}\{a+\theta(X-a)\} + \{X-a-\theta(X-a)\}^p Q = 0$$

$$\therefore Q = \frac{(1-\theta)^{n-p-1}(X-a)^{n-p-1}}{n-1} f^{(n)}\{a+\theta(X-a)\} \dots \dots \dots (3)$$

Now put $h=(X-a)$, and substitute this value of Q in (1), then we have

$$f(a+h) = f(a) + \frac{h}{1} f'(a) + \frac{h^2}{2} f''(a) + \frac{h^3}{3} f'''(a) + \dots$$

$$+ \frac{h^{n-1}}{n-1} f^{(n-1)}(a) + \frac{(1-\theta)^{n-p-1} h^n}{n-1(p+1)} f^{(n)}(a+\theta h).$$

In which $\frac{(1-\theta)^{n-p-1} h^n}{n-1(p+1)} f^{(n)}(a+\theta h)$ is called Schlömlich and Roche's formula of the remainder after n terms.

Put $p+1=n$, then we have the well known remainder of Lagrange, *i. e.*

$$\frac{h^n}{n} f^{(n)}(a+\theta h)$$

Put $p=0$, then we have the Second Form of Remainder or Cauchy's formula of remainder, *i. e.*

$$\frac{(1-\theta)^{n-1} h^n}{n-1} f^{(n)}(a+\theta h).$$

By N. A. S. I.

Schlömlich and Roche's Remainder on Taylor's Series.

The most general form of the remainder after n terms of Taylor's Series was given by Schlömlich and Roche.

Now, let an expression

$$\frac{p+1}{(X-a)^{p+1}} \left\{ f(X) - f(a) - (X-a)f'(a) - \frac{(X-a)^2}{2} f''(a) - \frac{(X-a)^3}{3} f'''(a) - \dots \right.$$

$$\left. - \frac{(X-a)^{n-1}}{n-1} f^{(n-1)}(a) \right\} = Q \dots \dots \dots (1)$$

a form suggested by Taylor's Series, and in which p is an arbitrary number, then an expression

$$f(X) - f(Z) - (X-Z)f'(Z) - \frac{(X-Z)^2}{2} f''(Z) - \frac{(X-Z)^3}{3} f'''(Z) - \dots$$

$$- \frac{(X-Z)^{n-1}}{n-1} f^{(n-1)}(Z) - \frac{(X-Z)^{p+1}}{p+1} Q \dots \dots \dots (2)$$

obtained by substituting Z for a throughout the series, vanishes when $Z=X$, and $Z=a$.

The differential coefficient of (2) with regard to Z becomes

$$-f'(Z) + f'(Z) - (X-Z)f''(Z) + (X-Z)f''(Z) - \frac{(X-Z)^2}{2} f'''(Z) + \dots$$

$$+ \frac{(X-Z)^{n-2}}{n-2} f^{(n-1)}(Z) - \frac{(X-Z)^{n-1}}{n-1} f^{(n)}(Z) + (X-Z)^p Q$$

or $= -\frac{(X-Z)^{n-1}}{n-1} f^{(n)}(Z) + (X-Z)^p Q$, because the terms destroy

each other in pairs, but last two.

五十二

雜

錄

五十二

批評

第一高等學校校友會雜誌第四十三號を讀む

愈唐直言生

已に校友會雜誌第四十三號を讀むといふ、全卷を通覽したるや知るべきなり、然りと雖も頃日俗事の僕が身に蝟集し來れるあり、乃ち唯該號の懸賞文と論說欄内とを鹿評して、他は他日多閑の日に譲らんとす、若し校友會の會員諸君にして此評をよみ、以て其妄言を怒ることあらば、こゝにはじめて直言生の價値はわかりぬべし。

嗚呼諸君、請ふ直言生なる僕をして忌憚なく其所思を吐かしめよ、僕は元來懸賞文は大嫌ひなり、ワシントン、アルゴンソ管てウエストミニスタル、アツバーを訪ふて曰く

Other men are known to posterity only through the medium of history, which is continually growing faint and obscure: but the intercourse between the author and his fellow men is very new, active, and immediate.

He has lived for them more than himself, he has sacrificed surrounding enjoyments, and shut himself up from the delights of social life, that he might the more intimately commune with distant minds and distant ages.

と此警語は單に文士騷客のみを誡ましむるの語にあらざ、苟くも一事業を興して之れを不朽に生存せしめん

と欲せば、須らく周圍の毀譽褒貶を脱して、後世子孫と語るの覺悟なかるべからず、徒らに時好の爲めに驅られて文を草し、賞之れ得ざらんことを恐るゝは、僕が大に取らざる處なり、懸賞文は自ら欺きて審査員の意に投ずるの恐あり、賞を己れの精神内に求めずして、強て他の言語中に求むるの弊に陥り易し、之れ僕が懸賞文を取らざる所以なり、難する者曰く君が論は野暴なり、高が學校の小雜誌、君が欲する處は大に過ぐと、嗚呼渠れ既に己れを侮る、何んぞ他に侮られざらんや、自暴自棄の論者は僕の與せざる處なり、

懸賞文國旗の説第一第二等と讀み行けば、平々坦々何の面白味もなし、恰も荒涼たる原野間に敷設せる鐵路の上をつまたてゝ走るが如し、人を刺激し感動すべき些の點あるなし、これ懸賞文題の悪しきが爲か、はた懸賞夫れ自身の卑しむべきが爲か、

論說欄内眞ッ先きに掲げたるは鵜澤氏の「希望論」なり、滔々説き去り説き來り、而して氏自が氏に希望ありやと尋ねて、茫然自失せるが如く、僕も亦氏が論をよみて茫然自失せり、氏は希望の面影を認めて曰く、希望とは我が數十年の生命を執りて永遠に繋ぐものなり、わが物質上の人世觀を精神上のそれに連結せしむるものなりと、其言偉なるが如く見ゆるも、未だ讀者をして遽かに首肯せしむること能はず、こゝに所謂連結とは果して奈何なる意義か、はた數十年の生命を執りて永遠に繋ぐとは果して奈何なる意義か、滔々たる數千言の中に氏は終に之れを説明せざりき、氏はひそかに希望の面影を得たりとて喜ぶも、僕は其喜ぶべき所以を見ず、氏は第一に正義と愛となき希望は眞の希望にあらざといひ、次に希望は恐怖を去り、疑惑を解き、險道を轉じて坦坦たる廣路とならしむべしといひ、最後に教育を三箇に區別して、小天地育が尤強く希望を育成するものなることを論じ、さて是を之れ數十年の生命を執りて永遠に繋ぐといひ、物質上の人世觀

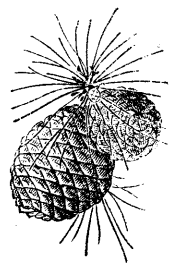
を精神上のそれに連結せしむと謂と結論せり、僕はいかにしてかゝる結論のかゝる前提より生し來れるかを辨ずる能はず、氏が論よりして推しゆれば、所謂小天地育こそ、數十年の生命を執りて永遠に繋ぎ、物質上の人世觀を精神上のそれに連結せしむべけれ、希望争でかかゝる結果を生ぜん、氏はいふ希望の前には忍耐あり、忍耐の前には確信あり、確信の前にはあらゆる疑惑を解くべき大勢力あり、斯くの如くに非ずんば希望は希望に非ず、空想のみ、虚妄のみと、此説こそや、希望を解明したるものとはいはめ、之れを要するに鵜澤氏は餘りに議論を花々しくなさんが爲めに、自ら亂雜に陥れり、亂雜に陥りしが故に論文の唯一要素たる明毫を欠けり、是れ僕が大に氏の爲めに惜む所なり、

鵜澤氏の希望論に次ぎて掲げられしは中山久四郎氏の「政治と道徳」なり、氏は政治と道徳との關係を論じて、現代の政治家に徳義を重んぜよと希望したり、然りと雖も之れ到底空論たるに過ぎず、見よ、滔々たる世の國家學者、渠等の眼中には絶えて麗はしき人情なく、又絶えて浩大なる世界あることなし、苟くも國家と衝突するものあらば、たとへ如何に善美なるものも、たとへ如何に真理なるものも、擧げて之れを放棄してまた惜むの色なし、渠等は家屋を構成する諸種の材料を悉く破壊して、唯一つの支柱に倚りて雨露を凌かんとす、ジョンソンは例の諧謔的口調を以て冷罵して曰く、愛國主義は賤漢が最後の遁辭なりと アルノルドは其語を引用して切齒して曰く、余はかの愛國主義なる美しき假面の下に、有害なる氣取、自惚等の多量が潜伏しつゝあるを疑はず、物はある通りにあるなり、結果は結果すべき通りに結果するなり、吾人豈に欺かるゝを願はんやと、バットラル僧正の言、頑は即ち頑なりと雖も、一箇人に取りても一國民に取りても實に健全なる格言といふべしと、夫れ過失は無意識なり、假面は有意識なり、無意識は之れに刺激を與ふれば

猛然として覺醒す、有意識に至つて僕之れを覺醒するの術を知らず、國家には真面目の愛國者少なし、多くは之れ假面的なり、故に僕は中山氏の痛論が空しく、現代の政治家に聞き流されむことを悲む、

次は竹田氏の「抄史偶感」なり、其論の大略に至つて即ち中山氏の「政治と道徳」の論意に等し、故に僕はこゝに之れが贅評せず、唯氏に向つて謝せんとする處は、悉く例を歴史の間に探りて、叮嚀反復論じ詰めたるにあり、

以上は校友會雜誌第四十三號の略評なり、之れを要するに、論說欄内三文あるが中に最も上手にして面白かりしは鵜澤氏の希望論なり、蓋し平凡なる論文は一般のことを論じて止むが故に自ら矛楯に陥らずして明亮なり、さはれ人に先んじて名説を吐かんと欲せば、心氣勃々として自ら盲せんとするの傾きあるなり、若し夫れ鵜澤氏が慈愛と正義なくんば、我何ぞ希望といはんやと論じたるが如きは、實に卓論といはざるべからず、就中かのハルトマンが想を分ちて、類、箇、小天地想となしゝにならひて、教育を分ちて類、箇、小天地育となし、應用の如きは、才子にあらずんば何ぞ能くかくの如くならんや、鵜澤氏請ふ自愛せよ、妄評謝罪、



雜報

初見の辭

北辰會設立して北辰會雜誌亦發刊せられんとす、而して我輩誤て部長の推薦するところとなり、創立多難の際に當て、任を雜誌部委員に受く、願れば身は學淺くして識低く、秘思を拙んで、而して研辭を購するに足るなき也、故に情を陳して辭表を呈せしもの、再三に及んで遂に許されず、こゝに止むなく意を決し、其職を汚すことゝとはなりぬ、是より觚を操り毫を含んで、諸君と紙上に相見るに至らんとす、噫芳粧を播き青條を發するが如きは、到底吾輩の及はざる所なれ共、平生幾分の期するものなきに非らず、依て是より筆硯に對して、思ふ所を綴り、敢て本誌發刊の主旨を貫徹せんとを誓ふ、聊か記して初見の辭となす

雪なる哉雪や

花に吟せんか花の勝區なし、月に嘯かんか月の名所なし、唯北陸は雪を以て鳴る而已、雪なる哉雪なる哉、聞く南人はこれに對して寒肌に泣き、北客はこれを踏て健骨を鍛ふと、尾山城畔一帶の地、棟費低ふして雪路高し、思ふに藍關の瘦馬の能進むところに非ずして、而も瀟橋の驢子亦半にして儼れん而已、然れども諸君決してこれに屈するなく、須らく凍雪を以て其健骨を鍛ひ、他日躍て斗牛の間を犯し、逍遙雲に駕して、瑤池に沅瀆を傾くべし、噫花に吟するは一時のみ、月に嘯くも一時のみ、獨り雪に至ては然らず

紀元嘉節

紀元二千五百五十五年二月十一日は
皇祖建國の嘉節、我校は例によりて全日午前十時職員生徒一同講堂に集まり謹で
尊影を拜し、勅語朗讀畢りて解散。都、紀元嘉節

を祝するもの茲に幾許年而も征清の軍連戰連捷旅

順に威海衛に向ふ所敵莫く禹域四百州將に大和民族の掌中に落ちんとする今年の紀元嘉節ばかり祝ひてもなほ祝ふ可きものあらむや。紀元節萬歳。帝國萬歳。

岡村先生の萬福を祝す

岡村教授先に大學院を卒業せられ、今度理學博士とはなり給へり、嗚呼萬福なる哉先生、而して先生近頃伉儷の大禮を擧げらると、嗚呼萬福なる哉先生、先生の得意想見すべく、下風に立つ吾人亦欣喜に堪へざるものあり、こゝに一辭を呈して先生の、萬福又萬福を祝す

磯田中尉を祝す

先に第七聯隊の補充大隊付となりて、職を我校に辭したる磯田少尉は、頃日一躍して中尉に昇等せられたり、吾人杯を擧げてこゝに先生を祝す、然れども先生が爲めに斗酒を傾げんとするものは、僅かに此

事而已に非して、燕京陥落の其日にある也

在韓西村君の消息

三冬の鐵樹花は滿林に綴り、幾點の殘星雁は北天に飛ふ時しも、獨り樓に倚りて遙かに征人を思へば、無量の感慨は滿腔に溢る、計りなるべし、噫西村君が孤劍に杖て韓地に入りしより、雜報子に當て、二三回の親書は來れり、書中に云へるあり、君は近頃しきりに天佑俠の首領、吉倉某氏と往復せりと、思ふに經營する者豈に破天動地の宏圖に非ずや、今こゝに轉載するところは僅かに箇中の一端、釜山近傍の風俗言語等也

朝鮮の婦人

今回は婦人の事を及御報道候先づ當居留地に在りて最氣の付くは朝鮮婦人の入り來らざる事に候街市には邦人の往來絶はざるのみならず白衣の韓人も商人稼人等續々入り來り候へ共其婦人は間々二人を見る外は全く見受不申候これは舊藩の頃對州宗家の巨屬が當地に和館なるものを設けて通商致候節何や面白からざる事ありて此歴史上の原因より總して韓婦が日本人を厭ひ恐るゝに至りし由に御座候へ共凡て他人と交際せざる事は朝鮮婦人の習ひにてあながち日本人

にも限らざる様子に候上流社會に至りては特に此弊風甚しく貴族の夫人などは常に家中に蟄居して其良人に侍する外は一家の親族にも己れの朋友にも決して顔をあらはさず之を西洋諸國にて男子よりも一層實際場裏に勢力ある婦人に比すれば實に不幸の極にあるものさいふべく古來の習慣は云ひながら誠に憐むべきものに御座候第一各國の歴史上に徴しても社會政治道德の諸變遷が婦人に貢ふ所多きは争ふべからざるものなれば此國の開化進歩を促す上に就きても婦人屏居の風を矯正すること一手段と可申候當居留地の邦人も大に之に注意し昨年銀婚式の大典ありし日非常の盡力を以て老若の韓婦を居留地内に誘ひ入れ各店頭にて或は物を興へ或は肴を饗應し力めて悪意なきとを示したりければ爾來漸く一二の勞働者に限り居留地の出入する事と相成候由然るに現任領事は又頗る此事に熱心し朝鮮の官吏等に會ふ度毎に種々利害を説きて婦人を實際社會に出さしむる事を勸誘致し居る趣なれば遠くらずして上流の婦人を見得るに參事と在候現に過日は某所の府使が妓生を携へて當地に來りし事も有之又一月三十日には釜山の鹽理秦尙彦は其夫人を伴ひて吾領事を訪ひ候居留民は皆之を日韓交通以來未曾有の珍事なりと稱し居候宛に角喜ぶべき事に御座候

次は婚姻の事なりまづ正則の婚儀といふは初めに媒介者ありてこれか兩家に縁談を申入れ双方さまに異議なきときは時日を卜す此時日に其注意する由に候さて其日に至れば媒介人及己れの親戚さまもに嫁の家に向き坐定まれば嫁方の親戚木を彫りて作れる雁を出す(雁は如何なる由來あるかわかり不申)密恭しく此雁を拜し嫁また出てて雁を拜しそれより酒宴となる由に候等は其夜より三夜つめて

よりは優るこの評に御座候注意して韓人の衣服を見るに縫目など如何にも整正なる様に覺候候か、る次第なれば金澤邊に盛に行はる、ハンカチーフ縫などを内地にて始めなれば極めて好都合ならんぞ存候凡て此國の實業(何事にもなれど)を盛ならしむるは邦人の務なり貿易を盛ならしむるにつきても内地人民に貨物の道を與ふる事が此國に在りては第一の急務に御座候併し貿易の事は又追て可申上候先は不取致右迄申上候追々韓人立談し得るに至れば面白き事も聞き出し御報知可致候(共今日の處にては先づ是だけの外觀察難致候

雜况

一月廿六日は韓曆の正月元日なりき平日ならば居留地の市中を來往すると日本人よりも多き韓人か此日は新春祝賀の爲二三の稼人の外は出て來らざりき韓家にも正月の儀式は大抵日本と同一しく屠蘇雜煮等其似たるものあり先づ賀客の至るあれば八角形の朝鮮膳に載せて出す献立は概れ左の如しとぞ

一餅湯 即我國の雜煮なり汁の中には切餅燒餅及牛肉を入れサパリと稱する眞輪製の大椀に盛る是は客の好みにより幾椀にてもおっはりなすを得

二太菜 酢のものとても云ふへきものなりモヤシと新ワカメとに酢をかけたもの

三雜菜 モヤシと岩茸とカラシ合ひにしたるもの

四熟肉 牛肉豚肉及を煮たるもの及鳥肉に衣かけたる天賦羅的のものなり之に鶏卵のユアたるものを添ゆ

五乾柿 乾したる柿を胡麻と餛さにて堅めたるもの恰も我國の岩樛

此家に泊り四日目に嫁を伴ひて家に歸る歸れば新婚の祝として村民は一同かはるゝ其翌日より詰めかけ數日間宴を開かざるを得ざる由なれば中等以上の家にも此慶事の爲めに産を失ひ終には新夫婦が出て、路頭に食を乞ふに至るもの少からずと申す事に候故に十中八九は公然と婚姻をなさず特に下等社會は勿論にて唯双方の親と親と私かに協議して之を定め他人にも本人にも之を知らしめず其日に至りて急に嫁を迎へ入るゝ由若し新夫婦よく和睦せされば幾日にても兩人を暗黒なる一室に禁錮し置くの事に御座候亦奇風といふべし衣服は上流社會の風を知らざれど下等の勞働者は皆男子と同一しく上は筒袖襦袢下は例のだんぶくるを穿ち此外へ腰袴然たるものを纏ひ居候其襦袢は短くして乳に達せず寒氣強き冬日にても乳房は風にさらして平氣に歩み居候習慣なれば毫も寒からざる様子なり衣服の地は例の白金巾白木綿にて間々頭巾の様なものを頭部頸部に被ひ居るものあり先日内地へ行きし折婚姻に近き其家の愛嬢といふものを見たるに我邦中古時代に流行せるかづき其儘のものを頭部より蔽ひ居候數丁を隔つるに日本人と見てか遙に他道へ避けしに付服装等は見るを得ざりき死に角今のまゝの習慣にては婦人の風俗等を觀察するは頗る難事に候幼き女兒の服は頗る西洋風に類せり

婦人が荷物を運ぶには聞きし如く皆之を頭上に戴く鹽水桶徳利の如きものまで皆之を頭上に置き相談笑して歩むさま信に巧なるものに御座候それも尤もなる事にて七八歳の頃より既に之に慣れ鞋煙草等錢など幾品も頭上に載せて歩み居るもの有之候下等社會にては夫が婦に喰はして貰ふもの多しといふ程なれば概して婦人はよく勤勞し特に手仕事に巧にて裁縫などは却て日本の婦人

の如し

六沈菜 香の物さやいばましニラ、ニンニク唐辛を混したる菜漬なり
六藥酒 即屠蘇なり味淡泊にして甘味あり原料は燒酎ならん
八清醬 膳の中央にあり醬油にして客が勝手に前記の食物にかけて食ふ

但しこれは中人の家の献立なり上下等も大抵之に似たりといふ男兒の風を揚ぐるとも我國と同一風は長方形にして中央に圓形の孔隙あり爲に風を通するを以て極めて細き糸にても上げ得べし

女兒の正月遊ば甚珍し長き四尺幅一尺計の板を地上に置き其中央の處より兩端に向ひ漸次地を廻り下げ置き二人の女兒各其一端に乗り互に上下すると恰も往年我校のオッサン達が爲し居りし如くす而して其珍らしきは上る方の者は高く板を離れて三四尺も飛上るなり其技非常に巧なり尤もこれは三ヶ日に限る遊なるが如し其女兒は皆美装して顔にはオシロイを塗り額及兩頬に錢大の紅を塗る此紅を塗る風俗は我邦にありやしや概していへば兒童は可愛らしき顔のもの多し男子は莊麗温雅なる顔のもの多し女子には見られた顔のものは居らず凡て種痘の行はれざる國なれば十八中七人までは痘痕斑々たり

博奕は隨分盛なり見ゆ子供なごの途中にて之に類する遊をなすもの多し中人以上の者にては腰には烟草と箸及ナイフ及賭博具の三中着を帯ふるを常とす

釜山近傍魚鳥多けれども野菜なし大根蕪等皆日本内地より輸入す鳥には鶴雁鴨雞等日々韓人が賣り歩くもの幾十人あり「カモカースカ」

「チユルガースカ」の壁斷へす近傍の山に竹木なきも亦聞きし如し共
同墓地の花筒にビールの明き罐を代用せるを見ても知るべし

奉吊故大將宮之薨去

大勳位功二級大將宮薨去あらせらる、皇室の懿親、邦家の元勳今や其の一位を空ふす、嗟乎悲哉。昨

王師醜虜を征して懸軍深く不毛の地に入り皇威烈々遠く八紘を壓し、北京城下の盟日を期して待つ可し是我

皇の威靈然らしむるところと確實に故大將宮が其帷幄に在りて百戰百勝の籌策を回らし給へるの功多きに居る、然るに今や軍旅未功を峻へず畫策また半にして茲に此悲む可き訃音に接す嗟乎悲哉。

噫故湯川義一君

愁人は愁人に向て且らく説くと勿れ、愁話聲斷て人を愁殺すと、我れは涙を揮つて涙ある諸君に告ぐ、回顧すれば恨何そ己まんや、有爲青年斗大の宏圖を、胸中に疊みしもの、一朝溘然として逝てまた還らず、魂は飛て九天に歸り魄は沈んで九泉に適く、今は之を敲けども答へず、問へども黙する寒骨一片、先の經營せし宏圖偉業も果何處にか行はん、空しく烟と消へて一場の架空の夢とはなりにけり、噫我校の特待生湯川義一君の、月黒く颯樹下に泣くの時、獨り机に倚りて生來の蒲質を懐き、慨然劍に伏せしより月日流水の如く、吾人が泣て一代の遺憾を説きし日は、已に去て一年の昔とはなりぬ、今や一週忌に際して同氏の父君より、敢て一書を島彌太郎君に寄せらる、よりにて之を寫して諸君に頒つ、若し多血多涙の名をして諸君に空しきものなからしめは、此來狀を讀て噫、何の感か胸裡に蟬集する者ぞ

拜啓時下春寒奇峭之候各位益御清健敬賀此事に候陳は昨年愚息義一死亡の際に格別なる御芳情を蒙むり且種々の御恩賜に預り候段不堪鳴謝候今や一週忌辰に際し今昔の感に堪へず乍零儀以寸紙茲に御厚情を奉陳謝候頓首

故湯川義一父

湯川 温之

島 彌太郎様

御 輩

噫當時人情の薄きと紙の如く、去るものは問はず行くものは顧みずと雖も朝に道を聴き、夕に徳を行ふ諸君に於ては、焉そ彼の醜覆雲雨となる者を學はんや、愁人今愁人に向て語る、熱腸九迴して故人を思ふと切なり

法 二 會

名の如く法二年諸君によつて組織せらる、其目的は辯論練磨にありとすれば、吾人素より之を喜ぶ、あ

孤韻風の如くに邁き、逸氣煙の如く翔る諸君に於て、更にこの熱心なる練磨を加ふる者あらは、誰かまた他日東洋のデモスセテス、シゼロの如き雄辯家を、法二會中より輩出するを疑はんや

文科二年茶話會

昨臘初めて之を組織し、月に一次公苑覽勝亭上に開く、素より山僧の活計に非ざれども、僅かに茶三服を啜て咽を濕し、口を開て百里虹をは綴るとかや、他日天下文壇の上に立ち、綠雲を把て而して彩鳳を爲すへき者、請ふこれを諸君の間に出世、囑望敢て十五君に對す

武藝大會記事

萬里の長城恃むに足らざるなり、渤海の鎖鑰亦頼るに足らざるなり、苟も皇軍の向ふ所、旭旗の翻る所、天下何物か強といひ堅といふ、昨夏旆を載せて鉞を乗りしより、一度躍ては牙山平壤を陥れ、二度躍ては九連鳳凰を碎き、三度躍ては旅順威海を抜き、直

ちに長驅して燕京を圍まんとす、快報幾度か飛んで國民狂喜せざるはなし、思ふに陣雲西角に黒く、羶氣凜然として人骨に位するの時、片碎月の昔を忍ひ、磨礮の霜刀を揮て斗牛を劈き、絶叫して西天を睨するものは誰ぞ、尾山城畔宏堂の裡、慷慨筆に杖く幾百の青衫は、未だ班鬢の以て撫するなからんも、焉んそ鞞肉の敢て拊くに足るものなしとせんや、胡爲れそ今に當て徒らに面壁九年を學はん、而も寒稽古終りを告げて、勃々たる士氣到底禁すへからざるものあり、我校乃ちこゝに武藝大會を設けて、廣く招待状を市内の官衙、學校及諸劍客に發す、時はこれ二月の十日、紀元嘉節の前日なり、午前を以て柔術の試合、午後を以て劍術の試合と定む

○柔道試合 (午前十時より)

當日舉行せられたる柔道試合に於て役員及各番の取組及勝負は左の如し

判定者 柿田 信行

判定者	全	近藤他家雄
第一組	○	桑田初五郎
第二組	○	小藤孝徳
第三組	○	吉田哲次郎
第四組	○	赤澤欽次郎
第五組	○	今井三郎
第六組	○	杉本重太郎
第七組	○	林取達三郎
第八組	○	鹿野達三郎
第九組	○	草野重繁
第十組	○	中屋新一郎
第十一組	○	久保田政五郎
第十二組	○	浦部政二郎
第十三組	○	阿部他家雄
第十四組	○	高梨正徳
第十五組	○	大岡正徳
第十六組	○	永岡正徳
第十七組	○	阿部信行
第十八組	○	澤田堅太郎
第十九組	○	赤澤欽次郎
第二十組	○	吉田哲次郎
第二十一組	○	山中重吉
第二十二組	○	山口重吉
第二十三組	○	近藤常吉
第二十四組	○	高梨常吉
第二十五組	○	平澤象次郎

(○は勝印、×は負印)

組	引分	大石常雄	北島晴輔	大江正圭	江島橋一	大石雄輔	徳岡精彦	吉田豊治	紅林治彦	亂捕	吉田弟彦	近藤他家雄
第拾五組	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第拾六組	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第拾七組	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第拾八組	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第十九組	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

當日特別賞を授與せられたるは吉田弟彦近藤他家雄紅林豊治の三氏にして一等賞は高梨尙一氏他組の勝者は二等賞を其掌中に握りたり

雑報子も此道に盲にして、益大の眼あれども僅かに其勝負を見るに足る而已、兎様の耳朶あれども漸やく判定者の言を辨するに足るのみ、其技の巧拙に至てはまた知るよしなれば、焉んそ漫評を加へて人を誣ゆるとをなさんや、唯當日の判定者某氏に就て概評を仰き、之を文字に綴りて左に掲ぐるもの也、然れども往々にして人の恨を受くる如きあらは、瘦たりと雖、双肩悉く之を荷ふを辭せず
最初幾番の取組の如きは、殆んど巧拙を論するに足

さる也、されども先これを言へば、杉本氏はなか／＼敏捷に立廻られたるも、如何なる都合にや敗を取られしは残念なり、林鹿取兩氏は腕力の爲めに、却て技に於て損するところ少なからず、向後注意ありて可なり

草野中屋兩氏は共に校中錚々の腕力家なれば、試合も壯快にして、不覺腕を撫して快絶を叫はしめしも、若夫柔道的眼光を以て之を評すれば、少しく取らざるところあり、即ち技よりは寧ろ腕力の組打に近ければ也

深澤氏と久保田氏の取組に於て、技を以て論すれば久保田氏の方遙かに卓越せしとは云へ、深澤氏は偏強の骨柄、氣を以て昂り、宛然猛虎の暴れたるが如き勢を以て、足拂と大外蒞にて刹那裡敵を抛ちたるは、一大喝采を博したり、其日の手際の如きは、日頃の深澤氏に比すれば、殆んど別人なりといふも可なる也

浦阿部兩氏の試合は静沈と評すへきか、抑亦活氣なしといふへきか、十餘分時を出て、一本勝負に止まらじもの、隙の以て乗するものなかりしは非ず、寧ろ痛言すれば已を守るに汲々たりし也、然れども浦氏の短軀瘦身にして横捨身を、奇麗に一本仕止たるは上出来とやいふへき

次は近藤高梨兩氏の亂捕なり、近藤氏は形態魁偉、高梨氏は風姿洒瀟、相對照して却て一倍の見はへありき、其合ふや其離るゝや、宛然溶々たる月前に梨花の醜るか如く、淡々たる風裡に抑絮の舞ふに似たり、人をして掌を拍つて妙を叫はしむるもの、抑亦偶然に非ざる也

大島永岡兩氏は共に健骨の壯士にして、其技の如きも大に趣を前者と異にせり、仰てこれを見れば猛虎風を呼て相戦ふか如く、俯してこれを見れば、驪龍雲を起して互に争ふが如し、活氣天を衝て快や人の膝を打たしむ、喝采四に迸つて輿轉た盡きさるも、

時に限りありて次の試合に遷れり

阿部澤田兩氏は奇麗に取組まれしも、尙幾分の注意を寄すへきものあり、阿部氏に於ては腕力を慎まざるべからず、澤田氏にありては身を守るに一段の用心を要す

吼るが如く、怒鳴るが如く、潑刺々地、狂ふて跳るものを中村山口兩氏の試合となす、かくの如き愉快なる取組は、十幾番中殆ど見さるところ也、我れは快男兒を愛すれば敢て一言を寄せさる可からず、若し兩氏にして其技を、一層進ましめんと願は、且らく、其腕力を控へざる可からず

次は近藤常隈川兩氏の取組なり、容貌雄偉にして、恐ろしき迄の大入道也、一見すれば力こなしに誇る連中の觀あれども、流石此道に達せし丈ありて、試合に當て敢て其力を顯はさず、技を以て角するもの感するに堪たり、第一本は横掛を以て勝は隈川氏に歸し、二本三本は浮落腰投を以て、並に勝を近藤氏に

制せらる、技を以て比すれば近藤氏の方稍達せるなるへし、而も隈川氏亦深く他流を學ひし丈ありて、自から貫目備はり、躰のこなし中々熟練せり

高梨平澤の兩氏は互に禮し終りて、優然として腕を交へたり、交へたる其刹那、大外落の手はかゝりぬ、どうと言して疊上に抛れし者は誰ぞ、平澤氏は第一本の負を取りて心に穩かならず、猛威満身を呵して高梨氏へ衝きかゝりぬ、其刹那また疊を蹴つて倒れし者は誰ぞ、足拂は見事敵の隙に乗せし也、またまた足拂はこの暴進せる敵にかけられぬ、三分を出てすして、全局の大勝は高梨氏の掌に落ち、喝采四に起りて、暫時は鳴りも止まさりけり

次には此道に老功の名ある、大石北島兩氏の取組なれば、勝負如何と片唾を呑んで、無聲堂裡に萬籟悉く止みたり、北島氏は大外落を以て、大石氏を以てちて第一本の勝を制せしも、流石は此道の雄將也、毫も喋げる氣色なく、勝ち誇りたる敵の隙に乘し、

大外落を以て敵を倒し、これより互角の勢を以て、二十餘分間計りも様み合組み合へども、雙方寸分の隙なければ、勝負なくして止みぬ、素より兩氏とも此部の名手なれば、別段評すへき點もなければ、強てこれを求むれば、北島氏は今少しく敏捷に立廻られたく、大石氏は左膝の車を掛くるとき、常に敵をして、左の手を自由にしむる爲めに、勝勢九分に達して往々蹉跎するを免れず

さても其次の取組こそ若手の勇士江間大島兩氏の試合なりけり、兩氏ともに血氣盛の人々なれば、勝敗をは一舉に定めんと、いとも華手にいとも快手に取組れたり、即ち第一本の勝は大外落を以て江間氏に歸し、第二本は浮腰を以て大島氏に第三本は矢張り大外落を以て、畢竟の勝利は江間氏の擅にする所となる、然れども技を以て之を比すれば、大島氏は稍江間氏に超ゆるが如く、而も浮腰は氏の特意の手にして、一喝腰をひねりて敵を宙より投付けし手際は、

大に衆觀を牽きたり、されど江間氏は非常の注意を以て、跳躍相角するの間に於ても、些の乗すべき際に爲さざりしは、流石とや評すべき

最後の勝負として顯はれしは大石氏に徳岡氏也、技を以てすれば實にこれ好敵手たるへしと雖、もと徳岡氏は蒲質虚弱にして外見なか／＼大石氏の健骨に比すべくも非ず、遂に大外落と腰投を以て大石氏に譲りしも、最後の押込を以て一本を取止めしが如きは、中々の苦心と思はれたり、此試合に於ける大石氏の手際は如何にも敏捷に如何にも雄壯に、直ちに迫つて敵の隙に乗するもの、これを前回の取組に比すれば尙一層の技量を示せり

次に吉田紅林兩氏の亂捕は、双方とも此部抜群の評丈ありて、流石に人目を眩ましむる計也、而も其殊更に奇技をのみ擇ひしは、觀客を勞せしめじとの注意到れりと云ふ可し、就中紅林氏の小兵にして、敏捷に立廻られたるは中々に見事なりき

待つ、嗟是一代の快事抑亦千載の大快事に非ずや。我校曩に旅順占領を祝賀し、一太白を擧げし事を思はゞ、這般の大快事須く三太白を擧げて大に祝す可きなり、茲に我校大學豫科二年生一同發起者となり醫學部に交渉し職員諸氏の賛助を得、以て全校一致大捷祝賀の筵を開く。時は是れ二月十六日午後夜來の雨霏征衣の寒きを懷はしむるの時、場は是れ本市横安江町本願寺東別院百四十餘疊の廣敷、定刻二時に及びては、斯の雨霏を犯して來集せる全校の健兒三百四十に餘り、斯の廣敷も爲に立錐の地なきに至る。劈頭第一發起者總代中大路正雄氏開會の主意を述べ、先づ來賓諸氏來會諸氏に向て感謝の意を致し轉じて皇師連戰連捷前に敵なきの狀を叙述し、雙手を振て憤慨數番するの處、滿堂の聽者をして快哉の聲を絶たしめず、終に曰く

斯快事以て千載の痛恨を慰するに足る、愉々快々何ぞ禁せん、想ふに國家の光榮は即吾人國民の光

最後の講道館投の形は、近藤吉田兩氏によつて行はれたれば、改めて千萬言を費して之を讚するなきも、己に諸君の知るところなればこゝに畧せん

(紙面の都合により劍術試合は次號に譲る)

大捷祝賀會

東洋の天角戰雲一度九州の野を捲き、日東の壯士霜刀を翳して氣斗午を貫く、千歳痛快焉ぞ禁せんや、顧みれば昨夏皇軍牙山を抜きしより日子經流する者僅に二十餘旬、連戰連捷の快報荐に到り國民大白を擧げし者亦一再に非ず、然れども牙山平壤の陥落は未だ彼をして寒心せしむるに足らざりし也、九連鳳凰の粉碎は未彼をして失神せしむるに足らざりし也、旅順已に守を失して彼が未全く干戈を抛擲し降を軍門に容るゝ事なかりし者、豈威海衛の天塹僅に以て命脈を繋ぐに足るが故に非ずや、昨の飛報果して何ぞ。鐵鎚一撃威海の天險陥り、北洋の堅艦を殲して海に沈み、丁提督殲餘の艦隊を以て命を軍門に

榮たり、斯の國家の光榮と國民の光榮とを此盛大無比の祝筵に於て祝賀する事を得るは吾曹發起の満足に堪えざる所、發起者死すとも猶且恨むる所なし。

大喝采と大笑聲とは此辨士の下壇を送り、次で登壇する中川忠順氏を迎へたり、氏は滿場の靜肅を請ふの後發起者總代として左の祝辭を朗讀せり。

曩に旅順陥り今又威海守らず北洋の水師精銳を悉して海に沈み提督汝昌白旗を樹て、命を軍門に待つ渤海の關門また既に彼の有にあらざ天津北京指顧の間に在り我が王師の向ふところ旭旗のさすところ金城湯池も鐵艦艦艦も恰も秋風落葉の如きのみ

振古以來國朝外難を構ふること數次而れども未だ曾て此偉大なる功勳を見ざる也咄嗟域九州それ何の顔かある嗟乎これ我皇祖皇宗の遺烈と今上陛下の稜威とによらずして何ぞや生等生れて此盛運隆

時に際會し日に文筆を挾んで蟹に上り座りて提聞に接し笑ふて戰記を談す稍烟天を燭くの恐れなく砲聲耳を掠むるの危きなし何んや山河絶塞指を墜し足を爛らし水飯を嚙んで露營に宿するの慘あらんや自は幸に兵革の役に免るゝと雖も同胞骨肉の奮戰激闘具に艱難苦楚を嘗むるを思へば感激痛切涙爲に下る

然りと雖も之を思ふと深く且切なれば善きに惡に感ずると甚しきは人の至情より今や海外の同胞空前の大捷をえたり是れわに吾人の大慶大祝すべき事ならずや唯之れを悲むの意を推て之を祝し之を痛むの情を存して之を喜はし祝慶絶快の裡必ずや一點の赤誠人天を欺かざるものあらむ
諸君遠征諸士の同胞願くば此意を轉して大白を浮べんか相饗以て饜くに足らざるも請ふ諸れ甘んずるの同胞を忍べよ

兩陛下萬歲、陸海軍萬歲

所全勝ならざるなし、當時意恨涙を吞で九泉に逝きし南洲翁も、今日は地下に眼を開きて喜ばむ。閑話休題いざ高安醫學部主事に代て祝詞を朗讀すべしとて之を朗讀し、始終愛敬を傾けて聽者をして興に入らしめしもの寧よろこぶべし。

次に堀内秀太郎氏大學豫科生總代として祝詞を朗讀す。

恭しく惟ふに皇師一たび發してより海に陸に連りに奇捷を奏し皇威日に四表に光被す曩には即ち旅順の要港を陥れ彼の肝膽を寒からしめ而して今は亦威海衛の要鎮を抜き彼艦隊を殲滅す兩港陥りて渤海灣の鎖鑰既に解け北洋水師滅びて海上の全權全く我手裡に歸す其天津を衝き北京を陥る亦將に期月の間に在らんとす是れ實に我敵聖文武なる天皇陛下の御稜威と我軍將士の忠勇に據らざるべからず吾人草莽の微臣戰捷の報を得て深く慶祝の意を表すると共に上は陛下の軍事に聖慮を煩は

次に拍手喝采の裡に登壇せられたるは大島校長なり、先づ此祝筵に臨む事を得たるを快なりと述べ、徒に祝辭を述べむよりは此祝筵の所由たる征清軍戰捷の經由を略述するの有益なるに如かじとて、一月二十五日午後より二月十四日丁提督降服許容に至るまでの事績を細叙し、其間戰死者の事に及べるは此等名譽ある戰死者の忠勇義烈なる奮戰が皇軍大捷に與て大に力ありし者、今其戰死者の光輝を發揚する所以の者は即戰死者に對する大義務なりと信ずれば也、とて降壇せられたり、徹頭徹尾有益なる演述にして深く聽者を感じたるもの、如し。次に田中教授開口一番人をして頤を解かしむるの後、

今日は是れ二月十六日、二月十六日は是れ往年征韓論主論者西郷南洲が薩南の野に下て大兵を麾きし日なり、當時上下一致を欠き西土の侮謾に屈辱したる恨むべし、さはれ海底に眠れる鯨鯢は大憤一度發すれば方に四海を呑むの概あり、皇師向ふ

さるゝを思ひ奉り下は將士の功勞を謝せずんはあらざるなり

旅順口威海衛是れ何等の所ぞや北洋水師是れ何等の艦隊ぞや思に昔し英佛の聯合艦隊長駛直ちに太古を陥れ北京城下の盟約を爲さしめし爾來致々として力を防備に極盡し幾億の國帑を糜し幾十年の歲月を費やし宇内の良砲と宇内の精器とを集めて大成せしものは是れ實に旅順威海に非すや而して今則ち如何ん定鎮の二大甲鐵艦新に獨國より來るや艦隊を編みて我邊海に示威運動を行ひ崎陽の水兵暴行事件を惹起せしは是れ實に北洋水師に非すや而して今則ち如何再回の示威運動艦隊を東京灣内に浮べ紅葉館裡盛宴を張り意氣軒昂氣已に東亞を吞めりし丁汝昌今果して何の消息をか齎らす白旗を艦頭に懸へし身を以て降を乞ふと憫殺せざらんと欲するを得べけんや

今や我軍北には已に奉天に逼り南は即ち山東を經

零す愛親覺羅氏の社稷炭々乎として夫れ危ひ哉思ふに全局の捷を收むる掌を反すよりも易きのみ誠に祝すべきの至りといふべし

然りと雖も我帝國の任務は大なり我國民は義侠の民なり吾人豈に半ば頽敗せる滿清を降して止むべけんや須らく正に大に勢力を蘊蓄し世界の雄邦として文質彬彬神州國民の眞面目を發揮すべし

威海衛新に陥り我校學生協同一大祝捷宴會を開く茲に本部生徒一同に代り聊か思ふ所を述べ以て祝辭となす

次に又醫學部生徒總代澤田氏出で、「未曾て祝詞を作り且朗讀せざる予の如き者の躍て此壇に上りしもの唯帝國々運の光焰萬丈なるに驚喜して然る也」との冒頭を以て一篇の祝詞を朗讀せり、氏の音調の不規則にして不覺聽者の一笑了贖ひしもの、偶々以て氏の木訥可愛を證するに足る。次に時習寮生總代佐藤信安氏祝辭を讀み、「時習寮生一同滿腔の熱情を濺ぎ

其第一種は白布片に藥汁を塗抹して千變萬化の畫紋を顯すもの、第二種は繪畫中の砲壘若くは敵艦に火を通じて爆烈するの狀を示すもの、共に諸氏の經營慘憺に成りしもの、而も充分其効果を顯はすとを得ざりしは諸氏も吾曹も共に遺憾とする所なり、然りと雖も又幾分の觀者を娛ましめしものなきに非ず、且や此種の演技は學生間の演技として甚觀るに足る可きものにして、諸氏が計畫のこゝに出でしは大に吾曹の意を得たり。之に續て一落語家の一落語ありしが、稍猥雜にして殆聴くに堪えざる語ありしは厭ふべし。更に二番の狂言あり、「居くひ」墨ぬり」にして殊に後者は可笑しく、墨塗られたる三人が「やるまいぞやるまいぞ」を以て退場したる後、更めて圓陣を作りて着席し、酒杯を手にして一齊に起立し、校長の唱に應じ、謹で

天皇陛下萬歳を齊唱し奉りて座に復し、折詰を開き樽酒を傾けて獻酬漸盛なり、此裡に在て彼落語家又

て以て茲に祝意を表す」となせり。次には森山守次氏起て祝辭を讀み「日青くして魍魎波間に顯れ、山高くして猛虎峻巖に嘯く」的の口調を以て讀み去り讀み來て滿坐の傾聽を促し、中村孝氏次で出で、「號外號外又號外」と説き起し人をして一驚を興せしめ、「若夫酒あり肴なきに至らば希くは李爺の白髮頭を斬て之に代へむのみ」と絶叫して大笑を贖ひ得たり。最後に境長三郎氏自ら「馬鹿物」と名告て出で、「己に我膨脹的大日本を建設する者あり、亦之を守る者なくんばならず、而其守成の任は諸氏の雙肩に在り」と結論せり、氏遂に鹿馬者ならざりしなり。

長く續ける祝詞演説は今や漸く滿坐の客をして飽かしめたり、乃ち殘れる祝詞演説は割愛して之を中止し、餘興に移りて狂言を觀る、狂言師は大桑十左衛門、中村藤造、小野貢次の三名也第一番は「よろひ」なりき、妙は即妙なりと雖惜むらくは編輯子之を評するの識なし。次に二部二年生諸氏の理化學的演技、

一席の落語を試みたれども、既に視聽に飽き今や漸く味覺を満足せしめんとする坐客は、傾聽を興ふる事なくして冷評の裡に下壇せしめたり。忽見る壯士劍を翳し吟士詩を吟ずるを、舞士は是れ平井澄氏、吟士は是れ佐治修三氏、千山萬岳の烟を踏破し去れば、次で森山守次氏は光芒電閃夏猶寒き日本刀を振ひ、大石秋澤隈川稻垣大島中屋島崎諸氏交々起て舞ひ坐して吟ず、共に是れ我校有數の劍客、各得意の手腕を振ふもの、滿坐をしてチェストの聲を絶たしめざる亦ゆゑなきに非るなり。此次に時習寮生寄附の茶番狂言ありと稱す、滿坐注目此一點にあり、既に見る假面附鬚いかめしく金紙燦爛大禮服を着けたる一群が一疊大の日章旗を押立て、出るあるを、喝采又喝采に迎へられて豚狐之黥鷲と名くる狂言は始め、次で紐付提燈を頭に被り裏に羽織を着けたる豚尾漢的扮装の一群顯れ來る、太郎冠者乞和使の對面よろしく談判を始むる事ありて資格を四角の諧謔

に人をして抱腹せしめ遂に豚尾の紐を曳かれ狼狽を極めて逃竄するを「やるまいぞやるまいぞ」にて追行くに終る、喝采喝采又喝采之を當日最後の歡呼とす、猶此後に時習寮寄附の福引ある筈なりしに、茶番終れるの後大衆も千鳥足やるまいぞやるまいぞにて散會せんとするの勢あり、大厦の將さに仆れんとする一木の能く支ふ可きに非ず、遺憾ながら福引を引き得ずして散會す。時に午後八時、微雪醉顔を掠めて神氣轉清涼を覺えたり。斯の如くにして大捷祝賀會は無前の隆盛と平和とを以て開會せられ散會せられぬ。

時習寮近況 (寮生某投)

校舎の後側に連り四五の老杉枝を翳すの處、一字木造建築の聳つを見る、是我校の寄宿舎時習寮に非ずや、是寢寤を共にし勉暱と嬉遊とを共にせる七十の健兒が最愛なる第二の家庭に非ずや、年々歳々這裏多少の消長を免るゝ能はずと雖、しかも歳々々々其

大なるを見る也、希くは其當に警む可きものは退て之を戒め其當に採る可きものは進て之を採れ、至囑々々。因記、紀元佳節の夕、祝捷を兼て茶話會を開き、今井教授の地方的感情を排す可しとの演説を聞き、利益と快樂とを併せ得たり。

學友會雜誌刊を廢してより茲に六閱月、今や北辰會成立し、乃ち其雜誌を發刊す、既往を一顧して豈能く感なからんや、則ち六月より舊臘に至る間、其梗概の記事を載せ欄尾に附して、以て其欠を補ふ

志賀農科大學講師の演説

六月十四日、農科大學講師志賀泰山氏來校せられ、生徒控所(今の倫理講堂)に於て、林學に關する一場の演説を試みらる、縷々數千言、午前八時より九時廿分に至る、余輩斯學に於ては門外漢なるも、啓發する所甚だ多し、林學の要、誠に氏の言の如し、庶幾くは將來後進の輩出するありて、氏の希望を充たす

好ホームたるに於ては異なる事なし。今年一月中の調査に據れば、在寮生徒七十名の内其年級別は十八に及び其地方は三府二十四縣に亘れるを知る、隨て其氣風に至ても亦特殊なるものなきに非ず、磊落跌宕なるもの朴訥瀟灑なるもの、勇健なるもの、文雅なるもの、皆集て一堂の裡にあり。しかもしかく形態と性狀とを異にせる異分子は、他の得て推測す可らざる底の糾合力を以て相結着し、一堂の裏嚴肅犯す可からず、和樂掬す可きの好ホームを組成せり、而特殊なる氣風は漸次混淆せられ攪搬せられ陶冶せられ、而稍純一とならんとするの傾向生じたり。斯の如くにして進まんか、堂々たる校風の修養も得て望む可く、我寮の目的も茲に始て達するを得可し、現に毎月一回乃至二回開會する所の茶話會も漸く此方向に就て進むものあるが如し、或は此間多少の弊害なきを保せずと雖、要するに我寮の前途は大に祝す可きものあるを見る也、同時に寮生の負ふ所も亦甚

を得んか、左は我會員某君が氏の演説を筆記せられたるものなり、文長きに涉ると雖も、言頗る有益なれば、茲に掲げて諸君の参考に資す、

巡回の途中昨日本校に立寄りたるに、校長より學生に何か有益なる講談をなすべきを請はれたれば、余の専門なる森林學の事に就き少しく諸君に述る所あらん(以下要點を録す)

○森林の利益 家屋、器材、船車、薪炭皆是れ森林の供給する所に非るはなし、試に統計表を見るに、一人が一ヶ年の間の生活に要する木材は、ニシヤクジムなり(ニシヤクジムは一立方メートルの三分二)我國四千萬人、一年に八千萬シヤクジムの木材あるにあらざれば生活するに能はず、此木材皆是れ森林より出るもの、是れ森林の直接の利益なり、更に間接の利益を見れば、氣候を和らげ、水利を適度にし、空氣を清潔にし、風致をよくする等、擧げて數ふべからず、然るに世人の此利益ある森林に注意を與ふる者の少きは惜むべし、今試に一町歩の地に樹木を植付けて、之を森林とせば、數十年の後に、毎年十餘圓の利を得るに至る、而して此利益は純粹の利益にして、彼の穀物を植付くるも、其耕作收穫の勞力、保護、管理費等を差引けば、純利は皆無なるに比して、勝るべき數等なり、

○日本國は森林國なり 人は皆日本は農業國なりと言へど、余は森林國なりと言はんぞ、見よ全國の七分の四は森林、七分の二は原野(森林と大差なきもの)七分の一は耕地なり、而して其森林

には主要の木材二百四十種あり、西洋諸國の僅々三十種に過ぎざるものと比して如何ぞや、而して我國は南より北に走れる細島にして、植物の種類甚だ多く、且つ全島殆んど山なり、是最森林を以て立國の基をなすに適す、自國の米を外國に輸出して南京米を食する如き今日の狀態にして、何ぞ農業國たるを望むを得ん、

○近年漸く人の注意を惹けり、世人も漸く近來森林に意を注ぐに至り、農商務省にても大に森林の忽にすべからざるを知りしも、如何せん森林の事に精しき人物に乏しきを以て、明治十五年より農林學校を設け、盛に人物養成に従事し、今は該校を農科大學に合併したり、而して其卒業生は今に至るまで殆百名を出せり、雖も、全國の需要四百餘名を供給するに能はざれば、止むを得ず、今は農科大學に乙科といふものを設け、學科を簡易にして、其卒業生を以て目下の急を防ぐ、

○森林學 故に我國の森林學は、即十五年より起れるものにして其進歩誠に幼稚なり、今後研究を要すべき問題頗多し、西洋にては百年前より此學開けたり、雖も、尙著しき進歩なし、凡そ森林學といへば世人は唯柚人樵夫の爲すべき學なりと思ふべからんも、其實誠に廣大深遠なる範圍を有する學問にして、高等普通教育を卒へたるものに非れば、此學の門に入ると能はず、森林と雨量との關係、風向との關係を學ばんには、氣象學を知らざるべからず、木材の應用に於て摩擦、重力の抵抗を學ばんせば、物理學を知らざるべからず、植物學の智識の必要なるは言ふまでもなし、應用化學亦必要なり、而して最必要なるは數學なり、木材の大き、重さ、年數を其木の曲度より測らんとし、又坂路の傾度を

マ昔時にありて此の如く我邦の植物森林に注意したりき、今日の日本人たるもの、奮起する所なかるべからず、

○森林濫伐の害 我邦も舊藩の頃より森林保護に盡力して濫伐を禁じたり、此加賀藩の如きも御用水を稱して松杉檜以下八種の樹木は、人民勝手に伐ると禁じたりしが、明治の初年土地の賣買を許し地租を制定したる頃、其禁も已みられ、人民は非常に樹木を濫伐したり、其結果今日に顯はれて、加賀は木材算少となり價格騰貴し、特に大木の如きは如何程の高價を出すも求むると能はず、現に此高等中學校の用材を見るに皆青森秋田邊の産なり、故に若し青森秋田にも森林なかりせば、諸子は此宏莊なる學校に學ぶとを得ざりしならん、一般の人民が未來永久の事に眼を注ぐ者なきは何處も同くこゝにて、佛國にても革命前後の戦亂の際、大に森林濫伐行はれ、全國の三割なりし森林、減つて一割四分となりたり、其後年を経るに従て木材の不足を來し、人民は非常の不便を感ずるに至りければ、近年は大に森林保護に力を勉め、海岸に松を植付くるなど、政府も人民も共に盡力し一割六分まで増したり、

○森林學と國家 森林學を學ばんには、常に國家的觀念を抱き居らざるべからず、殊に日本國にありて然りすとす、今日日本森林の多分は帝室御料地と官有地なるが、其所有者の誰なるに關せず、森林の國家に及ぼす影響は甚大なり、彼の近年屢起る洪水は、其直接の損害と河身修繕費とを合して、年々一千萬圓の損失を我邦に與ふるが、善く森林に注意すれば防ぐを得べし、森林に樹木多ければ雨水を地中に吸取して洪水を起さしめざるものなり、日

見て、伐材運搬の難否を知らんざれば、皆數學の式によらざるべからず、余嘗て木曾山を經、巨大の材木を二三里を距て木曾川岸に運ぶに、概一小溪の掬ふに足らざる水を利用せるを見たり、而して皆物理學と數學の應用なるを覺りたり、其他深山に道路を開鑿せんには、土木學の智識を要し、森林の國家經濟に及ぼす影響を知らんざれば、經濟學行政學を知り居らざるべからず、獨逸の某大學にては、森林學を國家學の科とし、某大學にては、森林學を稱せずして國家經濟學と稱す、以て其經濟學國家學行政學と關係あるを知るべし、斯の如く森林學の範圍は廣大なり、

○西洋の森林學 西洋にては大に日本の森林に注目し、學校植物園などには多く日本の樹木を栽培す、蓋し日本の如き好き森林は世界に是れ無ければなり、西洋の森林學者は大抵日本へ研究の爲渡航し來る、先年農科大學講師たりし某獨逸人は、日本在留中大に森林學上得る所ありたりと稱し、歸國の後、其大學教頭となれり、凡て法學理學の如きは、何處も同くこゝにして、西洋のものも其儘我國へ受賣りすればそれにて充分なり、雖も、森林學のみは然らず、我國の獨特の學といふを得べきもなれば、唯外國の學を參考するに止まり、彼を習ふことは斷つてなすを得ざるなり、余は信ず、今日法、理學に於ては我より彼に留學生を出せども、森林學に於ては彼より我に留學生を送るべきなるべし、其覺悟にて今日より十分此學を進歩せしめ置かざるべからずと、外人シールホルト氏の如きは數十年前幕府時代に來り、大に我國の植物森林を研究し、種々の樹木を持歸りて之を植付たり、今日西洋の公園に銀杏の樹多きは氏の日本土産なり、外人さへ、シカ

本は嶮山短川多くして禿山少からず、洪水の多きも尤の次第なり、其禿山こそ洪水豫防の材料に供すべきものなれば、水害のみに關せず、凡て森林學を學ばんものは、國家の利害を眼中に置かざるべからず、

○森林學者 森林學の日本に必要なとは非常なるものにて、全國に森林學者の多く出でんことを切望しつゝあり、農科大學林學科の卒業生の出る毎に、四方より奪ひ合はるゝ有様なるにも拘はらず、此學をなす人の少きは怪むべし、東京の學生中石川縣人は其數多きこゝ第一なり、而るに此石川縣學生にて森林學をなしたる人は三人に過ぎず、畢竟森林學が初歩にあるを以て其學の何物たるか、其學問の利益は如何なるかを知らざるによるべし、又此學を以て無味乾燥のものなりと誤解するに由らん、

○森林學者の愉快 森林學者は身軀壯健、精神活潑ならざるべからず、而して嶮山を攀ち、奔流を横きり、原野に夢を結ぶこと數々なるものなれば、艱難痛苦も甚だ多しとは雖も、亦愉快なること甚多し、或は銃を肩にして深山に鹿猪を獵り、或は竿を携へて溪水に鯉鮒を釣る時の快は如何ぞや、特に一手の中に幾千萬圓の大財産を掌握し、此大財産を蕩盡するも之を増殖するも、唯己一人の意のみと思へば、其愉快は實に筆舌に盡すべきにあらず、余は森林學者なれば、或は我田引水の譏をなす人あらんも、讓らんぞ欲する人は其譏るに任せんのみ、

第六回卒業生

學年試験は來れり、貳拾貳名の本科卒業生諸君は多年雪の勞を積み、卒業證書の月桂冠を得て吾人に辭せんとし、廿八名の豫科卒

業生諸君は轉に進んで専門學部に入らんとす、慶すべきの至りなり、余輩は左に諸君の芳名を載せ、其式の概要を叙せんす、

本科一部文科

小倉正恒、大味久五郎、中川友次郎、松平市三郎、澤崎鐵二、中村尹男、國府長樹、増永亨一

本科一部理科

日置謙、大野水克豊

本科二部工科

細野安、竹田留次郎、金子關男、西崎傳一郎、宮北房十郎、松村謙成、藤岡淨吉、納富榮一、奥田定一郎

本科二部理科

藤田外次郎、八田三喜

本科二部農科

山崎延吉

理科

英水清次郎、小松倍一、石阪友太郎、岩田成實、信濃榮三郎、清水清藏、本多菊吉、水木常信、佐藤家太、池田愛輔、村上圭一、長連恒、富士澤信隆、西村正雄、谷野作治、吉田勇、五十嵐嘉一、中尾教善、大田四郎、中谷正造、中川忠順、加藤太郎、鶴見左吉雄、本多政好、中尾照丸、多島與三、恒田勝治、石田莊二、山科祐二、三好久朋、奥山萬次郎、眞田信太郎、森山守次、佐久間嘉十郎、湯淺亮三、林鏡十郎、土井真太郎、中屋重鑑

卒業證書授與式は七月九日午後一時より講堂に於て舉行されたり、

來賓は三間知事を始め無慮六十餘名、大島校長來賓に挨拶し、我校

の既往現在將來に就き精細なる報告をなし、且つ生徒一同に告げて曰く、

高等學校令は發布せられたり、然れども本校は急激なる改革を爲すことなし、故に諸子は從來の方針を以て修業するに於て、何等の障害をも見出さず、幸に安心して勉學せよ、

と、證書授與終りて左の祝辭を朗讀せられたり

本日諸子が貴賢紳士の面前に於て貴重なる卒業證書を受けたるは固より諸子の光榮にして抑亦本校の光榮とする所なり加之諸子の父兄を始め知友等の喜悅は推して知るべし是れ畢竟諸子が多年奮懃雪案日夜刻苦研鑽せし功に依るも亦以て本校教養の結果たるや論を俟たず故に諸子は自今以後益學問を研磨し技能を發揚し以て舊師の恩に報答するは素より諸子が意中の事ならん又世の先達者に對しては恭敬以て之に接し以て社交上の義務を完ふせんことを望む且夫れ常に節操を勵み德行を修め忠孝の道を盡すべきは勿論國家の隆昌を冀望し社會の進運を期圖するの志を固うし以て愛國の赤誠を發揮すべし蓋し今上陛下の教育を軫念し給へる聖旨は時々刻々之を服膺し一に帝國臣民たるの自分を盡すは諸子が無上の責任なり本日諸子を社會に紹介するに當り一言を告げ併て諸子の健全を祈る

明治二十七年七月九日

第四高等中學校長從六位勳六等

大島 誠 治

小倉正恒君卒業生總代として左の答辭を朗讀せり

本日本校卒業證書授與式の典を擧げらる校長閣下生等に卒業證書

を賜ひ並に訓諭せらる謹て伏承す生等本日の榮あるは猶草木の雨露の滋育を受けて花を開くか、如し抑草木に取る處は花に在らずして而して實に在り生等前途結實の期尙悠遠なりと雖も敢て金言を服膺し嚴霜烈日に淫雨暴風に能く堪へ能く凌ぎ其志を達し其業を成し以て聖恩の第一に報ひ奉らん茲に貴賓嚴師の面前に誓ひ謹て拜答す

明治廿七年七月九日

第四高等中學校本部第六回卒業生總代

小倉 正 恒

卒業生諸君は大抵帝國大學に進入せり、余輩は諸君が能く我校の聲譽を揚げ、志業を成就すべきを信ず、諸君請ふ屢勉、邦家の爲めに自愛せよ、

大學卒業生

今回我校出身の學生にして帝國大學を卒業せられし諸君は左の如し

法科大學法律學科

倉知鐵吉、清水澄

法科大學政治學科

福島淳吉

工科大學採鑛冶金學科

米山良輝

文科大學史學科

松田宗吉

農科大學農藝化學科

矢木久太郎

余輩は茲に謹て諸君の榮を賀し健康を祈る、

体操教師應召集

東邦の風雲日に急に、日清既に事を始む、第三師團は充員召集を行ひ、我校兵式教官磯田、福見の兩氏は之に應じて、金澤營成に入らる、清國の無禮深く膺懲せざるべからず、余輩は兩氏の軍に従ひて邦家の爲めに盡瘁せられんことを望むに切なり、(磯田氏今は第七聯隊補充大隊附として名古屋に在り、福見氏は後備第十一大隊分遣隊に加りて敦賀に在り、而して日下氏も亦十一月下流、第四師團の召集に應じて姫路に赴かる)

職員異動

多年薰陶教養の任に當られし高橋工學士は其職を辭せられ、福岡工學士(清一郎君)代りて我校教授に任ぜらる、而して外國教師スターティ氏は解雇されジエームス、ムルドック氏之に代り蒲原重實氏は助教に、野村攬業氏は体操教師を命ぜられたり、余輩は高橋、スターティ兩氏の去るを悲むと同時に、福岡、野村、蒲原、ムルドック諸氏の來任を喜ぶ、

學制改革

高等學校令は發布せられぬ、從來主牀たりし大學豫科は客となり、専門學部は其本牀となりぬ、然れ共我校には從來の如く醫學部及大學豫科を置かれ、三中の同朋の如く過激なる變動のなかりしは余輩の幸といふべし、學制の改革を賀すべきなり、

三中の諸君

第三高等學校には法學部及工學部を置かれ、從來該校の主腦たりし同朋諸君は、全國各高等學校に四散するの止むを得ざるに至れり、

壬辰會雜誌號外何ぞ夫れ痛切なるや、余輩は深く三中の諸君に同情を表す、安意せよ諸君、任他三中は解散せらるゝも、諸君が精神的結合は決して解くこと無かるべし、轉じて我校に來りし者三十一名余輩は喜んで諸君を迎ふるなり、

始業式

九月十一日午前九時三十分、講堂に於て始業式を舉行せられ、大島校長讀て教語を捧讀せられ、村上教授の訓戒あり、終りて校長の演説あり、新舊生徒を紹介し、式を終ふ、

待生

左記の諸君は本學年待生を命ぜられたり、諸君の爲め祝せざるべけんや、

大學豫科法科第三年生堀内秀太郎、相良歩

同文科第三年生小島伊左美

同理科第三年生中川鐵吉

同文科第二年生茨木清次郎、小松倍一

同理科第一年生齋藤賢道

學友會の解會

新學年始まるや、學友會は學校より解會を命ぜられたり、亂雑は斷たざるべからず、解會固より其所なり、當時の事亦言ふに忍びんや、總集會や、退會や、皆過去の一夢のみ、余輩は唯方に北辰會の萬歳を唱ふべきなり、

倫理科

本學年より倫理科は専ら村上教授之を擔當せられ、全學生を兩組に分ち、主として勅語に就て忠孝の大義を講演せらるゝ事となれり、

甲種

拾三點 貳拾五等日下庄太郎

拾貳點 四拾壹等吉村政行

乙種

貳拾六點 壹等野村禮榮

貳拾四點 三等石田他夜郎、四等日下庄太郎

貳拾三點 六等本庄謙三郎、

貳拾點 三拾六等小島伊左美、青木澤五郎

拾九點 八拾四等、柏原省私、八拾九等藤田良平、九拾壹等林安繁

拾八點 九拾六等永松文一、百廿一等小川得藏、百廿三等堀内秀太郎

拾七點 等外水木常信、石井直、磯部鐵吉、相良歩、

甲乙兩種共に滿點は廿五點にして、甲種は拾貳點以上は賞を受け、壹等より四拾壹等に至る、乙種は拾七點以上受賞、壹等より貳百等に至る、射距離は貳百メートルとす、野村氏の壹等豈に獨り氏の名譽のみならんや、實に學校の名譽なり、(此他尙醫學部にも數名の優等者ありき)

天長節奉祝式

秋期陸上大運動會

十一月三日は實に今上陛下即位第貳拾七回の天長節なり、乃ち午前七時倫理講堂に於て恭しく其奉祝式を舉行す、校長勅語を朗讀し、職員生徒御眞影を拜して式を撤し、直ちに校庭に於て陸上運動大會を催す、其詳況の如きは載せて本號附録にあり、復爰に贅せざる

時習寮生蓮湖舟遊

九月廿三日時習寮生六十餘名河北湖に舟遊す、大島校長、佐野助教授來會せらる、舟を出す數隻、縱横回旋、右には醫王、寶達諸山を望み、左には砂丘の天と接するを見る、舟を大根布村に繋ぎて岸に上り、晝飯を喫し、再び乘舟、故路を取つて歸れり、余輩は諸氏の快を思ふと共に、端艇を此湖に浮ぶるを得るは、果して何れの日なるかを想見せずんばあらず、

士官候補生送別會

我校學生神尾直次、林銑十郎、中川茂の三君、曩に士官候補生試験に及第し、各將に指定の衛戍地に赴かんとす、乃ち同窓相謀り、十月五日野田寺町妙典寺に於て其送別會を開く、會する者一百に滿たざると其五分の一、大島校長、秋山浦井の兩教授亦臨まる、酒は則ち美ならず、肴は則ち佳ならず雖も、送る者は誠意三氏の前途を祝し、送らるる者は誠心斃れて後止むべきを誓ふ、獻酬互に胸襟を披き薄暮にして則ち散す、今や我邦は新に驕清に克ち、東洋の盟主として海陸の軍備愈嚴ならざるべからず、此れを思ひ彼れを思ふ、諸君の任や夫れ重からずとせんや、諸君請ふ之を勉めよ、

國民射擊會

十月十八日より廿一日に至る五日間、上野陸軍射擊場に於て、國民射擊會の開設あり、時正に征清の盛時に會す、射客雲の如く又霞の如し、標的を甲乙兩種に分ち、甲種は人像的にして、乙種は則ち楕圓的なり、我校職員生徒亦赴き與る、而して其結果頗る我校の名譽を博せしは、吾人の以て稱するに足る所と信す、左に我校受賞者の芳名を掲ぐ、

旅順占領戰勝祝賀會

全月下旬皇軍進んで旅順を陥る、北清第一の要領我た歸す、焉んぞ祝せざるを得んや、乃ち廿六日正午より、校庭に於て祝賀式を舉げ、大島校長謹嚴に左の祝辭を朗讀す、

明治廿七年八月我觀聖文武なる 天皇陛下征清の爲めに大難を廣島に駐められ爾後海陸の捷報相次ぎ踴躍せざる者なし本月廿二日も其一大軍港たる旅順口を塵撃して略す然らば其首府北京を陥るゝは學を指すが如きのみ是れ固より 天皇陛下の盛徳明裁の然らしむる所と雖も亦將校兵士の報國靈忠の義膽によらずんばあるべからず恭く惟るに我帝國開關以來金甌無缺東亞に雄視するも雖も此の如く稜威を海外列國に光被せしは未だ曾て有らざるなり然らば即ち我四千萬の臣民孰か之を謳歌せざらん特に余輩教育に従事する者は率先以て之を慶賀せざるべけんや是に於て職員生徒校内林操場に會同し大捷を祝するの典を擧ぐ聊か蕪辭を陳して雅頌に代ふ

終て 天皇陛下萬歳、帝國萬歳、陸海軍萬歳を三唱して式を撤す、翌廿七日大捷祝賀會は大學豫科三年生の企画により、大學豫科、醫學部合同を以て開かれ、帝國臣民たる者誰か此大捷を祝せざらん東より西より、南より北より、集る者無慮五百餘名、林操場に席を敷き、一大方阵を作り、國旗四腕其四隅に立ちて北風に翻る、後四時を以て宴を開き、發起人の挨拶あり、先づ萬歳を唱ふると三唱、乃ち大白を傾く、談する所は皆我軍の捷を祝するに非るはなく、話する所は皆前途の多望を期するに非るはなし、散する時金鳥既に西

天に春き、晚鴉林に還る、嗚呼帝國萬歲、

烽火演習

今や帝國幾萬の貔貅は滿州朔北の地に曝露し、一意邦家の爲に征討に従事す、此時に當て野外演習を行ひ、聊か臂懲の師に擬せんとする亦可ならずや、況んや秋高くして氣清く、極目蕭條、轉た人をして感多からしむるの時なるに於てや、十一月廿二日、石川縣金石附近に於て、一大對抗演習を舉行す、南軍は上金石よりして北進し、北軍は粟ヶ嶮地方より南向するに擬す、激戦は下金石より粟ヶ嶮の間に於て行はれ、青松白沙の間、砲聲天に轟き、砲烟地に漲る、戦終りて淺野川の堤に沿ふて歸路に就く、行軍の快終に忘るべからず、雜報子行軍紀事を草せんとして、終に當時の材料を逸す、一般方略や、作戦記録や、求めて之を得ず、以て慥々すべきに似たりと雖も、事頗る舊に屬す、亦以て宥恕すべからずとせんや、憶ふ今春は必ず例によりて長途行軍あるべし、行軍紀事の雜誌に載せらるゝ豈に今回のみならずや

訃音

十二月廿七日、法科一年生、山形勇君病を以て遠逝せらる、死面より悲むべし、然れも共青春妙齡の士が偉材を擁して空しく二堅の爲は斃るゝ程、悲惨なるは無かるべし、君は金澤の人、夙に我校に入り、致々學業を修め、又運動に長ず、今や志業半だに成らずして其訃音に接す、嗚呼悲哉、謹で吊す、

歲暮

明治の第二十七歳も茲に終らんぞとす、學期試業は來れり、冬期休業は始まれり、忘年會は處々に開かれたり、回首して既往の一年を見

て感如何、今や我國運は旭日の如く、層一層上進せんぞとす、況んや今夏鷄林の事起り、延ひて清國との戦争となり、國勢の振張脚馬も亦及ばざらんぞとす、嗚呼吾人將來の帝國を負擔するの任務を有する者、日夜精勵此國運に副ひ以て聖恩の萬一に報ゆる所なるべけんや、

寄送雜誌

校友會、尚志會、壬辰會、龍雨會の諸雜誌每號寄送を辱ふす、茲に謹んで其厚意を謝し、諸君の萬福を祈る、福島尋中全窓會及岐阜尋中學術談話會の諸君に向ても、亦等しく謝辭を呈す、



附錄

附 録

陸上大運動會記事

余本と運動の事に疎く、加ふるに當日記録の事を掌り、機械的の雜務に執掌して、壯快なる競技の状を見るの暇なかりき。是を以て記する所、空々漠々として、肝心の運動の記事簡に過ぎ、本末其躰を失するの評は、余が辭する能はざる所なり、唯職記録係にありし因により、免るゝ能はざる責を塞がん爲め、拙悪の文辭を並べしに過ぎざるのみ、諸君請ふ之を諒せよ

記 者 譚

清風蕭颯として霜氣横はり、金石皆鳴つて落葉聲ある時、明治二十七年の秋、我第四高等學校生徒控席に丈大の掲示は現れ出でぬ、嗚呼吾人が待ちに待ちたる秋季陸上大運動會は、實に十一月三日、天長の佳辰を卜して舉行せらるゝなりけり、大島校長是が會長たり、本部職員有志及び大學豫科三年生是が發起人たり、此愉快なる報知は忽ちにして校内到る處に喧傳せられぬ、今、日清の空平和の雲破れ、我百萬の貔貅は出で、征途にあり、豊島、成歡、平壤、海洋、九連、海に陸に、戦あれば捷報必ず尋て至り、國民の氣揚りて斗を衝き、吾人筆硯の間に齷齪たるものと雖も、筆を投じて戎軒を事とするの慨なきを得ざるの時に當りて、此壯絶快絶の事に接す、校下幾百の健兒、腕を扼し脚を撫して、唯期の到る遲きを歎つもの、又宜ならずや、

準 備

一週間以前よりは、何の故たるを知らざれども、人集れば談必ず運動會にあらざるなく、發起人は會場の配

置、賞品の準備、招待状の發送に、夜を以て日に繼ぎ、運動者は己がじ、競技の下稽古に餘念なし、飾旗の意匠に妙案を凝らすもの、造り物の工風に新奇を競ふもの、いづれも謀計は密なるを尙びて、相秘め、相隠し、以て他の意表に出でんと力むる様、勇士が陣中に先駆を争ふものに似たり、かくて、精撰の結果、各級を代表して、名乗り出たる撰手の面々、次の如し

障害物競走各級撰手

四丁競走各級撰手

大學豫科三年	紅 若林彌一郎	富 田 薫	中 屋 重 樹	渡 部 鏑
全 二年	白 吉田 弟彦	信 濃 榮 三 郎	五 十 嵐 嘉 一	石 田 莊 二
全 一年	青 竹 俣 吉 松	長 島 清 松	佐 藤 龜 久 二	石 井 直
豫 備一級	紫 志 賀 新 安 藤	豐	宮 崎 友 次 郎	柳 田 友 磨
全 二級	黃 草 野 繁	大 竹 源 助	福 岡 外	大 島 正 橘

赤か、白か、青か、紫か、將た黃か、中原の鹿果して何れの手に落つべきや、當日第一の観物は、蓋し此二競走なるべし、吾人は須らく括目して之を見んとす、

又來賓學生撰手の、各學校より通知し來りたるもの、次の如し、

第四高等學校醫學部	紅 高口保太郎	田 中 健 治	宮 崎 亮 吉	廣 野 喜 久 雄
石川縣尋常中學校	綠 三橋 篤 敬	笹 川 彌 富	岡 春 雄	中 村 久 米 二
全 尋常師範學校	白 新 谷 裕	山 科 龜 義	梅 林 秀 太 郎	澤 田 禮 儀
全 工業學校	紫 中山 準 太 郎	吉 田 金 十 郎	木 村 良 風	山 崎 外 雄

私立北陸學校

黃 黒坂 登 美 雄

早 瀬 三 求

山 本

順

石 田 銈 吉

是又、各校中屈指の強の者なるべし、知らず、何れか能く勝を制せん、

役員は、發起人中に於て之を分擔し、開會當日、幹事は右腕に紅白交りの徽章を扼し、判定係、會計係、準備係、接待係、記録係、世話係は左腕に紅、黃、綠、白、青、紫の徽章を附し、各其職に従つて、事務に幹旋す、

諸般の準備は悉く成りぬ、今は其日の來るを待つの外なし、唯憂ふる所は、當日の天候如何にあるのみ、

會 場

日は來りぬ、軒毎に旭旗翻り、百一の祝砲轟くの、日は來りぬ、風雨常なき北國の秋の日、人々が尤も憂ひし所は、幸にも無用の杞憂となりて、前日より秋晴引續き、碧空には纖毛大の浮雲もなく、天高く、氣開け、陽春にも増したる空模様は、會場の景色を見渡せば、紅紫入り亂れたる數百流の旗は、金澤營成の岳の邊、龍田姫が織出せる錦の上に、時ならぬ花を添へて、絢爛眼を驚かさばかりなり、

場は東隅、幹に紅の蔓亂れたる、巨椀の下に、三葵の紋付きたる幔幕幾張となく、引廻らし、其中央を賞品授與所に充て、會長大島氏席にあり、左方は來賓席、右方は役員席、役員席の次に會員席、次に諸學校生徒席、一般縦覽者席、來賓席の次に兵士席、順を追ふて場の周圍に連れり、

運動場は周回二町餘、幅七間、楕圓形に二重の柵を結び、柵毎に國旗林立して、遠くより望めば雲の如く、萬朶の櫻花爛熳たり、中央に四方より高く吊したる、數百流の締盟諸外國の國旗は、頂上なる一大旭旗を本として、其威風に吹き靡き、又其上には、紅白絞りの吹き抜き倒に天に朝して、双龍の雲間に戯るゝに似た

り、白虹の天を貫けるが如きは長旗の流るゝにはあらずや、萬星の青空に亂るゝが如きは球燈の風に漂へるにはあらずや、今や校庭は燦爛として、吉野龍田の花紅葉を一時に見るの風情あり、

造り物

場に入らんとするものは、先づ凱旋門の造り物に膽を冷すならん、そは一部二部一年生諸君の寄附に係り、雨天躰操場の傍に建てられ、會場に入るには必ず之を過ぎざるべからず、背囊を以て造りし巨門、仰ぎ見れば上には凱旋門の三字筆太にしるせし扁額高く掲げあり、其兩側には、數百挺の銃器を以て垣を結び、抜き列ねたる劍光、凜として、寒山の白雪旭に輝けるが如し、門の右側には我國旗風に翻り、左側には分捕品になぞらへし清國の三角旗、半は裂き破られて、血痕所々に淋漓たる様、見るものをして、轉た慘憺の情に堪へざらしむ、

又北隅乃池邊に沿ふて造られしはおなじく其寄附に係れる北京城なりき、城は實に紙を貼して造れるものなり、しかも、今の時に當りて、敵國の城門を眼前に眺むるもの、豈多少の感なからんや、よし、北京城は天下有數の巨城、しかく微弱なるものにはあらずと雖も、之を守る豚奴の情に薄きこと紙の如くならざるなきか、造り物の趣向は實に北京城燒討の狀を演ずるにてありき、如何せん群兒争ひ來つて瓦石を擲げ、勢之を制する能はずして、北京城は程なく自滅し果てぬ、是れ以て亡國の運命を徵するに足らんか、又以て我國民義に勇むの情、兒童走卒に至るまで敵愾の氣象發揮せるを知るべきなり、

時習亭

凱旋門の勇壯なる、北京城の莊重なるに對して、最も雅趣ある思ひ付は、時習寮の喫茶店、時習亭なりき、

會員席の後方に當りて、間口四間、奥行二間、外に一間四方の湯沸し所、霞簾張の櫓は粗末なれども、風流は何處までも離れず、屋上に滿艦飾をかたどりたる小旗山形をなし、前に國旗を交したる所、頗るいかめし、暖簾をかかげて進み入れば、卓上に堆き菓子人の食ふにまかせ、茶と珈琲は其撰ふかまなり、運動始まりしより、來賓充ち來り、亭内狭きを感じしまでもうち集ひしかば、午後二時頃に至りては、響應の珈琲も欠乏を告ぐるに至りぬ、以て其いかに時好に適したるかを知らるに足らん、亭前には左の「ピラ」を貼したり

賣茶翁の古き流を汲むにもあらず、白髯の森の霞簾張を真似るにもあらず、さらば此茶店は何の爲ぞと問はし、唯何の爲にもあらずと答へむのみ、強ひて問はんは野暮なり、いざ立寄りて、きこしめせ、世を宇治山の澁茶一椀、いざきこしめせ、御茶菓子は鹿末なれど、されど僕等の赤心が、こよなき御茶菓子にははべらずや、いざ聞しめせと、武骨者の時習寮生が申す

(寮生無名氏 作)

寄 附

運動會の廣告、一度公にさるゝや、商人は争つて金員或は賞品を寄送し、新聞者はいづれも廣告料を寄附し、職員生徒諸君よりは金員に、賞品に、造り物に、飾旗に、球燈に、夫れ〳〵寄送して會の盛況を助けざるなく、中にも一段の喝呼を博せしは、大學豫科二年生有志諸君の考案にして、そびらに旗押し立て、場内諸所を徘徊して、縦覽者一般に、學校の徽章附きたる菓子を配與せるにてありき、博愛衆に及ぼせるものといふべし、又開會當日に至り、來賓の金員物品を寄附せるも多く、殊には、第何回某競技の優等者へなど、條件附の賞品寄附せる向も少なからざりき、斯く寄送を以て本會を盛ならしめたる諸君の好意に向つては、一片の感謝なかるべからず、此を以て、會場には揭示所を設け、一々之を廣告して、些か謝意を表したりき、

來賓及縱覽者

來賓の主なるものは衛戍、縣廳、裁判所等諸官衙、並びに諸會社の役員、國會議員、縣會議員、新聞記者、公私立學校職員、其他市内紳士、及び本校に縁故ある人々なりき、當日諸官衙、諸學校にては、何れも奉祝の式を上げしことなれば、來賓の中には、其整服の儘、金光燦然たる大禮服着たるもあれば、端正洒瀟たる燕尾服も見え、又羽織袴の奥床しき打粉もあり、軍人は金装いかめしく、兜の星ならぬ帽子の徽章日に輝き、叔女は今日を晴れと綺羅を飾りて、來賓席に時ならぬ花を咲かしぬ、午前八時頃より、集參するもの引も切れず、接待委員は一々これを設の席へ導きて、茶と菓子を供せり、かくて午後に至りては、數百人の多きに達し、來賓席は爲に狹隘を感じて、餘波は引て委員席までも溢れ來りぬ、

這回は特に入場券を出さずして、何人にも勝手に縦覽を許せし故、縦覽者は、開會遅しと門前に詰めかけ、愈入場を許すや、雲霞の如く押し寄せ來り、流石に廣き校庭も、須臾にして立錐の隙なきまでに充滿し、無慮數萬人、場の周圍を十重二十重と取巻き、頸を延べ、踵を上げて押し合ふ様、いと物凄し、當地有名なる招魂祭の外は、市内に斯の如き人出は、嘗てなきところなるべし、

開 會

午前六時過ぎより、本校倫理講堂に於て、勅語捧讀式、御眞影拜賀あり、式終るや、會長大島氏本日運動會舉行の旨を演説し、一同校庭に出づ、運動者の健脚は今更に鳴つて音あるべく、心臓は一入高く鼓つなるべし、準備係は帽子に服装に奔走一方ならず、世話係は諸般の事務を助けて其間に周旋す、縦覽者は、ハヤ場の

周圍に群れり、

八時四十五分、數聲の鳴鈴轟きて開會は報せられぬ、判定係の呼出しと共に、第一回二丁競走の競技者は、拍手に迎へられて運動場へ現はれ出でぬ、何れも一樣の輕裝、紅白色異なる帽子を以て彼我を區別す、縦覽者は今更に番組取り上げて、黒や勝ん緑や勝んど、品定めとりくくなる時、鳴鈴一聲用意を報じぬ、人々の眼は悉く競技者の上に注ぎ、其氣配を窺へば、合圖の砲聲今や響かんと、満身の力量を双脚に込め、肘を張り、拳を握り、百尺崖頭千斤の磐石懸れるが、今にも崩れ來らんとするに似たり、忽ちにして砲聲一發、瘴煙漠々、雲か、霧か、拍手四方に起りて、青と呼び黃と呼ぶ聲喧し、眞先に突進するは誰ぞ、白黒の帽色は田中氏にはあらずや、然り、誰れしも第一回の一等賞は氏が握りたりと思ひしに、馬んぞ知らん、決勝線前三間の所にして、誤つて躓き僵れ、一刹那、次に進みし勝俣氏は既に決勝線上にあり、此第一着の爲に、紅旗振られ、二着には白、三着には青、四着には黃の旗振り動かされ、以て優等者判定の符號となす、

一等(黒)勝俣 又次郎、二等(桃)大竹 源助、三等(紫)吉田 哲雄

第二回、二丁競走、十間の差を以て、柳田氏の一着は、前後無比の抜き方なりき、

一等(淡紅)柳田 友麿、二等(淺黃)田宮 春策、三等(紅)桑田 初五郎

第三回、二丁競走、黃と鼠とは相前後して進みしが、半週の所にて、鼠は其肩を以て黃を押し、進んで其前に出しとて、斯の如くにして猶二等賞を得べかりし黃は、怒つて鼠を手搏せし爲、決勝線前五間にして、判定係は其運動を止めしむ、

一等(鼠)宮崎 友次郎、二等(紫白)杉本 重太郎、三等(白赤)森部 孝郎

第四回、戴囊競走、出發點にて既に囊を落すもの、將に落ちんとするを鼻にて受止めながら走るもの、手を以てこれを助けんとして驚て止む塗炭に囊を落して呆然たるもの、千躰萬様、早きもの必ずしも勝つにあらざ、後れたるものも亦萬一の僥倖なきにあらず、其囊一つを後生大事と、頭を据えて走り行く腰付、人をして抱腹に堪へざらしむ、

一等(淺黄)今井 三郎、二等(綠)茨木清次郎、三等(紫白)新美德太郎
第五回、戴囊競走、

一等(白紅)河野 義雄、二等(紫)脇田 琥一、三等(白)本間 等

第六回、提灯競走、半週の所に、摺附木と提灯とを置く、此所までは一目參に駆け付き得べきも、茲の關所に喰ひ止められ、篠つく驟雨も密樹の葉間を漏れて滴と落つるは少きが如く、早きは火點して進むもあれど、遅きは心ばかりいらちて、幾度か擡れども、風に奪はれ、一箱殆んど焚し盡せしもあり、進むものは急かざ、走らず、大の男が提灯大事と、中を窺ひながら躰を屈めて、顧み、行く姿の滑稽めきたる、中には決勝線の間際にて火を消され、又本の所に引返して出直すもあり、後に残れるものは、心益周章て、摺附木箱と組打する様の氣の毒さ、第一着は既に決勝線に達し、判定係は火の消えたるなきかを吟味し、紅旗は振られたるに、他は尙點火に齷齪せり

一等(青)近藤 篤逸、二等(白青)丸山 義男、三等(白綠)山崎 靜、四等(淺黄)大島 正橘
第七回、提灯競走、

一等(淺黄)佐治 修三、二等(黑桃)宮川 鼎、三等(桃)中屋 重鑑、四等(黄)石田 犬一

第八回、二丁撰手競走、勝侯氏は半にして僵れ、柳田氏は宮崎氏に先んずると一間にして、メダルは其手に落ちたり、

第九回、四丁競走、一週目に後れたるものは多く退きて、二週目に至り、餘す所僅に四人、中にも後方より數人を抜き、一丁半程の間に一等賞を占めし、鹽井氏の勝は見事なりき、

一等(黑桃)鹽井 松太郎、二等(紅)久保田 整、三等(黑)丸山 忠次

第十回、四丁競走、一週目に、様々ちどけたる身振をなし、跳り狂ひて、しかも最後にありし築山氏、二週目に至りつゝと進みて衆を抜き、三番に着せしは大喝呼を博したり、猶一週あおば、一等賞を握り得たらんか、これ又知るべからず、

一等(紫)富田 薫、二等(白)石田 莊二、三等(白黄)築山 直彦

第十一回、武裝競走、此競走には背囊、劔、銃を三ヶ所に分ちて備へあり、競技者は進んで背囊を附し、又進んで劔を帯び、更に進んで銃を擔ひ、走るものにして、諸種の競走中、尤も勇ましきものなり、

一等(白綠)佐藤 家太、二等(黑)中屋 重業、三等(淡紅)吉田 哲雄、四等(白黄)三好 久朋
第十二回、片脚競走、片手は後ざまに一脚を擁し、片手を車輪の如く振り廻して駆る、秋蝗の群がり飛ぶに似たり、渡部氏殊に抜群の譽高く、易々と紅旗に取附きぬ、

一等(鐵)渡部 鏑、二等(白黄)石井 瑠、三等(白)今井 三郎
第十三回、片脚競走、

一等(黑)江間 圭一、二等(白青)志賀 新、三等(白紅)森部 孝郎

第十四回、柿拾、これ又滑稽的の競技なり、半週の所に、柿實七個宛を一堆となし、走せて此所に至り、双手にこれを拾ひ上げ、携へて走る趣向にして、之を兩手に頑ち鷲爪にし、疫鬼が佛舍利を奪ひて走るが如きもあり、諸手に抱きて落さじと駈るもあり、其状頗る興あり、

一等(黄)宮崎友次郎、二等(紫)桑田初五郎、三等(紅)野崎安近、四等(青)河内周造
第十五回、四丁撰手競走、富田、鹽井兩氏、殆んど五角に進み、人をして手に汗を握らしめしが、一間の差にてメダルは富田氏に歸したり、

第十六回、八丁競走、一週目には紫第一に進み、白之に次ぎ、緑白又之に次ぎしが、二週目に至り、黒後より抜きて真先に進み、次は青、次は白となり、三週目にはおなじく黒第一にして、緑白と青之に次ぎたり、危機一發、「負るな」と呼び、「ヘーヒー」と叫び、それ／＼帽色を以て掛聲起れば、之に氣を得て突進し、決勝線に達せし時は、

一等(黒)大島正鑑、二等(白緑)横田茂、三等(白黄)田中正太郎

第十七回、八丁競走、一週目には挑、緑、白黄の順なりしが、二週目に至り赤、黄、桃となり、三週目には赤、黄、紫となり、後方にありし緑は突進して、決勝線に一着を取り、赤、黄之に次ぎたるは、面白き競走なりし、

一等(緑)村上辰午郎、二等(紅)上田 征雄、三等(黄)福岡 外

第十八回、提灯競走、

一等(紫白)竹俣吉松、二等(黒)今井三郎、三等(白緑)石黒爲次郎、四等(黒紅)草野繁

第十九回、提灯競走、

一等(黒)横山正雄、二等(桃)青木儀太郎、三等(紅鼠)島 彌太郎、四等(白紅)森田喜三郎

第二十回、戴囊競走、中屋氏群を脱して真先に進みしも、中途にして囊を落し、一着は吉田氏に占められたり、

一等(淺黄)吉田弟彦、二等(紫)中谷正藏、三等(青)高瀬武次郎

第二十一回、高飛、運動場の中央に其場所を設く、初めは低くして次第に其高さを増し、走り來つて數尺を飛超る狀、大石を空中に投したるが如し、最高は五尺三寸、石井氏之を飛び、次は五尺二寸、柏原、大島兩氏之を飛び、殊に大島氏の猫がへりは、大に人目を惹き賞讃を得たるも、氏は勝を柏原氏に譲りたり、

一等(淺黄)石井直、二等(黄)柏原省私

第二十二回、幅飛、桃十五尺六寸を飛び、緑十五尺一寸を飛びたり、

一等(桃)田宮春策、二等(緑)富田 薫

第二十三回、障害物競走、第一には丸木を幾段に横へたるを上り越え、次は網を地に擴げたるを潜り抜け、柵は手之に懸りて進み、横木數本を平に伏せ並べたる下一尺に過ぎざるを逼り通り、最後に三尺程の垣を躍り超ゆるなり、出立の時、丸木に攀んとして幾度か落るもあり、網の所は殊に騷擾を極め、手を引つかけて之を取らんと争ふもの、足をからめられて進む能はざるもの、巧なるは後ざまに躰を屈めて進み、又は他の行く後よりさもなきさまにて進むもあり、觀るものをして抱腹絶倒に堪えざらしむ、柵は長大の人達し易きも、並べたる丸木の下は短小の人潜り易く、各利害を異にせり、此紛擾の間を脱して、第一に決勝線を陥み

しは、小兵なる若林氏なりしことさもあるべし、

一等(黄)若林彌一郎、二等(淡紅)柏原 省私、三等(紫)竹俣 吉松

第二十四回、障害物競走、

一等(紫白)杉本 重太郎、二等(紫)宮崎 友次郎、三等(淡紅)安 藤 豊

此時恰も正午を告げしかば、來賓は導れて、雨天躰操場に設けたる食堂に入り、會員、縦覽者又それく休憩する事一時間、時習寮の寄附なる劍舞あり、

數聲の鳴鈴と共に、數十名列を整へ、低吟緩歩、練り出づる紛裝を見るに、白鉢巻後に結びなし、白木線襷十字に綾取りて、腰には大刀を横へ、袴の股立高く取りたる姿、雄風四掃、古の武士が面影あり、來賓席を前に取りて並び、吟者は其後邊に立ち、恭しく一禮して、吟し初むるや、音吐透明にして呂律にかなひ、聲調嚶唳、緩なる事春風の柳條を弄するが如く、一轉して急なる事秋風の枯梢を掃ふに似たり、詩に曰く、

平壤大捷歌

老億黃龍已失雲

尙擬障日騰妖氛

皇師赫怒揮神劍

萬兵一躍踰天塹

閃電劈野雷撼山

激戰十有三時間

踰屍而進喋血起

衆皆惜名不惜死

拔塞陷壘又奪門

直使虜軍揭素旛

嗚呼大同江水或有渴

日本軍譽遂無歇

舞ふ者は吟聲につれて一進一退、皇軍赫怒する時、皆裂けて髪逆立ち、劍光一閃すれば、電火雲を破つて闇を縫ふ、夏雲突進んで空を斬る劍に聲あり、勇士名を惜みて退くを知らず、彈丸雨下の間に憤戦する状、當時の光景想見するに餘あり、忽ちにして旭扇高く上げられぬ、萬歳の聲四方に破れ、萬雷一時に落ちかゝ

り、乾坤茲に碎るが如し、此時吟聲止み、皆一禮して場を退きぬ、

第二十五回、障害物撰手競走、若林、杉山兩氏、初めは互角に進みしが、遂にメダルは杉本氏の胸に輝けり、

第二十六回、二人三脚競走、是又興ある運動なり、二人相擁して、互に其一脚を扼し、宛然三脚の動物の如し、其進むや、必しも速なるを要せず、兩々相和し、調を合するを以て要とす、其一人先僵れんとして、他も亦僵るゝあり、將に僵れんとして、辛うじて踏み止まり、よろめく事數歩にして又僵るゝあり、前に進みしもの僵れ、後のもの之を避んとして意合せず、見すゝ其上に僵るゝもあり、其狀頗る奇なり、

一等(黄)阿部政二郎、二等(淡紅)澤田堅太郎、三等(畿)佐々木政直

第二十七回、二人三脚競走、

一等(綠)佐藤龜久二、二等(黄)福岡 外、三等(紅)中谷正造

第二十八回、提灯競走、

一等(淺黄)中山 清造、二等(紅畿)石 井 瑠、三等(淡紅)住 田 寅次郎、四等(青)近藤 常吉

第二十九回、提灯競走、

一等(白)山縣 平作、二等(畿)赤澤欽二郎、三等(白黒)勝侯 又四郎、四等(紅鼠)島崎 行一
第三十回、八丁撰手競走、村上、大島兩氏、共に健脚を鼓し、初の三週は徐々として走り、敢て急かず、大島氏は内側を前に進み、村上氏は外側を後に走り、終始二歩の間隔を失はず、さながら一個の走馬燈を見るの感あり、「大島負るな」「村上しつかりやれ」の聲交も起り、兩氏は次第に足を速めて、遂には疾風の過ぐるが如く駆け出せしが、村上氏は其進み方の不利なりしと、ヘーローの掛けやう稍遅かりし爲め、一間の差に

て、大島氏にメダルを奪はれたるは残念なりき、

第三十一回、戴囊競走、

一等(淺黄)草野

繁、二等(紫)近藤 常吉、三等(白黄)赤澤 欽二郎

第三十二回、戴囊競走、

一等(淡紅)三好 久朋、二等(鼠)鹽井 松太郎、三等(白青)中山 清造

第三十三回、片脚撰手競走、第十二回に名譽を博したる渡部氏、車輪の如く、又飛鳥の如く駈けりたるは目

覺しかりき、江間氏は爲に中途にして止め、渡部氏メダルを取りたるは大喝采、

第三十四回、柿拾、中途にして或は僵れ、或は落し、四等賞を得るものなかりき、

一等(綠)中屋 重樹、二等(黒)森部 孝郎、三等(黒淡紅)磯部 鐵吉

第三十五回、二人三脚撰手競走、中村、老田兩氏、調子よく前に進みしが、如何せしか三分二の所にて滯停

して後れたりしかば、軀幹長大なる佐藤氏は、矮小なる高橋氏を小掖に抱へて、走り抜けし様、布袋和尚が唐子

を抱きて走るが如く、又大鷲が小鳥を掴みて翔るが如く、勇ましかりき、メダルは遂に兩氏が手に落ちたり、

第三十六回、戴囊撰手競走、草野氏驀然として、駝鳥の如く走り、他の四氏をして、後に膛若たらしめ、首

尾よくメダルを得たり、

此時又、時習寮寄附の劍舞あり、其景况以前に異ならずして、豪快の意氣、勇壯の觀彼に劣らず、吟聲起る

時、數萬の觀者閑として聲なく、妙境毎に拍手喝采の聞ゆるあるのみ、詩に曰く、

扶桑男子意氣豪

腰間常帶百鍊刀

君恩萬苦重於嶽

生命一朝似輕毛

南山搏虎虎悲叫

北海屠龍々吐虹

一瓢美酒晴朗夜

嘯向天邊大月高

山本氏の朱鞘は殊に人目を惹きたりき、

第三十七回、來賓職員二丁競走、競技を試みしは次の諸氏なりき、

陸軍少尉 津山 樸太郎

全 軍 曹 澤 賢 吉

北國新聞社 石橋 友吉

舊 職 員 飯森 益太郎

醫學部職員 田中 正鐸

本部職員 岡村 金太郎

全 田中 鐵吉

全 日下 庄太郎

全 野村 攬衆

全 橋 船次郎

全 坂井 乙吾

全 山瀬 時吉

全 宮地 彦八郎

全 廣瀬 仙太郎

赴々たる武夫、侃々たる學者、諸氏の場に現はるゝや、拍手又起り、掛聲盛に聞ゆ、流石は武人、一等賞は津山氏之を握り、二等、三等は本部職員の手に落ちたり、

一等 津山 樸三郎、二等

廣瀬 仙太郎、三等 日下 庄太郎

第三十八回、竿飛、是は競技中、尤も目覺しきものなるべし、青は七尺五寸にして僵れ、黒と淺黄は九尺に

して僵れ、一丈にして紅僵る、竿の長さは一丈三寸なるに、淡紅は大膽にも、一丈五寸を試みんとし、竿を

以て繩の高さを測り見しに、及ばざる事二寸、觀る者惘然として聲あり、氏は之には蹉躓せりと雖も、一等

賞は難なく其手に歸したり、

一等(淡紅)安 藤 豊、二等(紅)中屋 重樹

第三十九回、來賓學生四丁競走、流石は各校中第一流の競技者、場に整列するや、學生席より聲援頻りに起

り、無關係なる我等まで、それ〴〵校名を呼び、帽色を呼びて勵ましぬ、一週目には白、白、緑の順なりしが、二週目に至り白、黄、緑となる、此時白の梅林氏が、他の白を衝き除けて、走り抜しどの聲起り、一時は囂々たりしも、判定係の意見によりて、メダルは遂に白に歸したり、勝ちたる校の席には拍手沸き、歡聲潮の如くなるに引換へ、後れたる校の席には、悄然として音なく、人々無念の涙を吞めり、

一等(白)尋常師範學校 梅林 秀太郎、

二等(黄)私立北陸學校 黒坂 登美雄

三等(緑)尋常中學校 三橋 篤敬

第四十回、障害物各級撰手競走、今や残れる二回は各級運命の係る所、滿場俄に色めきて、活氣を添へ來りぬ、砲聲一發、各級の精を抜き、粹を集めたる十人の撰手、烈風の如く駆け出るや、會員席より、帽を振り、手巾を動かし、聲を枯して叫べるは側目には狂せる者の如くなるべし、網に先んぜしもの柵に後れ、横木に後れしもの垣に追ひ抜き、其度毎に人をして肝を冷し、手に汗を握らしむ、數萬の觀者、又聲々に呼はり〴〵、其音山河を動かし、耳を聳するばかりなりしが、それも須臾にしてやみ、一等は紫、二等は紅の手に落ちぬ、

一等(紫)豫備一級 安藤 豊

二等(紅)大學豫科三年 若林彌一郎

第四十一回、四丁各級撰手競走、是又會員席の動搖一方ならず、鼻息荒く、我先にと、他を押し分けて進み出で、青—青—、白—白—、と呼び叫ぶ聲なりもやまず、鈴鳴り、砲響き、各級の撰手は砂を蹴り、風を切りて駆け行く中に、眞先に進むは誰ぞ、紅、紅、紅、紫之に次ぐ、豫科三年の聲起る、咄嗟、紅は半週の所にして躓き僵れぬ、紫進む、次ぐものは誰ぞ、緑、白又之に次ぐ、機、機、機、機、危機一髪、會

員は總立となる、決勝線に紅旗は動かされぬ、紫の爲に動かされたるなり、尋で白旗は振られぬ、緑の爲に振られたるなり、白は後るゝ事一間、無限の遺憾を抱きて退きぬ、

一等(紫)豫備一級 柳田 友麿、

二等(緑)大學豫科一年 佐藤龜久二

忽ちにして會員席に數流の紫旗翻りぬ、各級撰手競走の一等は共に紫に落ちたるなり、級生諸氏が歡極りて狂せるが如きもの、又無理ならずといふべし、勝者は胸間にメダル燦き、希臘の昔、オリムピヤの祭日に桂冠得たるにもまさる名譽を其身に集め、萬歳聲裡、人々に高く擁せられて、得意の状、思ひやるに餘あり、今や、四十餘回の競技は、首尾よく終りぬ、鳴鈴數聲、閉會は報せられ、數萬の縱覽者は、潮の如く一時に動き初めて、凱旋門の邊は特に雜沓を極めしが、數十分の後には、又隻影を止めざるに至りぬ、

祝宴會

既にして會員一同場の中央に方陣を作り、祝宴會を開く、會長大島氏、まづ立つて盃を上げ、謹んで 陛下の萬歳、皇軍の萬歳を三唱し、一同是に和して聲天地を動かし、權現堂の鴉の夢や破りけむ、かくて何れも打くつろぎ、且つ食ひ且つ飲む、肴はこれ粗なれども、満足の情は人々の唇頭に溢れ、和氣靄然として、樂むこと甚し、

時に暮色は蒼然として環宇を包み、入り残りたる六日の月、鮮光斜に西の空に懸れり、其昔猶太人がパレスタインの丘上、篝火の前に跪て神に祈りし時、源三位が大床に伺候して、ほとゝぎす、名をば雲井にあげにけりと詠ぜし時、弦月は幾多の歴史を有し、吾人をして云ふべからざるの興味を感ぜしむ、嗚呼我忠勇絶倫の軍人は、今、遠く異域の地にありて、蠻烟瘴雨の間に出入し、陣頭馬嘶白き所、將にこの月に嘯き、翻つ

て遙かに故郷の空を眺め、伏して 陛下の萬歳を祈りつゝあるにはあらずや、時に一人の立て歌ふ者あり、歌に曰く、

頌德歌(土方宮内大臣之作)

威德兼全武與文

維新大業世驚聞

扶弱情如憐幼者

挫強勢似逐群羊

空前絶後英明王

有此空前絶後勳

彼を誰とかなす、佐野安麿氏其人にはあらずや、吾人此空前絶後の聖代に生れて、此勇壯なる盛會に列するもの、此詩をきいて果して何等の感慨がある、覺へず襟を正して跪坐し、涙の泣然として下るを禁ずる事能はざるなり、

一人あり、鈴を叩て且つ踊り且つ歌ふ、其素振の奇妙人をして腹を抱えしむ、此滑稽なる愛嬌見は是れ誰ぞ、眸を定めて熟視すれば、焉んぞ知らん、時習寮の小使柿澤君ならんとは、柿澤君萬福の聲響く、彼は驚き狼狽て、鼠の如く逃げ去りし姿の可笑味、又どつと笑を催さしめぬ、

堀尾氏起つて二十年前跨征鞍の詩を舞ふ、老壯士剣を翳して落花に舞ひ、慷慨悲憤、涙滂沱たる狀真に逼れり、

劍客秦氏又舞ふ、詩に曰く、

秋水凝霜斬美人

隊震伍儼鼓聲新

啼鵑月朗輝功士

薙草餓饑燒叛民

孤劍投時潮去盡

長蛇逸處星流羨

世清未尙方請

一畫吹毛碧玉春

時に弦月將に落ちんとして未だ落ちず、徐ろに彼梢頭を徘徊して、斜に其半面を映、秋水一閃して月を斬れり、

ば、長蛇逸し流星飛び、風に嗽々として音あり、思ふ疇昔、周郎が舷頭槩を横へて月明を吟ぜし時、不識庵が陣中月に嘯て家郷憶遠征と詠ぜし時、古英雄の風采、眼界に彷彿し來りて、無限の情趣を感ぜしむ、秋山氏又舞ふ、得意の好音、しかも得意の詩を吟じて曰く、

海城寒拆月生潮

波際連檣影動搖

自是二千三百里

北辰直下建銅標

喉頭玉を轉すが如く、流麗優暢、空行く雲もしばし止まり、心なき鳥までも、翅收めて傾聴しぬらん、其擧作の閑雅なる、進退の靜肅なる、見る者感に堪へず、

酒あり、人娛み人樂む、顔漸く櫻色を染め、足既に踟躕たる時、一人吟ずれば一人起つて舞ひ、月の前の秋の宴、興盡き去るの期はなけれども、如何せん、落日の餘光全く消えて、月も程なく西海に沈みぬ、花なき秋のゆうべの暮るれば力なく、今はとて會員各退散し、跡は寂寞として人影なく、唯歸り行く人々の吟聲斷續雲に入りて、風に傳はり來るあるのみ、

日は恰も、我帝國の史上に特筆大書せらるべき、明治廿七年の天長節にして、又斯の如き秋晴の好天氣は此地方に稀なる所なり、入場者の數は幾萬に達し、百般の準備悉く完全して運動者の熱心を満足せしめ、以て本校未曾有の盛會を致しぬ、満足の聲は到る所に響き亘れり、嗚呼満足満足、余も亦溢れ返る満足の情を筆に漏して、此に其記事を書き了りぬ、唯余の不文不才、當日盛況の萬一を描く筆なきを憾とするのみ、

當夜時習寮茶話會概況 (寮生某投)

當日の運動場裡に於ける時習寮生の高名手柄は實に拔群なるものありき、多數の賞牌と無數の賞品とは首尾よく時習寮生の手落ちき、寮生の催に係る劍舞二番は空前の大喝采を尾山城下に反響せしめき、寮生の寄

附に係る喫茶店は來賓諸氏の高顧に浴してこよなき面目を施しき、舎監を初め苟も籍を寮に置くものをして満悦措く所を忘れしめしもの固より其所なり。遂に大に祝す可きなりとて、斯盛なる運動會が黄昏散會を告ぐるを待ちて、時習寮食堂裡に臨時茶話會を催しぬ。而校長閣下を初め寮に縁故ある職員諸氏は大抵寮生の招待に應じて來臨の榮を賜へるのみか、我寮生が益躰育に淬礪し運動場裡尙一層の光彩を放たむ事の囑望を述べられき、寮生たるもの如何の感をか懐いて之を觀之を聽きしぞ。殊に岡村教授は先生近作の新躰詩を朗讀せられしに、明月に對して征清軍士を想ふの處に至り、一句は一句より感迫り一段は一段より拍手の音を高めたり。誰か測らむ科學專攻の教授にしてしかく天來の妙詩想を筆に驅り口に吟じ人をして英雄胸中有閑日月の句を想はしむる底の大々の隱藝あらむとは。次に大島校長並秋山教授の吟詩ありき、嘲朗たる其音吐瀟洒たる其容姿方には是れ虎嘯き龍躍るもの、滿坐肅として儀容を更むるの時、覺えず卓を拍て快哉を絶叫せしもありき。更に寮生交々起ちて舞ひ坐して吟ずるに至りては萬福聲裡唯拍手喝采の愈高く起るを聞くのみなりき、興涯なく時に限あり、午後八時愛を割きて散會しき。



南山搏虎虎悲叫

北海屠龍々吐虹

一瓢美酒晴朗夜

嘯向天邊大月高

山本氏の朱鞘は殊に人目を惹きたりき、

第三十七回、來賓職員二丁競走、競技を試みしは次の諸氏なりき、

- | | | |
|-------------|-------------|-------------|
| 陸軍少尉 津山 樸太郎 | 全軍 曹澤 賢吉 | 北國新聞社 石橋 友吉 |
| 舊職員 飯森 益太郎 | 醫學部職員 田中 正鐔 | 本部職員 岡村 金太郎 |
| 全 田中 鐵吉 | 全 日下 庄太郎 | 全 野村 攬衆 |
| 全 橋 船次郎 | 全 坂井 乙吾 | 全 山瀬 時吉 |
| 全 宮地 彦八郎 | 全 廣瀬 仙太郎 | |

赴々たる武夫、侃々たる學者、諸氏の場に現はるゝや、拍手又起り、掛聲盛に聞ゆ、流石は武人、一等賞は津山氏之を握り、二等、三等は本部職員の手に落ちたり、

一等 津山 樸三郎、二等 廣瀬 仙太郎、三等 日下 庄太郎

第三十八回、竿飛、是は競技中、尤も目覺しきものなるべし、青は七尺五寸にして僵れ、黒と淺黄は九尺にして僵れ、一丈にして紅僵る、竿の長さは一丈三寸なるに、淡紅は大膽にも、一丈五寸を試みんとし、竿を以て繩の高さを測り見しに、及ばざる事二寸、觀る者惘然として聲あり、氏は之には蹉躓せりと雖も、一等賞は難なく其手に歸したり、

一等(淡紅)安藤 豊、二等(紅)中屋 重樹

第三十九回、來賓學生四丁競走、流石は各校中第一流の競技者、場に整列するや、學生席より聲援頻りに起

り、無關係なる我等まで、それ〴〵校名を呼び、朝色を呼びて勵ましぬ、一週目には白、白、緑の順なりしが、二週目に至り白、黄、緑となる、此時白の梅林氏が、他の白を衝き除けて、走り抜しとの聲起り、一時は囂々たりしも、判定係の意見によりて、メダルは遂に白に歸したり、勝ちたる校の席には拍手沸き、歡聲潮の如くなるに引換へ、後れたる校の席には、悄然として音なく、人々無念の涙を吞めり、

一等(白)尋常師範學校 梅林秀太郎、

二等(黄)私立北陸學校 黒坂登美雄

三等(緑)尋常中學校 三橋篤敬

第四十回、障害物各級撰手競走、今や残れる二回は各級運命の係る所、滿場俄に色めきて、活氣を添へ來りぬ、砲聲一發、各級の精を抜き、粹を集めたる十人の撰手、烈風の如く駈け出るや、會員席より、帽を振り、手巾を動かし、聲を枯して叫べるは側目には狂せる者の如くなるべし、網に先んぜしもの柵に後れ、横木に後れしもの垣に追ひ抜き、其度毎に人をして肝を冷し、手に汗を握らしむ、數萬の觀者、又聲々に呼はり〴〵、其音山河を動かし、耳を聳するばかりなりしが、それも須臾にしてやみ、一等は紫、二等は紅の手に落ちぬ、

一等(紫)豫備一級 安藤 豊

二等(紅)大學豫科三年 若林彌一郎

第四十一回、四丁各級撰手競走、是又會員席の動搖一方ならず、鼻息荒く、我先にと、他を押し分けて進み出で、青—青—、白—白—、と呼び叫ぶ聲なりもやまず、鈴鳴り、砲響き、各級の撰手は砂を蹴り、風を切りて駈け行く中に、真先に進むは誰ぞ、紅、紅、紅、紫之に次ぐ、豫科三年の聲起る、咄嗟、紅は半週の所にして躓き僵れぬ、紫進む、次ぐものは誰ぞ、緑、白又之に次ぐ、機、機、機、機、危機一髪、會

員は總立となる、決勝線に紅旗は動かされぬ、紫の爲に動かされたるなり、尋で白旗は振られぬ、緑の爲に振られたるなり、白は後る、事一間、無限の遺憾を抱きて退きぬ、

一等(紫)豫備一級 柳田友麿、

二等(緑)大學豫科一年 佐藤龜久二

忽ちにして會員席に數流の紫旗驕りぬ、各級撰手競走の一等は共に紫に落ちたるなり、級生諸氏が歡極りて狂せるが如きもの、又無理ならずといふべし、勝者は胸間にメダル燦き、希臘の昔、オリムピアの祭日に桂冠得たるにもまさる名譽を其身に集め、萬歳聲裡、人々に高く擁せられて、得意の狀、思ひやるに餘あり、今や、四十餘回の競技は、首尾よく終りぬ、鳴鈴數聲、閉會は報せられ、數萬の縱覽者は、潮の如く一時に動き初めて、凱旋門の邊は特に雜沓を極めしが、數十分の後には、又隻影を止めざるに至りぬ、

祝宴會

既にして會員一同場の中央に方陣を作り、祝宴會を開く、會長大島氏、まづ立つて盃を上げ、謹んで陛下の萬歳、皇軍の萬歳を三唱し、一同是に和して聲天地を動かし、權現堂の鴉の夢や破りけむ、かくて何れも打くつろぎ、且つ食ひ且つ飲む、肴はこれ粗なれども、満足の情は人々の唇頭に溢れ、和氣靄然として、樂むこと甚し、

時に暮色は蒼然として環宇を包み、入り残りたる六日の月、鮮光斜に西の空に懸れり、其昔猶太人がパレンスタインの丘上、篝火の前に跪て神に祈りし時、源三位が大床に伺候して、ほとゝぎす、名をば雲井にあげにけりと詠せし時、弦月は幾多の歴史を有し、吾人をして云ふべからざるの興味を感ぜしむ、嗚呼我忠勇絶倫の軍人は、今、遠く異域の地にありて、蠻烟瘴雨の間に出入し、陣頭馬嘶白き所、將にこの月に嘯き、驕つ

て遙かに故郷の空を眺め、伏して 陛下の萬歳を祈りつゝあるにはあらずや、時に一人の立て歌ふ者あり、歌に曰く、

頌德歌(土方宮内大臣之作)

威德兼全武與文

扶弱情如憐幼者

挫強勢似逐群羊

空前絶後英明王

維新大業世驚聞

有此空前絶後勳

彼を誰とかなす、佐野安麿氏其人にはあらずや、吾人此空前絶後の聖代に生れて、此勇壯なる盛會に列するもの、此詩をききて果して何等の感慨かある、覺へず襟を正して跪坐し、涙の泣然として下るを禁ずる事能はざるなり、

一人あり、鈴を叩て且つ踊り且つ歌ふ、其素振の奇妙人をして腹を抱えしむ、此滑稽なる愛嬌兒は是れ誰ぞ、眸を定めて熟視すれば、焉んぞ知らん、時習寮の小使柿澤君ならんとは、柿澤君萬福の聲響く、彼は驚き狼狽て、鼠の如く逃げ去りし姿の可笑味、又どつと笑を催さしめぬ、

堀尾氏起つて二十年前跨征鞍の詩を舞ふ、老壯士劍を翳して落花に舞ひ、慷慨悲憤、淚滂沱たる狀眞に逼れり、

劍客秦氏又舞ふ、詩に曰く、

秋水凝霜斬美人

隊雲伍儻鼓聲新

啼鵑月朗輝功士

薙草餘麟燒叛民

孤劍投時潮去盡

長蛇逸處星流臻

世清未尙方請

一畫吹毛碧玉春

時に弦月將に落ちんとして未だ落ちず、徐ろに彼梢頭を徘徊して、斜に其半面を映、秋水一閃して月を斬れ

ば、長蛇逸し流星飛び、風に嗽々として音あり、思ふ疇昔、周郎が舷頭槩を横へて月明を吟せし時、不識庵が陣中月に嘯て家郷憶遠征と詠せし時、古英雄の風采、眼界に彷彿し來りて、無限の情趣を感ぜしむ、秋山氏又舞ふ、得意の好音、しかも得意の詩を吟じて曰く、

海城寒拆月生潮

波際連櫓影動搖

自是二千三百里

北辰直下建銅標

喉頭玉を轉すが如く、流麗優暢、空行く雲もしばし止まり、心なき鳥までも、翅收めて傾聴しぬらん、其舉作の閑雅なる、進退の靜肅なる、見る者感に堪へず、

酒あり、人娛み人樂む、顔漸く櫻色を染め、足既に踟躕たる時、一人吟ずれば一人起つて舞ひ、月の前の秋の宴、興盡き去るの期はなけれども、如何せん、落日の餘光全く消えて、月も程なく西海に沈みぬ、花なき秋のゆうべの暮るれば力なく、今はとて會員各退散し、跡は寂寞として人影なく、唯歸り行く人々の吟聲斷續雲に入りて、風に傳はり來るあるのみ、

日は恰も、我帝國の史上に特筆大書せらるべき、明治廿七年の天長節にして、又斯の如き秋晴の好天氣は此地方に稀なる所なり、入場者の數は幾萬に達し、百般の準備悉く完全して運動者の熱心を満足せしめ、以て本校未曾有の盛會を致しぬ、満足の聲は到る所に響き互れり、嗚呼満足満足、余も亦溢れ返る満足の情を筆に漏して、此に其記事を書き了りぬ、唯余の不文不才、當日盛況の萬一を描く筆なきを憾とするのみ、

當夜時習寮茶話會概況 (寮生某投)

當日の運動場裡に於ける時習寮生の高名手柄は實に拔群なるものありき、多數の賞牌と無數の賞品とは首尾よく時習寮生の手落ちなき、寮生の催に係る劍舞二番は空前の大喝采を尾山城下に反響せしめき、寮生の寄

附に係る興茶店は來賓諸氏の高顧に浴してこよなき面目を施しき、舎監を初め荷も籍を寮に置くものをして満悦措く所を忘れしめしもの固より其所なり。遂に大に祝す可きなりとて、斯盛なる運動會が黄昏散會を告ぐるを待ちて、時習寮食堂裡に臨時茶話會を催しぬ。而校長閣下を初め寮に縁故ある職員諸氏は大抵寮生の招待に應じて來臨の榮を賜へるのみか、我寮生が益躰育に淬礪し運動場裡尙一層の光彩を放たむ事の囑望を述べられき、寮生たるもの如何の感をか懐いて之を觀之を聴きしぞ。殊に岡村教授は先生近作の新躰詩を朗讀せられしに、明月に對して征清軍士を想ふの處に至り、一句は一句より感迫り一段は一段より拍手の音を高めたり。誰か測らむ科學專攻の教授にしてしかく天來の妙詩想を筆に驅り口に吟じ人をして英雄胸中有閑瀟瀟たる其容姿方にはれ虎嘯き龍躍るもの、満坐肅として儀容を更むるの時、覺えず卓を拍て快談を絶叫せしもありき。更に寮生交々起ちて舞ひ坐して吟ずるに至りては萬福聲裡唯拍手喝采の愈高く起るを聞くのみなりき、興涯なく時に限あり、午後八時愛を割きて散會しき。



第四高等學校北辰會々則

- 第一條 本會の目的は學藝を講究し體育を鍊磨し會員の徳性を涵養し以て純良なる美風を發揚するにあり
- 第二條 本會は第四高等學校北辰會と稱す
- 第三條 本會は其目的を達せんか爲め雜誌を發刊す
- 第四條 本會々員は左の四種より成立する者とす
 - 一、通常會員
 - 二、特別會員
 - 三、客員
 - 四、名譽會員
- 第五條 通常會員は本校本部生徒を以て之を組織す
- 第六條 特別會員は本校職員より客員は同舊職員生徒より成る

- 第七條 名譽會員は本會之を推戴するものとす
- 第八條 本會に左の三部を置く
 - 一、學藝部
 - 二、運動部
 - 三、雜誌部
- 第九條 學藝部運動部に左の諸小會を置く
 - 學藝部
 - 講談會、演說討論會
 - 運動部
 - ベースボール會、ロンドンニス會、フットボール會
- 第十條 本會に左の役員を置く
 - 會長 一名 副會長 一名
 - 部長 三名 評議員 若干名
 - 委員 若干名 書記 一名

主計 一名

第十一條 會長は本會の事務を總理す

第十二條 副會長は評議會を整理し會長を輔け本會に關する一般の事務を掌理す

第十三條 部長は各部一切の事務を總理す

第十四條 評議員は各級に三名を置き其級を代表し評議會に出席するものとす

第十五條 委員は雜誌部に七名各小會に三名を置き當該部會に關する事務を掌る

但部長の意見により増減するを得

第十六條 書記は本會一般の記録を掌る

第十七條 主計は本會全牀に關する會計事務を掌る

第十八條 會長は特別會員中に就き評議員之を推選し副會長部長書記及主計は特別會員中に就き會長之を依頼するものとす

委員は部長の推薦により會長之を命ず

第十九條 評議員は各級に於て撰擧するものとす

第二十條 評議員は各級に於て撰擧するものとす

第廿一條 評議會は評議員を以て之を組織す

第廿二條 評議會は時々必要に應じ會長之を召集す

第廿三條 評議會は本會に關する重要事件を審議決定するものとす

第廿四條 各部長は評議會に參列し其部を代表す

第廿五條 副會長部長書記主計の任期は各一ヶ年間とす

第廿六條 評議員委員の任期は各一ヶ年間とし委員は四月評議員は九月を以て改任す

第廿七條 本會々員は學藝部運動部の諸小會に入ることを得

第廿八條 雜誌部及各部小會規則は該部會之を定め會長の認可を受くるものとす

第廿九條 通常會員は會費として毎月金七錢を授業料納附日に本會主計に前納すべし

第三十條 特別會員は毎月定額を寄附するものとす

第卅一條 通常會員特別會員及名譽會員には本會の雜誌を頒つ

但客員にして雜誌を受けんと欲するものは一部に付金六錢(外に郵税貳錢)を前納すべし

第卅二條 雜誌部の費用は本會の經費を以て之を支辨し學藝部及運動部の費用は本會より之を補助するものとす

第卅三條 本會各年度の經費豫算は評議會に於て決定するものとす

各部長は其部の經費豫算案を提出する

ものとす

第卅四條 本會主計は收支決算表を作り之を評議會に報告するものとす

第卅五條 毎年秋期陸上運動大會を開き其規則は別に之を定む

第卅六條 本會々員は會員三十名以上の提議により評議會の決議を経て會長の認可を経るに非れば之を變更するを得ず

以上

明治廿八年二月

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌部規則

第一條 本部は北辰會々則第三條により毎月一回(但七月八月を除く)雜誌を發刊し會員に配布す

第二條 本會雜誌は北辰會雜誌と稱す

第三條 本部々長は本部一班の事務を總理す

第四條 委員を分て編輯委員及庶務委員とす

第五條 編輯委員は原稿の蒐集取捨等凡て雜誌の編輯を掌る

第六條 庶務委員は雜誌發行に關する一切の事務を掌る

第七條 編輯委員は全員之に當り庶務委員は前者の中より二名之を兼ねるものとす

第八條 本會々員は隨意雜誌に寄稿するを得但本部所定の原稿用紙に認るを要す

第九條 雜誌の材料に就き撰擇取捨するは一に委員の權限内にあり

第十條 本部は時々懸賞論文を募集し各専門教師の審査を経て優等者に賞を與ふるものとす

明治廿八年二月

北辰會雜誌部

本會職員姓名

- 會長 大島 誠治
- 副會長 秋山 正議
- 學藝部長 今井 省三
- 運動部長 木村 竹治郎
- 雜誌部長 浦井 鍾一郎
- 評議員 大學豫科第三年 堀内 秀太郎 前川 益以 能 與 作
- 全 第二年 佐藤 家太 水木 常信。山科 祐二
- 全 第一年 春秋 原在文 朝長 勘十郎 古澤 鍵次郎
- 豫 備第一級 中屋 重業 寺 西 倫 栗本 貫一
- 全 第二級 森部 孝郎 稻垣 文次郎 草野 繁

- 雜誌部委員 堀内 秀太郎 桐生 政次 能 與 作 阪本 健一
- 書記 藤井 鏡 中川 忠順 森山 守次 中村 孝 山瀬 時吉
- 學藝部及運動部各小會委員ハ未定ナリ

會員交名錄

特別會員

- | | | | |
|-----------|-----------|----------------|-----------|
| 校長 大島 誠治 | 教授 野田 貞 | 助教授 得田 耕 | 書記 宮地 彦八郎 |
| 教授 澤田 吾一 | 教授 村上 珍休 | 助教授 阪井 乙吾 | 書記 永山 一昌 |
| 教授 秋山 正議 | 教授 高橋 富兄 | 講師 安木田 賴方 | 書記 廣瀨 仙太郎 |
| 教授 今井 省三 | 助教授 德永 富 | 教員 野村 攬衆 | 書記 藤井 鏡 |
| 教授 福岡 清一郎 | 助教授 田中 鐵吉 | 副手 橋 船次郎 | 雇 近藤 茂一 |
| 教授 木村 竹治郎 | 助教授 佐野 安磨 | 副手 尾關 茂太郎 | 雇 山瀬 時吉 |
| 教授 岡村 金太郎 | 助教授 須藤 求馬 | 外國教師ゼームス、ムルドック | 雇 楠 正可 |
| 教授 浦井 鍾一郎 | 助教授 横井 琢磨 | 書記 森川 正名 | 雇 柿田 信行 |
| 教授 花輪 虎太郎 | 助教授 浦原 重實 | 書記 吉村 政行 | 雇 秦 秀穗 |

大學豫科
文科三年

通常會員

大學豫科
文科三年

大學豫科
文科二年

堀内秀太郎	相良步	飭谷辰三郎	中村可雄	桐生政次	島彌太郎	境長三郎	金森外見男	小原清吉	島田文之助	遠藤泰次郎	小島伊左美	上岡市太郎	青木儀太郎	能與作	白石正邦
鷲尾源次郎	村上辰午郎	宇野弘三郎	大林德太郎	門脇三德	春日圓城	高瀬武次郎	坂本健一	鹽井松太郎	西出辰次郎	中屋重樹	若林彌一郎	富田董	鈴木周二	小島甚太郎	前川益次
渡部鑄	本居庄吉	今岡純一郎	石黒爲次郎	西池氏交	高松德次郎	青山虎市	木部一枝	半田寅之助	中川詮吉	中村篤房	米九忠太郎	佐藤家太	池田愛輔	谷野作治	五十嵐嘉一
鶴見左吉雄	本多政好	三好久朋	田中正太郎	築山直彦	中大路正雄	赤松益二	佐藤信安	佐治修三	中谷正造	奥山萬次郎	飛石久太郎	中司正朔	谷野格	林安繁	茨木清次郎

大學豫科
文科二年

大學豫科
文科二年

大學豫科
文科一年

大學豫科
文科一年

小松信一	長連恒	富士澤信隆	中尾致審	中川忠順	加藤太郎	中尾熙九	石田莊二	森山守次	市村武	河野元三	中村孝	有馬祐政	松本榮一郎	岩田成實	信濃榮三郎	清水清藏
永木常信	眞田信太郎	土井良太郎	中屋重鑑	丹羽德藏	福庭誠一	小西虎藏	村上主一	多島與三	湯淺亮三	今川一	吉田弟彦	本多菊吉	恒田勝治	小西康政	山科祐二	朝長勘十郎
松島得男	長谷川茂一郎	森田喜三郎	林達爾	藤田茂	中村重吉	神澤唯治	新美徳太郎	堀尾揆一	高橋清一	脇田琥一	野村淳治	近藤常吉	香村茂富	橋本正治	松島重隆	里見元壽
住田寅二郎	島田忠真	新田覺二	山岸安郎	河口治平	中西喜久男	月村錠平	上田柱雄	坂本又平	武内梅吉	井上助市	池永四郎	石井瑠	伴房次郎	遠山熙	岡田光次	多田稔

大學豫科 園 千 秋
大學豫科 村上 貞 吉
大學豫科 福岡 祿 太郎
大學豫科 藤井 梅 三 郎
大學豫科 早瀬 完 二
大學豫科 近藤 篤 逸
大學豫科 佐藤 周 輔
大學豫科 鈴木 市 太 郎
大學豫科 佐々木 雄 二 郎
大學豫科 河野 通 九 郎
大學豫科 荻野 重 吉
大學豫科 佐藤 龜 久 次
大學豫科 杉山 安 春
大學豫科 河原 始 二
大學豫科 菊地 俊 諦
大學豫科 佐々木 政 直
大學豫科 加藤 直 久
大學豫科 宮 森 富 岐 雄
大學豫科 廣岡 元 二
大學豫科 春秋 原 在 文
大學豫科 石井 直 雄
大學豫科 石田 悟 雄
大學豫科 新田 德 德
大學豫科 戶村 義 保
大學豫科 笠原 箎 二
大學豫科 吉野 賢 輔
大學豫科 田中 禮 吉
大學豫科 遠藤 治 一
大學豫科 丸山 環
大學豫科 藤田 真 平
大學豫科 紀平 正 美
大學豫科 宮川 鼎
大學豫科 三浦 榮 五 郎
大學豫科 廣田 領 治
大學豫科 元田 龍 佐
大學豫科 鈴木 保 臣
大學豫科 石井 潔
大學豫科 矢浪 淑 次 郎
大學豫科 吉川 貞 次 郎
大學豫科 廣野 藤 吉
大學豫科 古澤 健 次 郎
大學豫科 宮川 重 太 郎
大學豫科 横田 茂
大學豫科 阿部 信 行
大學豫科 齊藤 敬 一 郎
大學豫科 島田 德 五 郎
大學豫科 永松 文 一
大學豫科 藤森 與 九 郎
大學豫科 山本 亥 太 郎
大學豫科 澤田 堅 太 郎
大學豫科 平澤 象 次 郎
大學豫科 竹俣 吉 松
大學豫科 橋本 貫
大學豫科 大塚 晃 長
大學豫科 遠藤 金 市
大學豫科 鹿取 龍 造
大學豫科 米村 敏 郎
大學豫科 横山 正 夫
大學豫科 瀧山 與
大學豫科 中村 與 一 郎
大學豫科 村橋 素 吉
大學豫科 山本 義 男
大學豫科 松浦 圓 四 郎
大學豫科 藤尾 惟 一
大學豫科 紅露 悌 吉
大學豫科 北川 董 吉
大學豫科 宮崎 逸 丸
大學豫科 三島 爲 雄

大學豫科 堀 覺 太 郎
大學豫科 山口 重 作
大學豫科 河野 義 雄
大學豫科 齋藤 賢 道
大學豫科 今井 三 郎
大學豫科 石田 他 孜 郎
大學豫科 河内 周 造
大學豫科 登石 善 次
大學豫科 今村 惠 梁
大學豫科 長島 清 松
大學豫科 齊木 政 吉
大學豫科 山本 信 夫
大學豫科 小川 得 藏
大學豫科 堀 保 次
大學豫科 北島 常 晴
大學豫科 丸山 義 男
大學豫科 荒木 茂 同
大學豫科 水 上 豊 太 郎
大學豫科 八木 桓 同
大學豫科 杉本 元 亞
大學豫科 原田 永 治
大學豫科 本莊 謙 三 郎
大學豫科 越智 儀 造
大學豫科 米山 彦 郎
大學豫科 横田 利 三 郎
大學豫科 青木 澤 五 郎
大學豫科 鱈川 行 道
大學豫科 戸川 文 次 郎
大學豫科 上村 勝 爾
大學豫科 矢部 成 行
大學豫科 野村 幸 太 郎
大學豫科 山縣 平 作
大學豫科 保坂 定 三 郎
大學豫科 鈴木 小 一 同
大學豫科 代田 研 豫 備 一 級
大學豫科 村上 孫 作 同
大學豫科 阿部 政 二 郎
大學豫科 松原 一 雄
大學豫科 老田 太 文
大學豫科 草鹿 砥 祐 吉
大學豫科 粟本 貫 一 同
大學豫科 寒川 安 太 郎
大學豫科 田中 崎 太 郎
大學豫科 淺田 八 十 太
大學豫科 紅林 豊 治
大學豫科 加藤 範 次 郎
大學豫科 下村 繁 太 郎
大學豫科 沼田 將 吉
大學豫科 吉田 哲 雄
大學豫科 石田 泰 同
大學豫科 田中 國 太 郎
大學豫科 宮北 友 吉
大學豫科 久保 田 整
大學豫科 石原 即 聞
大學豫科 水野 鶴 次 郎
大學豫科 笹島 愛 之 助
大學豫科 竹内 佐 太 郎
大學豫科 谷口 秀 夫
大學豫科 二宮 直 次 郎
大學豫科 菊地 林 作
大學豫科 赤澤 欽 次 郎
大學豫科 大石 雄 輔
大學豫科 大津 胖
大學豫科 梅野 盛 之 助
大學豫科 上杉 慎 吉
大學豫科 勝侯 又 四 郎
大學豫科 中屋 重 業
大學豫科 池田 亮 造

豫備二級 加藤 苞 同 八木 厚吉 同 豫備二級 河合 兵吾 同 豫備二級 山田 壯一郎 同
豫備二級 柏原 省私 同 阿部 道吉 同 堀井 治一郎 同 糸井 仙之助 同
同 月岡 真備 同 赤坐 脩吉 同 東方 伊三松 同 稻並 幸吉 同
同 中山 佐之助 同 野崎 安近 同 江間 圭一 同 石坂 尙次郎 同
同 中島 金熊 同 宮崎 友次郎 同 二宮 英雄 同 德岡 精彦 同
同 窪田 實同 長 餘三郎 同 柳田 友麿 同 鎌田 孝七 同
同 丸尾 晉 同 荒木 篤三郎 同 隈川 豐 同 津田 和成 同
同 深澤 新一郎 同 小林 郁 同 金澤 智融 同 內藤 昌太郎 同
同 五明 文平 同 伊藤 三郎 同 橋詰 益彌 同 永田 茂穗 同
同 小松 然三郎 同 高橋 堅 同 早川 外吉 同 野口 三四郎 同
同 寺崎 新策 同 湯川 宗理 同 鈴木 一吉 同 桑田 初太郎 同
同 淺井 道孝 同 中村 光吉 同 渡邊 忠壽 同 丸山 忠治 同
同 木村 德之助 同 齋藤 恒 同 近藤 他家雄 同 深津 傳 同
同 志賀 新 同 瀨戶 孝一郎 同 加藤 英重 同 小藤 孝德 同
同 島崎 行一 同 鷹取 鶴二郎 同 半田 正身 同 阿部 莊二 同
同 長澤 泰知 同 寺西 倫 同 益谷 太助 同 安藤 豐 同
同 山崎 靜 同 大森 保之助 同 彌宜 太一郎 同 岸 喜鑑 同

豫備一級 上條 韓治 同 豫備二級 今井 豐造 同 豫備二級 藤澤 舍人 同 豫備二級 長谷川 勝造 同
同 重嶺 一祐 同 坂本 康 同 小笠原 重喜 同 本間 等 同
豫備二級 黒田 太一郎 同 瀧波 岩六 同 高桑 確一 同 大島 正橘 同
同 森部 孝郎 同 大竹 源助 同 草野 繁 同 渡邊 格 同
同 柿原 龍彦 同 尾崎 逸平 同 磯部 鉄吉 同 勝野 誠吉 同
同 田中秋 實 同 川田 直清 同 野崎 喜多雄 同 高梨 恂一 同
同 松下 雅雄 同 高橋 享二 同 前田 貞昇 同 田宮 春策 同
同 草野 正義 同 高松 勇 同 北瀛 濟二郎 同 中山 文三郎 同
同 和久井 吾助 同 曾根 廉郎 同 服部 小市 同 浦井 鏘次 同
同 鈴木 寛 同 中山 清藏 同 寺西 佐吉 同 八木 重三郎 同
同 鈴木 啓治 同 幸島 貞次郎 同 樋口 重 同 松村 大吉 同
同 白石 久吉 同 小池 新作 同 長谷川 德義 同 秋山 信次 同
同 中野 鏡正 同 荒木 榮三郎 同 杉本 重太郎 同 澤崎 寛制 同
同 浦田 仙三 同 秋澤 眞猪 同 國門 開神 同 澤崎 寛制 同
同 稻垣 文次郎 同 三好 程次郎 同 芝 惠 舜 同 澤崎 寛制 同
同 野村 亭 同 日野 則成 同 畑 惣之助 同 澤崎 寛制 同
同 福岡 外 同 菅原 謙之輔 同 服部 貞二 同 澤崎 寛制 同



稟告

北辰會既に成立し今や其雜誌の第一號を發刊す會員諸君の名篇玉作机土に積んで山を爲すも奈何せん本誌には紙數限りあり經費定めあり悉く載せて以て本號の光彩を煥發せしむると能はざりしは深く吾人の憾む所なり諸君願くは事情を諒知し今後益健筆を揮ふて盡すあらば豈獨り吾人の幸ひなるのみならんや吾人の不肖なるも亦益駑鈍を鼓して盡瘁せん敢て告ぐ

雜誌部委員

投書心得

一 投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし
一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せず
一 雜誌上には雅號のみを記載するを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
一 學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたし勿論言の或は政治を論じ或は徳義に背くものは一切掲載いたさざるへし

明治二十八年三月九日印刷
明治二十八年三月十二日發行

編輯兼發行者

中川忠順

金澤市五十人町十一番地

印刷者

中村孝

金澤市廣坂通第四高等學校時習寮

發行所

第四高等學校北辰會

印刷所

株式會社 秀英舍

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

明治廿八年 月 日 内務省許可